福岡市西部地区
埋蔵文化財調査報告
— II —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第213集

1989年

福岡市教育委員会

西部地区II　正誤表

頁	行	誤	正
例言		であり、真北との偏差は6度40分である。	である。また付図は真北である。
〃		太	大
4	8	海岸	海岸沿いの
PL8	右上	S×11	SK11
〃	〃	S×12	SK12
〃	中央	S×19	SK19
32	23	太	大
付図		弥生の墓棺墓域	弥生時代の甕棺墓域

NO.16810

福岡市西部地区
埋蔵文化財調査報告
— II —

1989年

福岡市教育委員会

序　　文

福岡市は1989年に市制100周年を迎え，21世紀に向けて海に開かれたアジアの拠点都市をめざして発展をつづけていますが，原遺跡群，別府遺跡の一帯は都心にも近く，とりわけ住宅地，商業地として発展している地域です。

今回の発掘調査は，昭和57年と61年に実施した民間の共同住宅建設にともなう調査です。特に別府地区での調査ははじめてで，当地区における弥生時代の生活状況の一部を知ることができました。

本書が市民の皆様に文化財の保護とともに学術研究の分野において，役に立てていただければ幸いです。調査に際して多くの方々のご協力に対し，心から謝意を表する次第であります。

平成元年３月31日

福岡市教育委員会

教育長　佐藤善郎

例　　言

1．本書は福岡市教育委員会が国庫補助事業として行った，福岡市西部地区（西区・早良区・城南区）の，埋蔵文化財緊急発掘調査報告書である。

2．本書には昭和57年度調査の原遺跡群第６次調査，別府遺跡第１次調査の調査記録を収録した。

3．遺構名称は以下のように記号化した。

土坑→SK，竪穴住居址→SC，井戸→SE，溝→SD，その他の土坑→ＳＸ，堀立柱建物→SB

4．本書に使用した地形図は国土地理院発行の「福岡市西部（１/25000）」を，図版の航空写真は昭和57年国土地理院撮影のものを使用した。

5．各遺跡の挿図の遺物番号は全体の通し番号で，それぞれの遺跡の写真図版中の遺物番号に一致する。

6．本書に使用した遺構図・現場写真は原６次調査が二宮忠司，山崎龍雄，別府遺跡が山崎，米倉秀紀，大内士郎，本多育央，清原ユリ子，金子由利子，宮原邦江があたった。

本書に使用した遺物実測図は，山崎，平川敬治，岡根なおみが作成し，別府の石器No.83は小畑弘己が行った。また遺物の写真は平川敬治が撮影した。

7．本書使用の図面の製図は山崎，岡根が行った。

8．本書に使用する基準方位は磁北であり，真北との偏差は西偏６度40分である。

9．出土した中世の輸入陶磁器の分類は太宰府史跡の分類を基準にした。

10．本報告の記録類・出土遺物は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵保管している。

また本書記載の遺物については，各遺物の登録番号を文末の一覧表で掲示している。

11．本書の執筆分担は以下のとおりである。

原第６次調査……山崎龍雄

別府第１次調査

第３章　土坑，包含層……米倉秀紀

上記以外……山崎龍雄

12．本書の編集は米倉と協議して山崎が行った。

原遺跡群第６次調査

調査地番号	分布地図番号	開発面積	調査対象面積	調査実施面積	調査期間	実働日数
早良区 原５丁目825－２	82－Ａ－２	1810,25㎡	800㎡	1,150㎡	1982年５月13～ ６月19日	28日

別府遺跡第１次調査

調査地番号	分布地図番号	開発面積	調査対象面積	調査実施面積	調査期間	実働日数
城南区 別府５丁目204，199	72－Ａ－３	1088,63㎡	550㎡	824㎡	1986年６月16日～ ７月22日	33日

本　文　目　次

原遺跡群第６次調査……1

第１章　はじめに……3
第２章　遺跡の立地と歴史的環境……4
第３章　調査の記録……7
１．調査の概要……7
２．出土遺構と遺物……8
第４章　小結……25

別府遺跡第１次調査……29

第１章　はじめに……31
第２章　遺跡の立地と歴史的環境……32
第３章　調査の記録……34
１．調査の概要……34
２．出土遺構と遺物……35
第４章　小結……56

挿　図　目　次

原遺跡第６次調査

Fig. 1　周辺の遺跡分布図（１/25000）……2
Fig. 2　原遺跡群調査地点分布図（１/5000）……5
Fig. 3　原遺跡群周辺旧地形図（１/5000）……6
Fig. 4　第６次調査遺構全体図（１/200）……折込み
Fig. 5　調査区周辺地形図（１/1000）……7
Fig. 6　SK02・04～06・08・19～21（１/40）……9
Fig. 7　SK07・10～13・15～18（１/50）……10
Fig. 8　SK04・07・11・12・21出土遺物（１/４）……11
Fig. 9　SK19　出土遺物（１/４）……12
Fig. 10　SK22～24（１/40）……13

Fig. 11 SE01～04（1/50）…… 15
Fig. 12 SE01土層図（1/40）…… 16
Fig. 13 SE01・02出土遺物（1/3，1/4）…… 17
Fig. 14 SE03・04出土遺跡（1/3，1/4）…… 18
Fig. 15 SB01～05（1/100）…… 20
Fig. 16 SD01～03土層（1/40）…… 21
Fig. 17 SD01～06出土遺物（1/4）…… 22
Fig. 18 SB01・ピット・遺構面・包含層出土遺物（1/4）…… 25
Fig. 19 第6地点主要遺構配置図（1/300）…… 27

別府遺跡第1次調査

Fig. 20 調査区遺構配置図（1/200）…… 30
Fig. 21 調査区周辺旧地形図（1/5000）…… 33
Fig. 22 調査区周辺現況図（1/5000）…… 33
Fig. 23 調査区周辺地形図（1/600）…… 34
Fig. 24 SC01とカマド（1/30，1/60）…… 35
Fig. 25 SC01出土遺物（1/4）…… 36
Fig. 26 SB01・02（1/100）…… 37
Fig. 27 SK01～03（1/30）…… 39
Fig. 28 SK01・02出土遺物（1/2，1/4）…… 40
Fig. 29 SK02・07・08出土遺物（1/3，1/4）…… 41
Fig. 30 SK03出土遺物I（1/4）…… 42
Fig. 31 SK03出土遺物II（1/4）…… 43
Fig. 32 SK03出土遺物III（1/5）…… 44
Fig. 33 SK04～06・09・11・12（1/40）…… 48
Fig. 34 SK07・08・10（1/50）…… 49
Fig. 35 SK08～10・SD07・ピット出土遺物（2/3，1/3，1/4）…… 50
Fig. 36 SD07土層（1/40）…… 52
Fig. 37 包含層出土遺物（1/4）…… 53
Fig. 38 遺構面出土遺物（2/3，1/4）…… 54
Fig. 39 包含層西側出土遺物（2/3）…… 55

図　版　目　次

原遺跡第６次調査

PL. 1　原遺跡群・別府遺跡周辺航空写真（昭和56年撮影）

PL. 2　(1)調査前全景（南東から）
(2)調査区全景（北東から）

PL. 3　(1)SB01・03（南東から）
(2)SB02・04（北から）

PL. 4　(1)SD01・03・04（東から）
(2)SD02（西から）
(3)SD03・04（南から）

PL. 5　(1)SK04（西から）　(2)SK06（北西から）　(3)SK19（東から）　(4)SK22（南から）

PL. 6　(1)SE01（南から）　(2)同木器出土状況　(3)SE04（南西から）　(4)同完堀状況（南西から）

PL. 7　(1)SE02・03（南から）　(2)SE02（南から）　(3)SE03（南から）　(4)SE03断ち割り状況（南から）

PL. 8　土坑・井戸出土遺物

PL. 9　井戸・溝・遺構面出土遺物

別府遺跡第１次調査

PL. 10　(1)調査区全景（北から）
(2)調査区全景（南東から）

PL. 11　(1)SD01（北から）
(2)SB01（西から）
(3)SB02（南から）

PL. 12　(1)SC01（北から）
(2)SC01カマド（北から）
(3)カマド断ち割り状況（北から）

PL. 13　(1)SK01（東から）　(2)SK02（南から）　(3)SK03（南西から）　(4)SK03完堀状況（南西から）

PL. 14　(1)SK07（北から）　(2)SK08（東から）　(3)SK09（南から）　(4)SK10（北から）
PL. 15　SC01・SK01・02出土遺物
PL. 16　SK03出土遺物
PL. 17　土坑・溝・包含層出土遺物
PL. 18　包含層・遺構面出土遺物

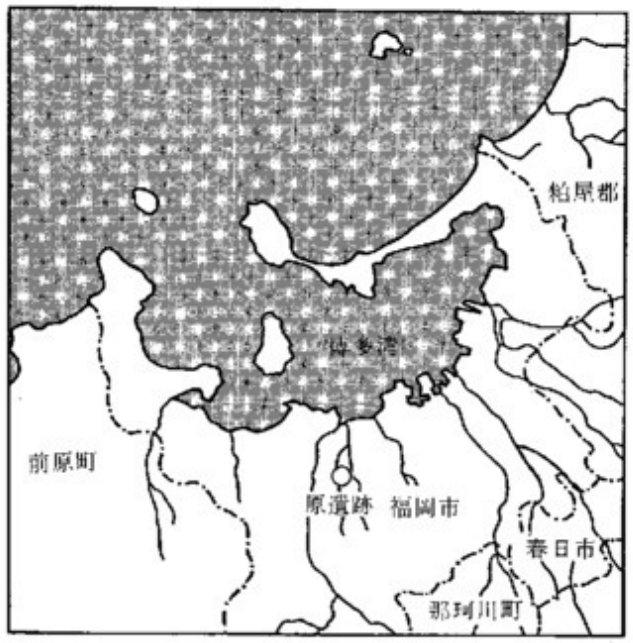
表　目　次

Tab. 1　原遺跡群調査地点一覧表 …… 6
Tab. 2　SE03井戸枠計測表 …… 18
Tab. 3　原第6次調査遺物登録対照表 …… 28
Tab. 4　別府第1次調査遺物登録対照表 …… 58

Hara

原　遺　跡　群

—第 6 次調査—



遺跡略号　HRA

遺跡番号　8217

1．原遺跡群　2．別府遺跡　3．西新町遺跡　4．藤崎遺跡　5．有田遺跡群　6．原東遺跡群
7．飯倉遺跡群　8．条山遺跡　9．京ノ隈古墳　10．田村遺跡群　11．5ヶ村池遺跡

Fig1　周辺の遺跡分布図（1/25,000）

第1章　はじめに

1．調査に至る経過

原遺跡群が立地する早良平野は福岡市の西部に位置し，国道202号線バイパスや福岡市営地下鉄線の開通によって急速に市街地化が進んでいる地域である。原遺跡群の調査は昭和50年の原談儀遺跡（第1次）調査を契機に現在迄13次の調査が行われている。それらの調査によって原遺跡群が弥生時代から中近世にかけての複合した遺跡である事が判って来ている。

今回の申請地は原地区集落の東側，稲塚川から100m程離れた地点にあり，調査する迄は水田であった。昭和56年に教委56－12－172で福岡市教育委員会文化課に地主の真鍋義弘氏より，当地に高層の共同住宅を建設する為の文化財事前調査願が申請された。昭和56年12月7日試掘調査を行ない遺構を確認した。その取扱いについて文化課は真鍋義弘氏と協議を行ない，発掘調査を行なう事となった。発掘調査は費用を一部国庫補助を受けて，昭和57年5月13日から6月19日迄行った。実働28日である。

また発掘調査にあたっては工事業者の熊栄建設より多大な援助を受けた。ここに記してお礼申し上げます。

調査体制

調査主体　福岡市教育委員会教育長　西津茂美
調査総括　文化課長　甲能貞行
第2係長　折尾学
調査庶務　埋文第1係　岡島洋一，岸田隆（現）
調査担当　埋文第2係　二宮忠司，山崎龍雄
整理補助　平川敬治（九州大学）
調査作業　牛尾準一，柴田大正，青柳恵子，石橋輝枝，緒方マサヨ，海津静江，倉光ユキエ，倉光三保，後藤ミサヲ，柴田勝子，柴田春代，新町ナツ子，寺崎キヌ子，平井和子，平田チヅ子，藤タケ，横溝恵美子
整理作業　池田礼子，井上マツミ，内尾トミ子，岡根なおみ，永井和子，仲前智江子，松下節子，吉田祝子，小金丸わかば

また近世陶磁器は佐賀県立九州陶磁文化会館の大橋康二氏に鑑定をお願いした。

第２章　遺跡の立地と歴史的環境

立地と歴史的環境（Fig.1）

原遺跡群は福岡市西部に広がる早良平野の中央やや東寄りに位置し，現在の海岸線より約1.75km離れた内陸部にある。現在の行政区分で言えば早良区原６丁目から７丁目一帯にあたり，その範囲は原の集落を中心に東西約400m，南北約600mに及ぶ。

早良平野は中央を南北に貫流する室見川と金屑川等の，大小河川によって形成された沖積平野である。原遺跡群はその室見川の東側を流れる金屑川の東，標高６～７mを測る低位段丘上にある。周辺の水田面との比高差は小さく，台地であることをほとんど感じさせない。

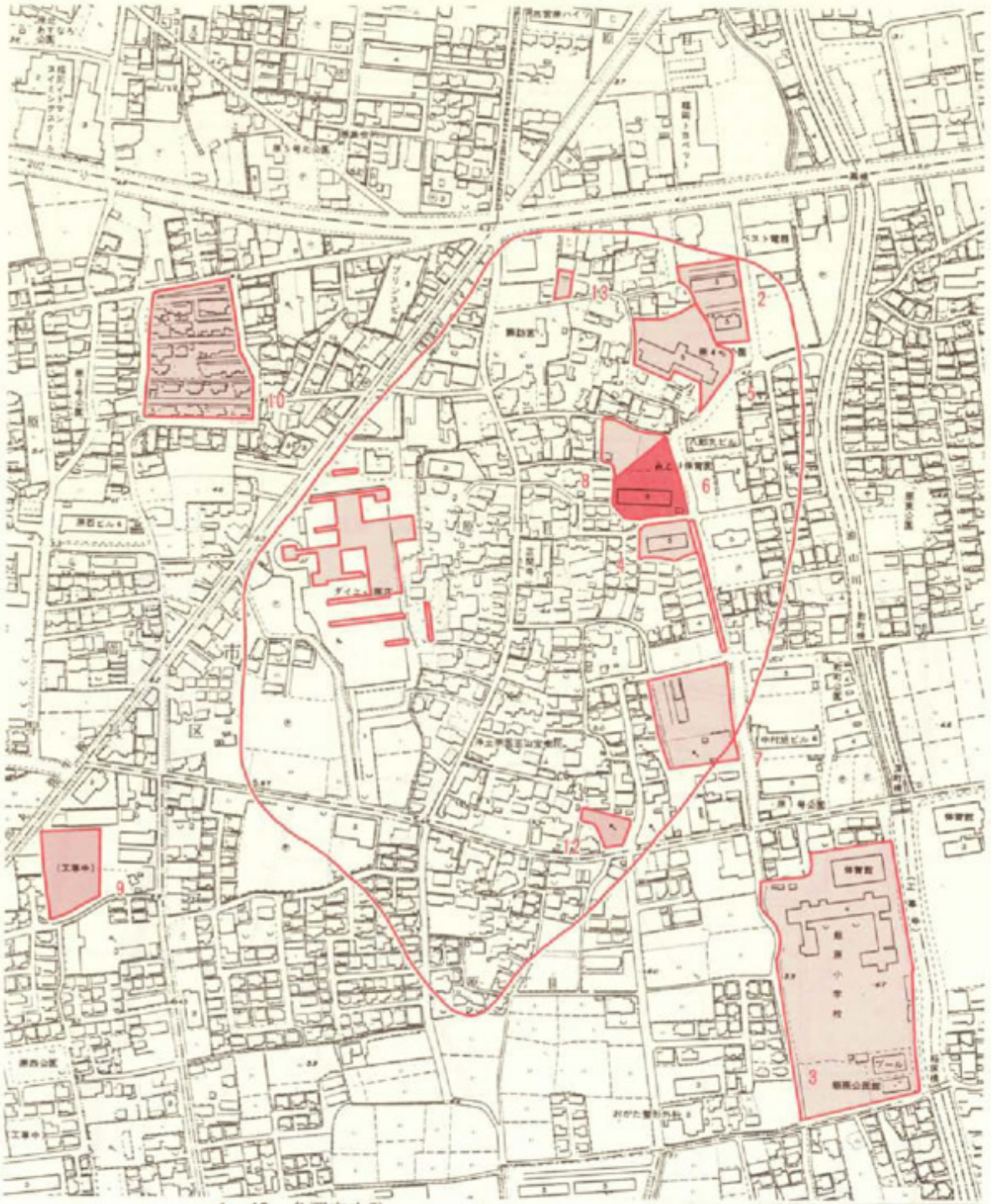
周辺の遺跡では金屑川を挟んで西側には有田遺跡群があり，現在迄第140次を越える調査によって，先土器時代から中近世に至る各時代の遺構が重複して発見されている[注1]。また北側の海岸砂丘上には，弥生時代から古墳時代にかけての遺跡で，方形周溝基から三角縁二神二車馬鏡が出土した藤崎遺跡[註2]や，弥生時代後期から古墳時代前期の集落遺跡の西新町遺跡[註3]がある。東側には細形銅剣が出土した飯倉遺跡や古墳時代初めの干隈古墳[註4]がある。南側には弥生時代の水田址が検出された鶴町遺跡[註5]，古代末から中世にかけての集落が出土した田村遺跡[註6]などがある。

原遺跡群の調査成果

原遺跡群はTab.1にあるように，1000m²以上の開発面積を対象にした調査の為，それ程調査数は多くなく，遺跡のくわしい性格については，まだ把握しえないところが多い。しかし第３，9[註7]，11次調査[註8]の成果によって従来の範囲よりはるかに拡大する事が判明して来ている。また現在迄の調査成果から，原遺跡群では縄文時代晩期末から遺構が確認されている。弥生時代から古墳時代にかけての集落遺構は，諏訪宮を中心とする集落の北側（第２，５，８，13次地点）で確認されている。第８次地点では弥生時代中期の甕棺墓群が発見されている。更に台地西端の原談儀遺跡や南側の原深町遺跡[註9]ではこの時代頃の水田址が検出されている。古代末から中近世に至ると，遺構は各調査地点で検出されており，遺跡群全域に及ぶと考えられる。原遺跡群内に残る小園，敷町，田中園，南屋敷などの字名から中世以降，在地の有力上豪・名主の屋敷が形成されていた事が推察出来る。

以上原遺跡群のこれまでの調査経過について述べたが，調査例も少なく，遺跡の性格や変遷についてまだまだ解明出来ない点も多い。原遺跡群の立地する原地区は地下鉄開通などによって，急速に都市化が進んでいる地区である。無秩序な開発による遺跡の消滅を防ぐために，文化財保護行政の更なる強化が望まれる。

原第６次調査



1～13　各調査次数

Fig. 2　原遺跡群調査地点分布図(1/5000)

調査次数	調査番号	所在地	申請面積(㎡)	調査面積(㎡)	調査原因	調査期間	備考
第1次	7505	早良区大字原詰儀田中園	10,700	3,584	店舗建設	1975.07 ～ 09	縄文後期包含層，奈良・平安水田面
第2次	7832	〃 原6丁目632－1	3,480	2,280	共同住宅建設	1978.03.19～ 05.02	弥生中期溝，奈良・平安以降の溝・建物
第3次	7919	〃 大字原深町588－1	17,003	3,000	学校建設	1979.08.21～ 12.20	古墳時代前期溝，田河川
第4次	8017	〃 原6丁目626－1・2	1,161	850	共同住宅建設	1980.07.04～ 08.21	平安・鎌倉時代土壙，ピット
第5次	8125	〃 原6丁目635	3,312	3,312	〃	1981.08.26～ 11.07	弥生中期から古墳時代住居址群
第6次	8217	〃 原6丁目825－2	1,883	1,150	〃	1982.05.22～ 06.17	平安から鎌倉時代建物，溝，井戸
第7次	8227	〃 原6丁目875－1	2,902	2,000	〃	1982.11.15～ 12.25	弥生から古墳時代溝，中世井戸，土壙
第8次	8427	〃 原6丁目805	1,027	600	専用住宅	1984.07.18～ 08.21	弥生中期墳帯，古墳時代溝
第9次	8428	〃 原8丁目1171－3	2,990	2,900	共同住宅建設	1984.11.21～85.01.23	弥生～古墳時代住居址，溝
第10次	8814	〃 原5丁目1225－7	8,574	5,241	市営住宅建設	1988.05.24～ 10.31	弥生前期末土壙，中世建物群，溝
第11次	8813	〃 原6丁目地内			下水道建設	1988.06.01～89.03.31	立会調査
第12次	8831	〃 原6丁目859－1	773	500	共同住宅建設	1988.08.23～ 10.15	中世建物，井戸，溝，柵列，土壙
第13次	8839	〃 原6丁目660－2外	477	80	店舗建設	1988.10.24～ 10.31	弥生中期住居址1，中世溝，土壙

Tab. 1　原遺跡群調査地区一覧表

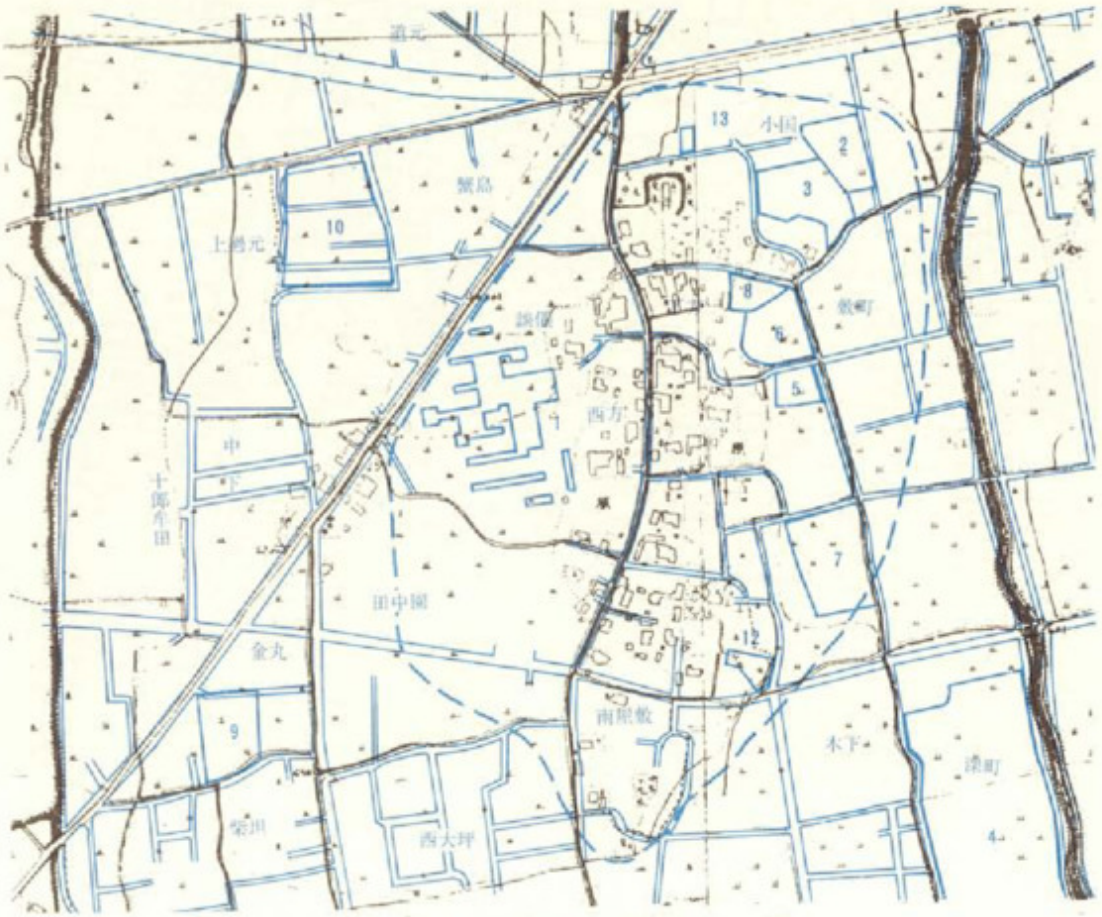


Fig. 3　原遺跡群周辺旧地形図（1/5000）

Fig. 4　第6次調査遺構全体図(1/200)

第3章　調査の記録

1．調査の概要

調査地は原遺跡群の東側に立地し，現状は水田であった。標高は5m前後で，西側が一段高く東へやや低くなる。試掘調査によって西側台地部分にピット・土坑等の遺構が検出されたため，西側半分を調査対象として調査を行った。開発面積は1810.25㎡であるが，表土除去の結果遺構が確認された部分を中心に1150㎡を調査した。

遺構面は西側台地部が表土15～20cmの下で，明黄褐色粘質土である。東側は一段低く，遺構面迄の深さは50cm前後となり，遺構面は黄褐色シルト質粘土である。遺構面迄の堆積土はいずれも水田土壌で，時期は判別出来ないが，2～3面の水田面が確認出来た。恐らく中世以降の水田面が調査区東半分に拡がっていたものと考えられる。

遺構は西側台地部に集中して検出された。主な検出遺構は堀立柱建物5棟，土坑17基，井戸4基，溝10条，畝状遺構などである。また東側半分を中心に風倒木の痕跡と思われる黒色の不定形状のしみが多く見られた。遺構の時代はSK19が古墳時代前期，SD06が江戸期の他は中世である。出土遺物は余り多くなく総量でコンテナ12箱である。

Fig.5　調査区周辺地形図(1/1000)

2．出土遺構と遺物

土坑（SK）

全部で21基検出した。全体的に浅く残りは余り良くない。SK01・03・09・14は井戸で欠番。SK15～17は浅く，地山の汚れと思われる。

SK02（Fig. 6）

平面形は略円形を呈し，平面規模は1.3×1.2m，深さは約0.2mを測る。底面は東側が一段高くテラス状を呈す。埋土は暗灰褐色砂礫混土で全体的によくしまる。

出土遺物　遺物は土師器，瓦器椀，白磁碗などの小片が少量あった。

SK04（Fig. 6，PL5）

平面形は不整円形を呈し，平面規模は1.2×1.3m，深さは約10cmで浅い。底面は平坦で中央に0.4×0.7m，深さ15cm程の不整方形状の落込みがある。埋土は暗灰褐色粘質土で上面に鉄分が沈着する。

出土遺物（Fig. 8，PL5）　少なく，龍泉窯系の青磁碗や，土師器皿片が3点と砂岩製の板状の石がある。01は龍泉窯系青磁碗Ⅰ類の底部片で，見込みに蓮花折枝文を描く。底径6.0cmを測る。内外面に厚めの黄緑釉がかかる。高台内に墨書の痕跡が残る。

SK05（Fig. 6）

平面形は不整円形を呈し，平面規模は1.2×0.9mを測り，深さは6cmと浅く，残りは悪い。底面は平坦で東側に直径35cm，深さ6cm位の円形のピット状の落込みがある。埋土は黒褐色砂混り粘質土である。

出土遺物　糸切りと思われる土師器皿片や須恵器片が7点あるが，いずれも細片である。

SK06（Fig. 6，PL5）

平面形は略円形を呈し，2段堀りである。平面規模は1.4×1.3m，深さ7cm，内部に1.0×0.85m，深さ15～25cmの楕円形を呈す土坑がある。この内部土坑の床面は南側で5cm程下がる。その中には10から20cm位の角礫，円礫が無造作に配されていた。

出土遺物　滑石製石鍋の底部細片，砥石片らしきものが各1点ある。

SK07（Fig. 7）

SE03を切る略長方形を呈する土坑で，平面規模は3.5×1.2mを測り，深さは5～10cmと浅い。底面は中央がやや深くなる。埋土は鉄分を含んだ灰褐色粘質土である。

出土遺物（Fig. 8）　白磁碗，土師器，須恵器が細片で少量出土した。02は白磁碗底部片で底径6.5cmを測る，太宰府史跡分類の白磁Ⅴ－3類に相当する。

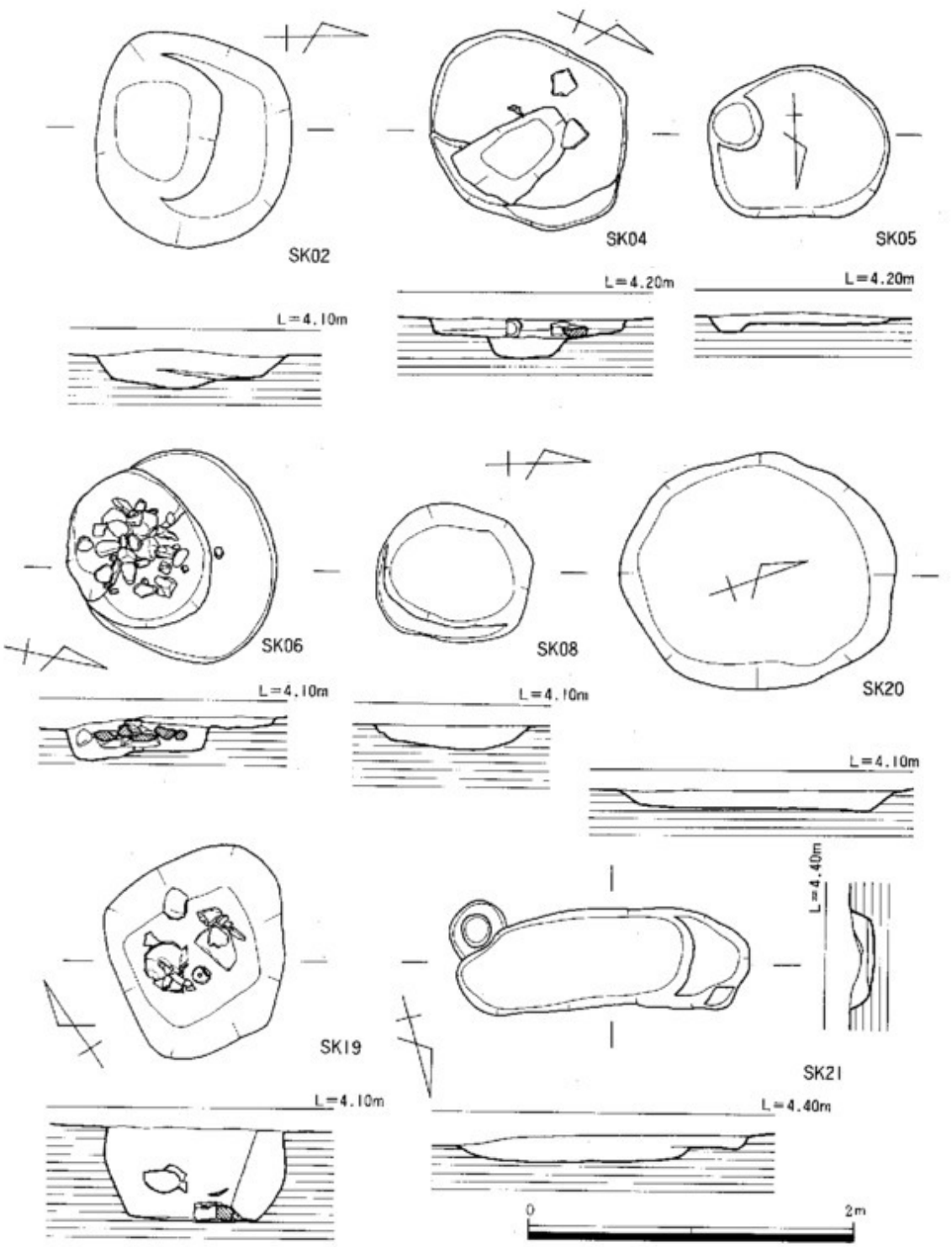


Fig. 6 SK02·04～06·08·19～21(1/40)

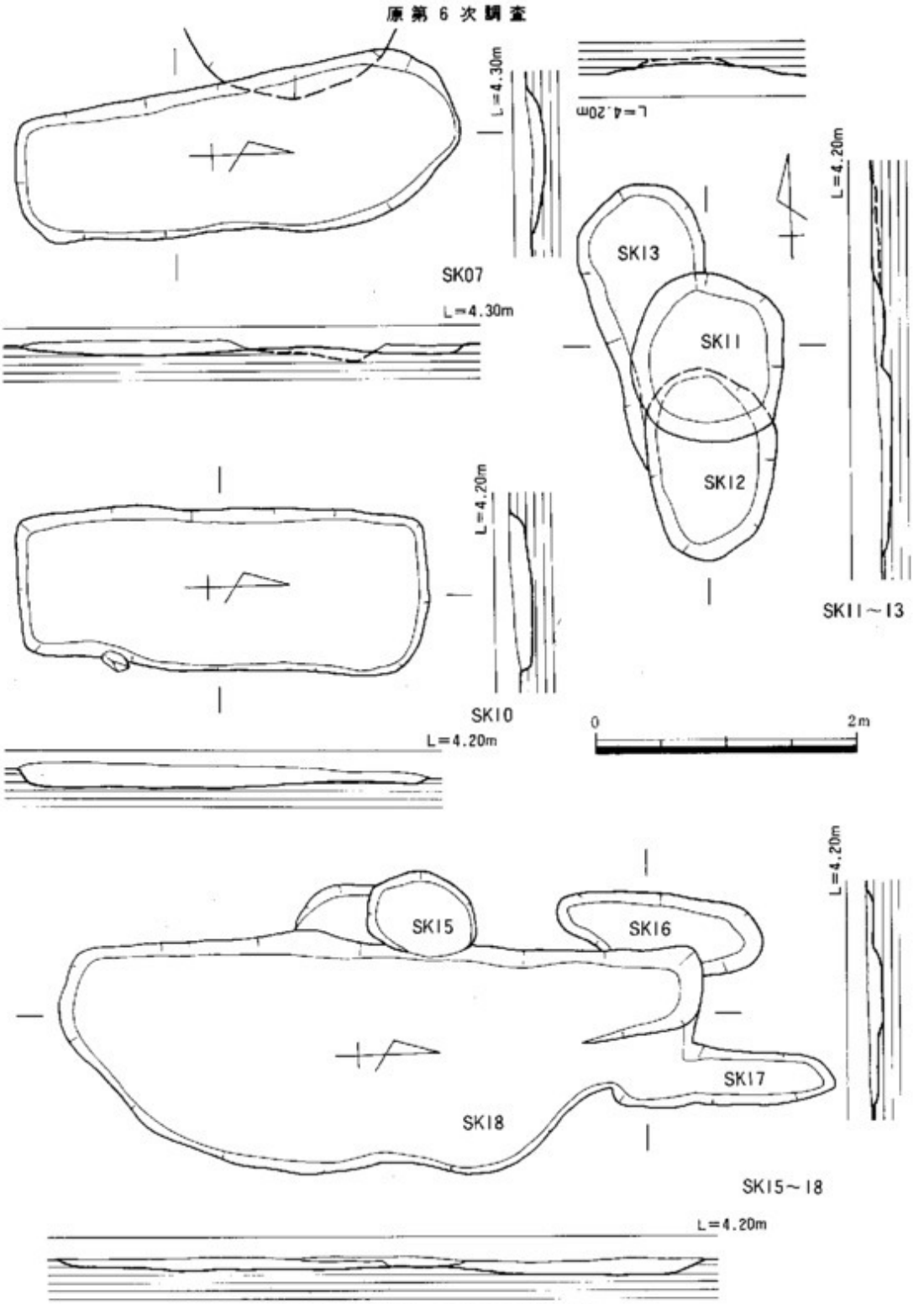


Fig.7 SK07·10～13·15～18(1/50)

SK08（Fig. 6）

平面形は略円形を呈し，平面規模は0.8×0.9mを測り，深さは中央で約15cmを測る。埋土は黄褐色地山ブロックを混入する暗灰褐色粘質土である。遺物はまったく出土しなかった。

SK10（Fig. 7）

平面形は長方形を呈し，略北に主軸を取る。平面規模は3.2×1.4mを測り，深さは5～20cmと浅い。底面はほぼ平坦であるが南から北へやや高くなる。埋土は粗砂である。

出土遺物　比較的多く，土師器や須恵器の細片が約60点出土した。

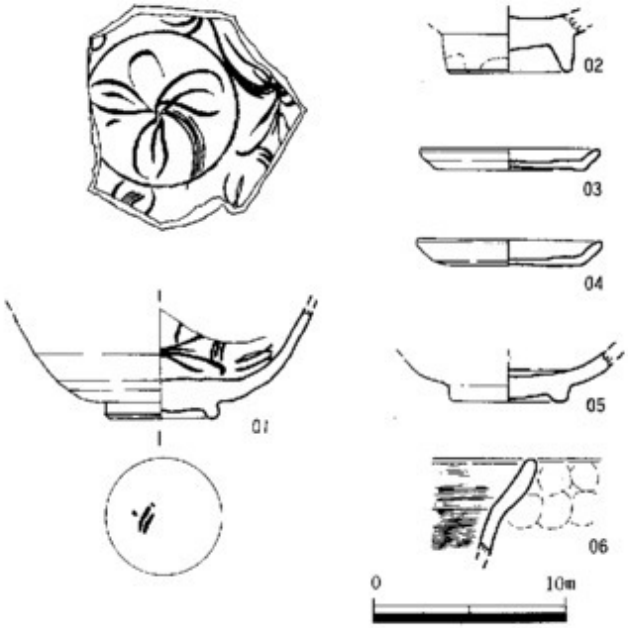


Fig. 8　SK04・07・11・12・21出土遺物(1/4)

SK11（Fig. 7）

SK12，13と切り合うが，SK11が一番新しい。平面形は円形を呈し，平面規模は1.2×1.2mを測り，深さは5cmと浅い。埋土は灰味をおびた暗灰褐色粘質土である。

出土遺物（Fig. 8，PL8）　少なく土師器皿や瓦器椀の細片が6点。03は土師器皿で口径9.4cm，器高1.1cmを測る。底部は糸切り。

SK12（Fig. 7）

SK13を切り，平面形は楕円形を呈し，平面規模は1.4×1.0m，深さは10cmを測る。底面はほぼ平坦である。埋土は黒褐色粘質土である。

出土遺物（Fig. 8，PL8）　少なく土師器皿片や青磁片が5点のみである。04は皿で復元口径は9.6cmを測り，03と口径の法量は余り差がない。05は青磁碗の底部片で，淡緑灰色釉がかかる。見込みに圏線が入る。

SK13（Fig. 7）

SK11，12に切られ，全体の規模は不明である。深さは5cm程度で浅い。床面はほぼ水平である。

出土遺物　少なく，土師器皿底部細片と須恵器細片が各1点出土した。

SK18（Fig. 7）

細長い不定形土坑である。平面規模は1.9×4.9mを測り，深さは7～8cmと浅い。底面はほぼ平坦である。埋土は暗茶褐色粘質土である。

出土遺物　土師器皿を含む土師器や，うち黒土器碗が細片で28点出土した。

SK19（Fig. 6，PL5）

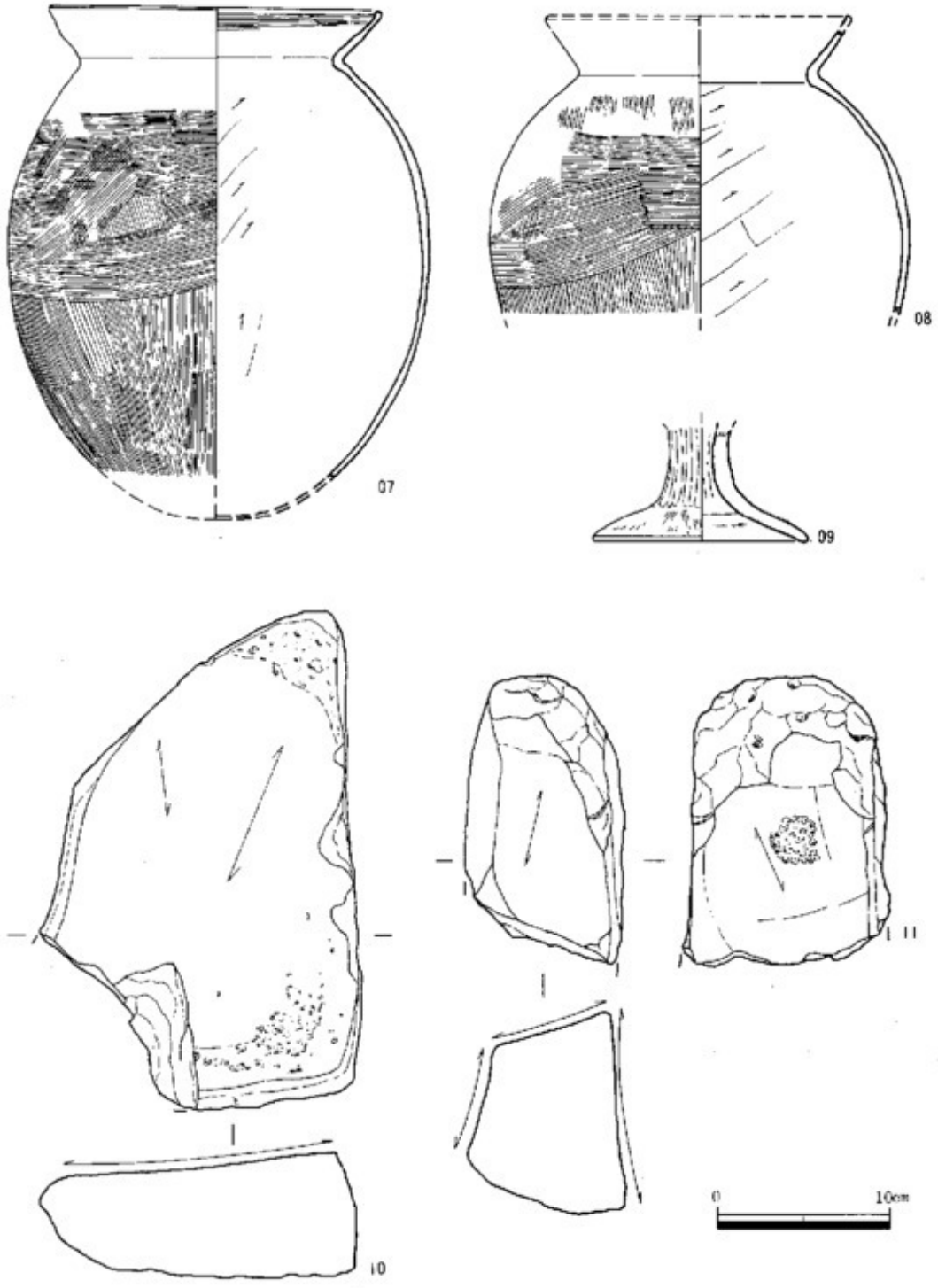


Fig. 9　SK19出土遺物(1/4)

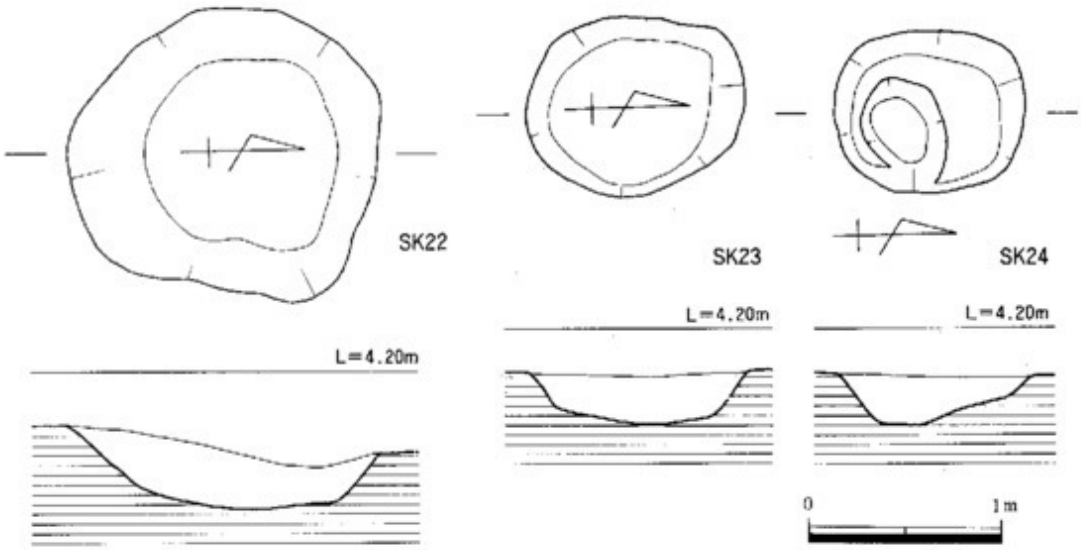


Fig. 10　SK22～24(1/40)

上・底面共略方形を呈し，平面規模は1.2×1.2mを測り，深さは60cmと深い。底面は中央がやや深くなる。埋土は大きく3層に分かれる。上層は暗茶褐色粘土を主体とし，上面には鉄分が沈着する。中層は淡灰褐色細砂や茶褐色粘質土，下層は黒褐色粘質土を主体とする。唯一古墳時代前期のものである。

出土遺物（Fig. 9，PL8）　中層から底面にかけて出土した。布留式並行期と思われる土師器甕2点と高坏1点，砥石2点などである。07・08は甕で，07は底部を欠失するが口径19.4cm，復元器高29.5cmを測る。胴部外面は上半にヨコ又はナナメハケ，下半にタテハケが入る。内面はヘラケズリ仕上。08は口縁部，胴下半部を欠損するが，調整は07とほぼ同じ，いずれも淡灰褐色を呈し，下半に煤が厚く付着する。09は高坏の脚部片である。脚裾部はやや内湾気味に開く。筒部外面はタテヘラケズリ。裾部はナデのちタテハケ。色調は明黄褐色を呈す。10，11は砂岩製砥石で，10は長さ29.0cm，幅18.3cm，厚さ7.0cmを測り，上面のみが使用面である。底面，各側辺は粗雑な調整である。11は現存長16.7cm，最大幅11.6cm，最大高11.4cmを測る。下半部を欠損する。使用面は上，左右両側辺の3面である。底面は粗割仕上げ。10より粒子が密で，仕上に使われたものであろうか。

SK20（Fig. 6）

平面形は楕円形を呈し，平面規模は1.7×1.4mを測り，深さは10cmと浅い。底面はほぼ水平である。埋土は暗灰褐色砂混り粘質土。

出土遺物　弥生時代中期初頃の甕の底部片が1点出土した。

SK21（Fig. 6）

平面形は長楕円形を呈し，東西方向に主軸を取る。平面規模は1.8×0.6m，深さは約15cmを

測る。西側は一段テラスを持つ。断面形は船底形を呈し，中央がやや深くなる。埋土は灰褐色粘質土である。土壙墓の可能性もある。

出土遺物（Fig. 8） 土師質土器の鍋や須恵器小片が少し出土した。06は土師質土器の鍋の口縁部片で内面は細かいヨコハケ調整である。

SK22（Fig. 10）

平面形は略円形を呈する土坑でSD01の底面から検出された。平面規模は1.7×1.4m，深さは40cmを測る。底面は中央が少し深くなる。埋土は上層が黒褐色粘質土，下層が暗茶褐色粘質土と暗青灰色粘土の混合である。浅い井戸の可能性がある。遺物の出土は少なく，土師器皿，碗の細片が数点出土した。

SK23（Fig. 10）

平面形は楕円形を呈し，平面規模は0.9×1.1m，深さは約25cmを測る。埋土は暗黒褐色粘質土で黄褐色粘土ブロックを混入する。土師器碗の細片が2点出土した。

SK24（Fig. 10）

平面形は楕円形を呈し，平面規模は0.8×1.0m，深さは25cmを測る。底面中央南寄りに0.6×0.4m，深さ12cmの楕円形の落込みがある。埋土は黒色砂混り粘質土を主体とする。

出土遺物 糸切りの土師器皿片3点と白磁の合子らしきものの細片が1点出土した。

井戸状遺構（SE）

西側で4基検出した。内2基は井戸枠が残っていた。いずれも湧水層の粗砂層迄掘り込む。

SK01（Fig. 11, 12, PL 6）

西側中央で検出した。平面形状は楕円形気味の円形で，規模は上面で2.9×2.6m，底面で1.4×1.2m，深さは1.2mを測る。上面の割に底面は狭くなる。灰褐色粗砂層迄堀込んでおり，湧水があった。井戸枠等はなかった。土層観察によれば埋土は大きく2分割出来，一度埋没した後再び掘直された状況を示している。

出土遺物（Fig. 13, PL 8） 土師器，須恵器，瓦器，中国産陶磁器，滑石製品が上層から比較的多く出土した。下層より曲物の蓋と思われる木製品が1点出土した。12・13は土師器皿で，復元口径は9.0cm，10.2cmを測る。いずれも糸切りである。14は土師器の坏で復元口径18.4cm，器高3.4cmを測り，底部は糸切りである。胎土に金雲母を含む。15は土師器の碗で，外方にハの字状に開く，やや高い高台がつく。16～18は瓦器碗で，いずれも断面三角形の小さい高台がつく。底径は復元で16が6.8cm，17が6.5cm，18が6.5cmを測る。19は内黒の碗でコ字状の低い高台がつく。内面はヘラ研磨，底径6.2cmを測る。20は端反りの白磁碗の口縁部でⅥ類に属す。復元口径16.9cmを測る。21～23は玉縁口縁の白磁碗口縁部片でⅣ類に属す。口径は復元で21が14.4cm，22が16.2cm，23が16.5cmである。24はくすんだ緑釉がかった陶器で鉢と思われる。復元口径19.8cm

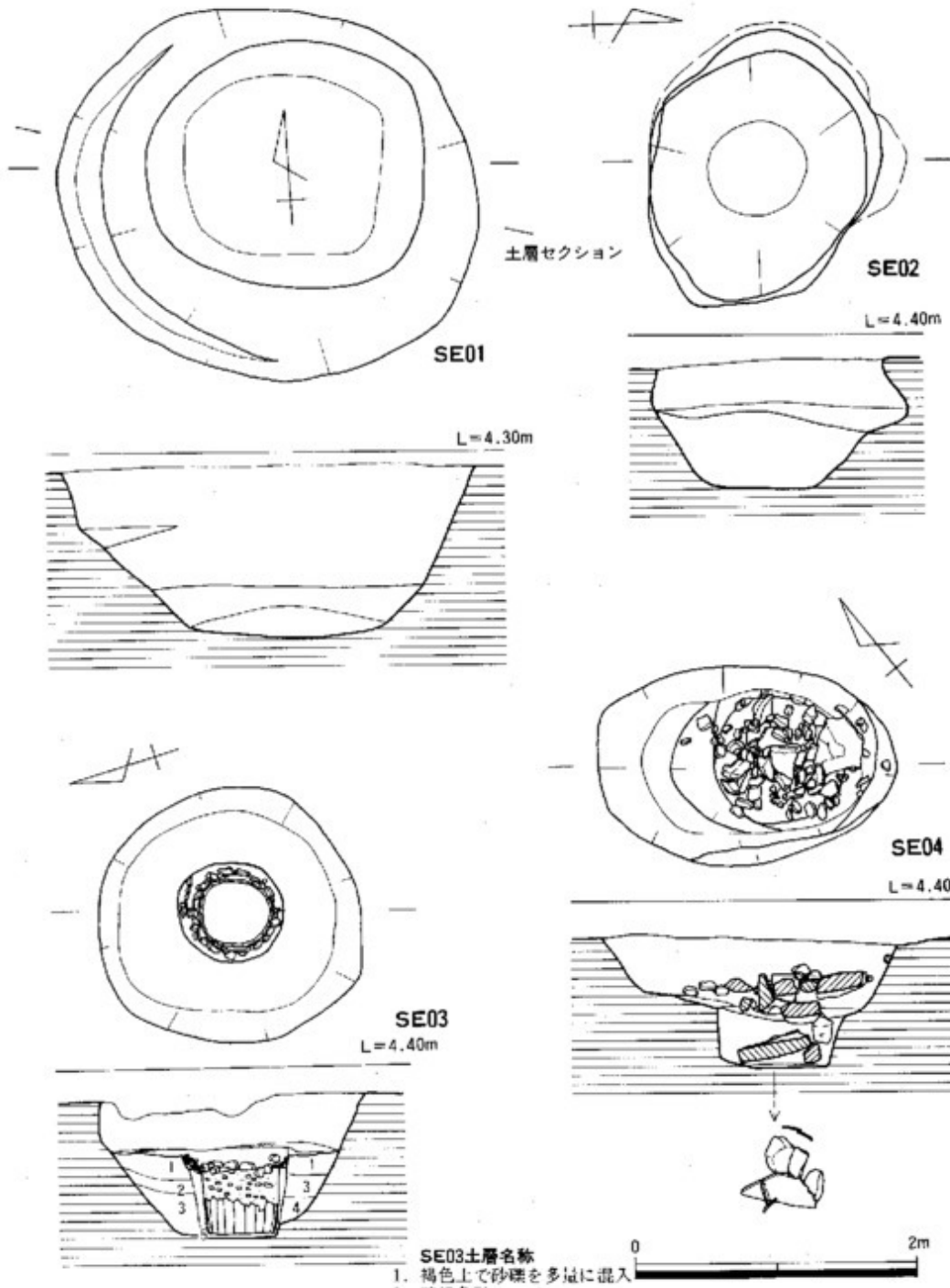
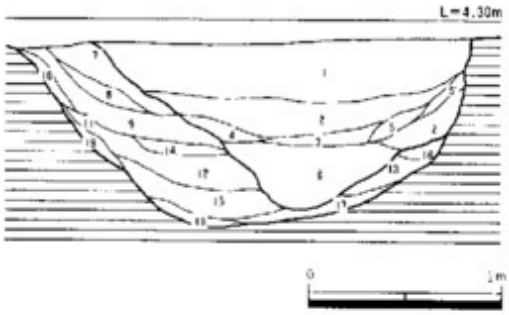


Fig. 11 SE01~04(1/50)



SE01 土層名称
1．暗褐色粘質土(礫，土器片混入)
2．1よりくらく砂粒が少ない(黄褐色地山小ブロック混入)
3．暗青灰粘質土(2より砂粒が少ない)
4．3に黒褐色粘質土ブロック混入(ほとんど砂粒を含まない)
5．2よりやや黒く黄褐色地山ブロック混入
5．5で黄褐色地山ブロックを多く混入
6．黒灰色粘土
7．茶褐色砂礫混土(固くパサパサする)
8．7に黄褐色地山ブロック，凝石混入
9．黒褐色礫混粘質土
10．黒褐色粘質土に黄褐色地山ブロック混入
11．黒色粘質土
12．淡黒灰色粘土に砂を混入(柔らかい)
13．青灰色粘土に黒灰色粘土混り(柔らかく，粘性強い)
14．赤褐色粗砂(鉄分を含む)
15．暗青灰色砂で暗青灰色粘土を混入
16．青灰色粘土と黒灰色粘質土の混入
17．やや暗い青灰色砂
18．17と暗青灰色粘土の混合
19．暗茶褐色粘質土に黄灰色地山ブロック混入

Fig. 12　SE01土層図(1/40)

を測る。中国産であろう。25・26は滑石製石鍋の口縁部片である。口径は25が19.6cm，26が35.8cmを測る。26は口縁部直下に幅2.0cm，高さ2.8cmの鍔が廻る。表面は工具による削り仕上である。内外面に煤が付着する。27は曲物の蓋の1/2片である。直径16.7cm，厚さ0.5cm測る。板目材である。

SE02（Fig. 11, PL 6）

調査区南西側SE03の西側で検出した。平面形は上面で楕円形，底面で円形を呈し，灰褐色粗砂層迄堀込んでいる。規模は上面で2.0×1.6m，底面で直径0.7m，深さは0.9mを測る。西から北壁が壊れており，西ないし北側から湧水があったと思われる。埋土の堆積状況は単純で，黒色粘質土を主体とし，上面は鉄分が沈着して固く，下層は黒灰色砂質土となる。全体的に10cm前後の小礫が混入していた。井戸枠等は確認出来なかった。

出土遺物（Fig. 13, PL 8）　それ程多くないが，土師器や黒色土器，青磁，須恵器片などがある。28は土師器皿で復元口径10.0cmを測る。底部に板目が残る。29は黒色土器椀で，復元口径14.4cmを測る。内外面ヨコ又はナナメのヘラ研磨。30は瓦器椀で復元底径7.8cmを測る。内湾気味に開く低い高台がつく。内外面ヘラ研磨。31はうち黒土器椀の底部片で，復元底径7.2cmを測り，外湾気味に開く高台がつく。体外面はヘラ研磨。32は滑石製石鍋の底部片。外面は工具によるケズリ，内面は研磨仕上であるが，工具痕が残る。外面には煤が付着する。

SE03（Fig. 11, Tab. 2, PL 7）

SE02の東側で検出した。SK07に切られる。平面形は円形を呈し，上面で直径1.9mを測る。深さは底迄1.0mを測る。天端より0.4m下った面で，ほぼ中央に直径約55cmで，21枚の板材を竹のタガで縦に組んだ桶巻の井戸枠を検出した。土層観察によれば，井戸はまず底から50cmの高さ迄，桶巻の井筒を置き，その周りは砂礫を交えた粘土で固く裏込めしている。その上面の井筒の周りには10cm前後の河原石をとり囲むように置いている。この面より上には直径65cmの井筒と思われる土壌が上からほぼ直に入っており，ひとまわり大きい井筒が据えつけられてい

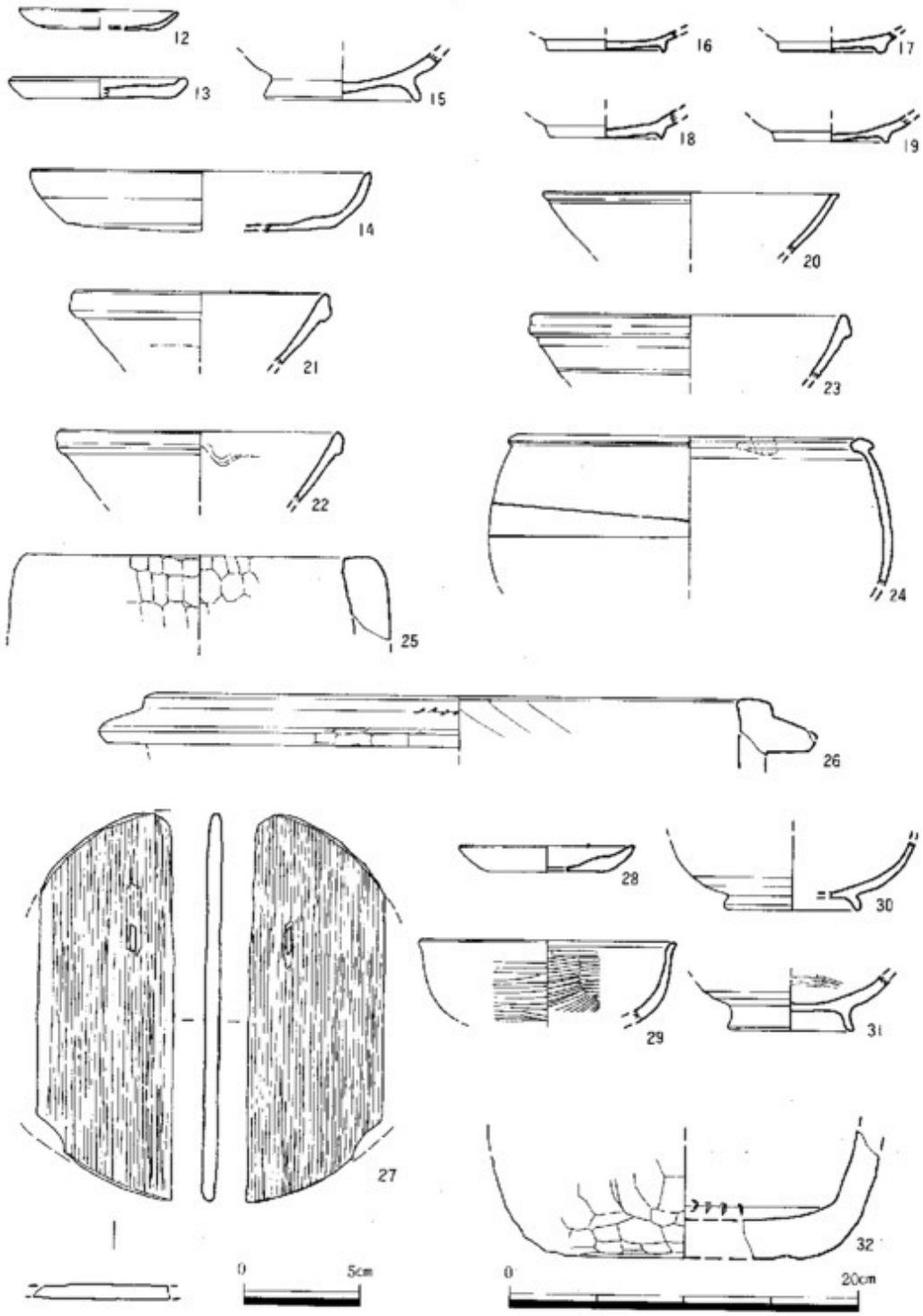


Fig. 13　SE01・02出土遺物(1/3, 1/4)

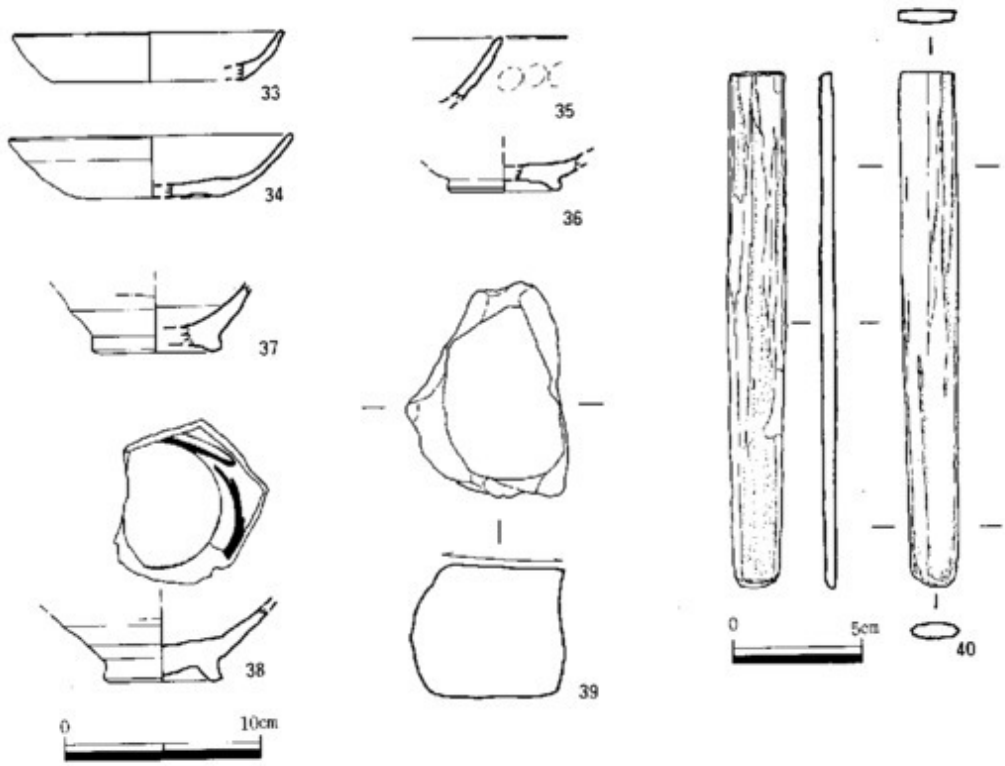


Fig. 14　SE03・04出土遺物(1/3, 1/4)

(cm)

遺構名	板材番号	現存長	幅	厚さ	備考	遺構名	板材番号	現存長	幅	厚さ	備考
SE03	1	20.2	9.0	1.2		SE03	12	25.1	5.7	1.1	竹のタガが残る
	2	15.2	6.8	1.2			13	27.4	9.0	1.2	〃
	3	13.4	6.5	1.1			14	26.2	6.6	1.3	〃
	4	21.4	9.8	1.3	竹のタガが残る		15	23.4	5.7	1.0	〃
	5	14.9	6.2	1.4			16	24.0	9.5	1.4	〃
	6	18.0	7.0	1.2	竹のタガが残る		17	16.6	5.3	1.1	〃
	7	19.8	9.5	1.2	竹のタガが残る		18	21.9	6.3	1.1	
	8	17.3	6.2	1.1	竹のタガが残る		19	22.8	8.7	1.2	
	9	18.5	6.3	1.3			20	13.9	6.0	1.0	
	10	23.6	9.4	1.2			21	16.5	6.0	1.1	
	11	21.9	6.7	1.1	竹のタガが残る	SE04	1	19.8	9.8	1.8	

※木質については時間不足の為未鑑定

Tab.2　SE03井戸枠計測表

たものと考えられる。そしてその周辺土は井筒の裏込土と思われる。井筒内の埋土は黒色又は黒色粘質土で，下層はヘドロ状の暗青灰色粘土で，植物遺物や礫を混入していた。

出土遺物（Fig. 14, Tab. 2, PL 9） 上層埋土及び掘方内より土師器の皿，椀，土師質土器の鍋，瓦器椀，須恵質土器などの小片が60数点，井筒内より土師皿，椀，土師質土器の鍋，瓦器椀，青，白磁椀の小片が30数点と滑石製石鍋片，鉄滓が1点出土した。**33**，**34**は土師器の坏片で**33**は復元口径14.0cm，**34**は復元口径14.5cmを測る。**35**は底部糸切りである。**34**は瓦器椀の口縁部細片で，外面は指おさえ痕が残る。**36**は瓦器椀の底部片で，底径5.8cmを測る。外方へやや張り出す太くて短い高台がつく。淡灰褐色で，焼成はややあまい。**37**は白磁碗の底部片で，復元底径6.6cmを測る。大きな玉縁の口縁をもつ白磁碗Ⅳ類のものであろう。焼成はややあまい。**38**は白磁碗の底部片で，見込に櫛描文様がある。淡い黄緑色釉がかかる。白磁Ⅵ類と思われる。

SE04（Fig. 11, PL 6）

SE03の北側約2.4m離れた所で検出した。平面形は長方形を呈し，規模は2.0×1.4mを測る。深さ20～40cm程の所で，長さ10～30cmの転石や割石の角礫が東側部分を中心に直径1.0m，最大高0.4mの範囲に雑然と集中していた。その礫群の下に上面で直径40cm，深さ40cmを測る，井筒と思われる円形状の掘込みがある。その中には長辺が50cm近い板石や，井戸枠の板材や木器などがあった。平面観察では確認出来なかったが，土層観察によれば，2つの遺構が切り合うという状況が認められ，西側のテラス部分と東側の礫集中部と，その下の井筒を持つ部分とは別の遺構の可能性がある。以上の事から考えれば，SE04の上面規模は1.2×1.4mの略円形を呈すると考えられる。埋土は上層が褐色土，下層の方は灰味が強くなる。

出土遺物（Fig. 14, PL 9） 少ない。礫上で土師皿，土師質土器，うち黒土器，陶器，青磁，白磁の細片が合計で10数点，礫下で土師皿小片が3点，木器，板材，砥石片などである。**39**は砥石片で現存長11.0cm，最大幅8.3cm，最大高7.1cmを測る。砂岩製である。**40**はヘラ状の木製品で全長20cm，幅1.8～2.3cm，厚さ5mmを測り，下端が使用により磨滅し丸くなる。

堀立柱建物（SB）

西側台地部で5棟検出した。5棟のうち4棟は2×3間の建物で，いずれも主軸方向が略北で，SB01と03，SB02と04が重複しており，建替えられた考えられる。

SB01・03（Fig. 14, PL 3）

いずれも2×3間の建物で，主軸をそれぞれN－7°30′－E，N－5°30′－Eとほぼ北に取るか，SB01が若干東へ振れる。規模はSB01が梁間全長3.6m（12尺） 桁行全長6.40～6.60m（21.3～22尺） SB03が梁間全長3.95m（13.2尺） 桁行全長7.10m（23.7尺）とひとまわり大きい。柱穴はいずれも円形である。直径は15～30cmと余り大きくなく，深さも大半が10～20cmと浅い。柱径は柱痕跡から10cm前後と考えられる。埋土は黒褐色土である。床面積はSB01が23.4m²，

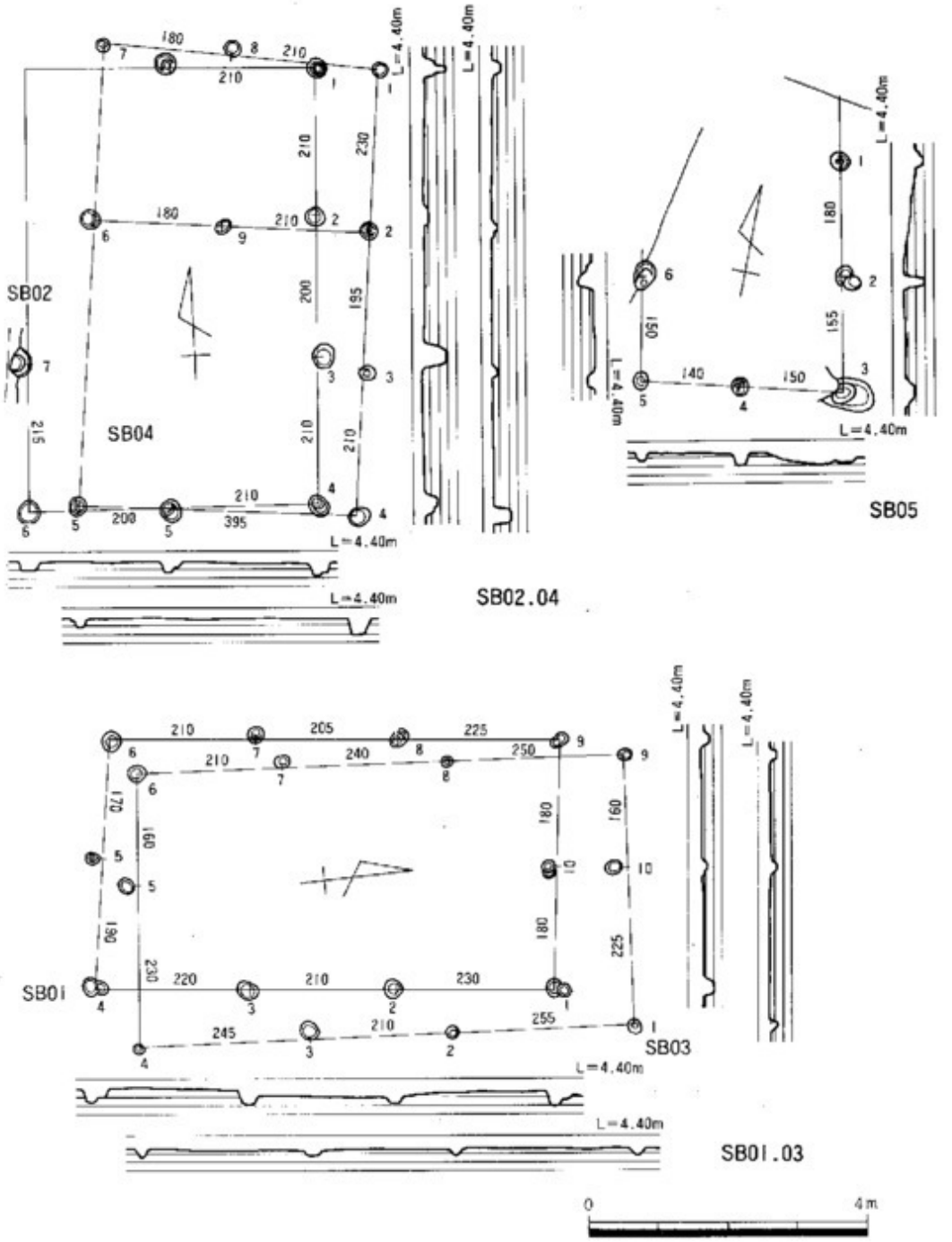


Fig. 15 SB01~05 (1/100)

SB03が28.0㎡である。

出土遺物（Fig. 17, PL９） SB01は３個の柱穴から土師器皿の細片が合計６点，須恵器細片が２点出土した。56は土師器皿１/３片で復元口径9.6cmを測る。底部糸切りである。SB03は４個の柱穴から土師器細片が８点出土し，その内に糸切りの土師器皿片を含んでいる。

SB2・04（Fig. 14, PL３）

いずれも２×４間の建物で，SB02は西側がSD06と境界にかかり全容が不明。主軸方向はSB02がN－2°－E，SB04がN－5°－Eであり，若干SB04が東へ振れている。規模はSB02が梁間全長4.15m（13.8尺），桁行全長6.25m（20.8尺），SB04が梁間全長3.95m（13.2尺），桁行全長6.40～6.65m（21.3尺～22.2尺）とほぼ同規模だが，SB04は形がややひずむ。柱穴はいずれも円形で，埋土は黒褐色土が多い。直径は20～40cm，深さは10～30cm程度である。柱径は柱痕跡から10～15cmと思われる。SB04は桁行西側柱と南側梁間に間柱が一つずつ不足している。また内側に東柱が一つある。 床面積はSB02が25.9㎡，SB04が25.8㎡である。

出土遺物 SB02は３個の柱穴から土師皿を含む土師器細片17点，黒色土器１点出土。SB04は遺物の出土はなかった。

SB05（Fig. 14）

北西側境界にかかり，全容は不明。２×２間以上の建物である。主軸方向はN－13°－Wに取り，他の４棟と異なり主軸が西へ傾く。規模は梁間全長2.90m（9.7尺），桁行全長3.35m以上である。柱穴は円形又は楕円形で，埋土は黒褐色土である。

出土遺物 土師器皿や甕，瓦器，白磁の細片が６点出土。SK25とした小土坑と切り合っており，どちらに伴うものか不明である。

溝状遺構（SD）

全部で10条検出した。深さは最深で40cmで，いずれも浅い。

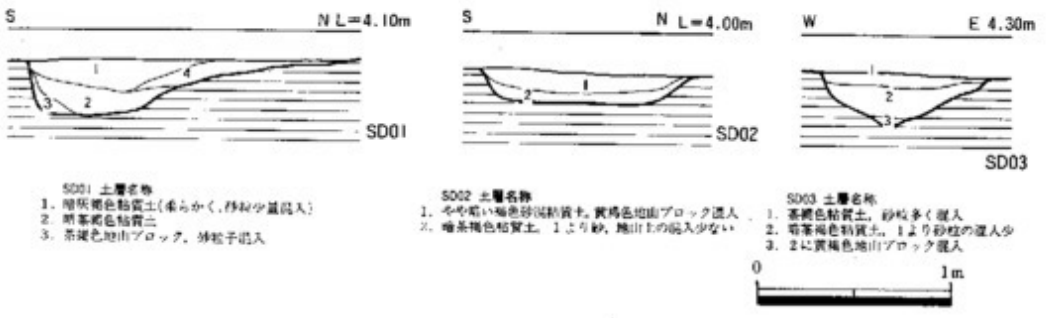


Fig. 16 SD01～03土層(1/40)

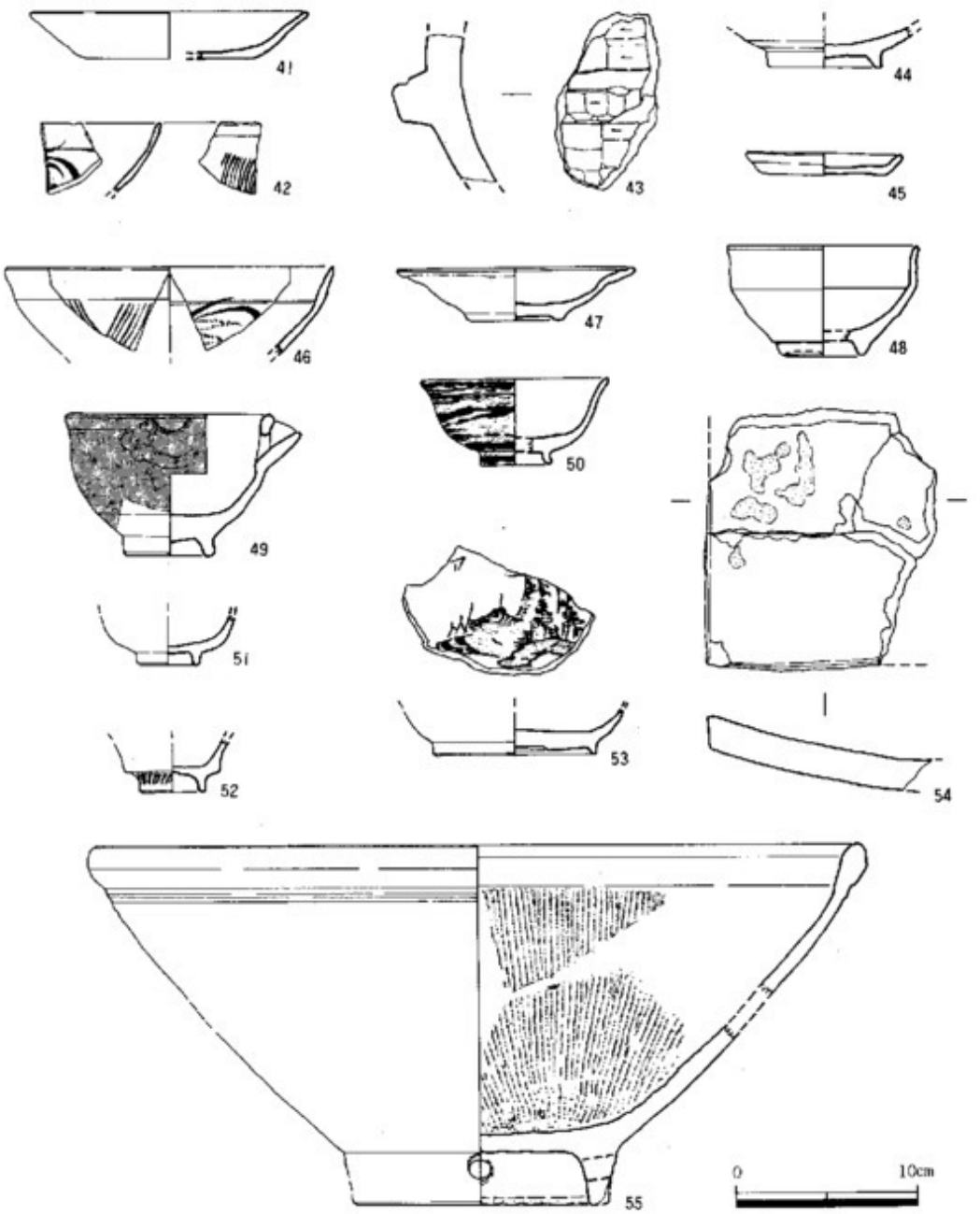


Fig. 17　SD01～06出土遺物(1/4)

SD01（Fig. 14, PL 4）

調査区北壁から東方向へ斜に延びる溝で，6.5m程行った所で，浅くなり消滅する。溝幅は最大で1.6mを，深さは最大で35cmを測る。SD03より新しい。溝断面は逆台形に近い。埋土は上層が暗灰褐色粘質土，下層が暗茶褐色粘質土を主体とする。約2.3m離れて北東方向に延びるSD02があるが，SD01と02の間は陸橋で一連の溝の可能性がある。

出土遺物（Fig. 17） 弥生式土器や中世の土師器皿，土師質土器，青磁碗などの細片が30数点出土した。41は土師器の坏または皿の1/6片で，復元口径15.4cmを測る。全体に磨滅がひどい。

SD02（Fig. 16, PL 4）

調査区北側出検出した。確認長は12.0m，幅1.0mを測る。東へ行くにつれて深くなり，北壁での深さは26cmを測る。また溝断面は逆台形を呈す。埋土は上下2層に分かれ，上層は暗灰褐色粘質土と地山ブロックの混合，下層はやや軟質の黒灰色粘土を混入する。

出土遺物 少なく，土師器皿，土師質土器の細片が9点出土した。

SD03（Fig. 16, PL 4）

SD01に切られ，北西壁部分でコーナーを持ち，南に直角に折れる溝である。コーナーから13m程行った所で，浅くなり消滅する。深さは最深で30cm前後と浅い。溝断面は浅いV字形である。埋土は暗茶褐色粘質土を主体とする。

出土遺物（Fig. 17, PL 9） 須恵器，土師器皿，瓦器碗，青磁碗，滑石製石鍋の小片が40点出土した。42は同安窯系の青磁碗口縁部小片で，I類に属し，体外面に片切彫で放射線状に縦線が入る。43は石鍋の鍔部小片である。最大長9.7cm，最大幅5.5cmを測る。外面には幅3cm，高さ2cmの台形状の鍔がつく。外面は工具による横方向の粗い削り，内面は丁寧な削り。外面は鍔より下に煤が付着する。

SD04（Fig. 4, PL 4）

調査区北側で検出した。SD01に切られる。長二等辺三角形状を呈する溝で，全長6.5m，最大幅2.0mを測り，深さは12cm内外で非常に浅い。底面は中央がやや深くなる。埋土は暗灰褐色粘質土で，鉄分を帯びている。

出土遺物（Fig. 17） 余り多くない。須恵器の甕，土師皿，瓦器碗，うち黒土器，白磁碗，滑石製石鍋等の細片が51点出土。44は白磁碗底部片で，外面を直に，内面を斜に削り出す高台を持つ。白磁碗II類と思われる。淡緑灰色の釉が厚目にかかる。復元底径は6.3cmを測る。

SD05（Fig. 4, PL 4）

SD04に切られる溝で，現存長6m，最大幅1.5mを測る。深さは10～15cmと浅い。SD04の北側の小溝SD08と同一の溝かもしれない。遺物の出土はない。

SD06（Fig. 4）

調査区西壁沿いに南北に貫流する小溝で，西壁内端で西に曲ると思われるコーナーがある。

確認長30m，幅0.6～0.7m，深さ25cmを測る。溝の断面は緩やかなU字形である。埋土は上層が瓦礫を含んだ灰褐色土，下層が粘性のある黒灰褐色土である。

出土遺物（Fig. 17, PL 9） 比較的多い。土師器の皿や土師質土器，窯道具のハマ，いぶし入り平・伏間瓦，白磁，青磁碗，肥前及び肥前系の陶磁器類がある。45は土師器皿で復元口径8.6cmを測る。糸切りで板目が残る。46は同安窯系の青磁碗口縁部片で，II類に属するものである。外面は櫛状工具による縦線が入る。復元口径は18.1cmを測る。47は肥前の溝縁皿で，復元口径13.0cmを測る。内面に砂目跡が残る。17世紀前半頃である。48は淡緑灰色を呈す青磁碗で，復元口径10.6cmを測る。口縁部が体部から屈折し直立する器形で，見込には発色が悪いが呉須で菊花が描かれる。肥前磁器で17世紀前半代である。49は鉄釉が厚目にかかる片口碗で復元口径11.4cmを測る。唐津で17世紀前半のものである。50は陶器碗で復元口径10.3cmを測る。外面は褐釉と暗褐色釉を流しがけしている。内面は透明の白色釉をかけ，蛇の目状に釉をかき取った後に重ね焼の為アルミナ砂をかける。19世紀頃の須恵焼と思われる。51は白磁の小碗の底部片で，高台に砂が付着する。肥前系で19世紀頃のものである。52は内外面に淡緑灰色釉がかかる陶器小碗で，底径5.4cmを測る。高台外面は飛びカンナが入り，鉄泥がかかる。型打ち成形で，外面は呉須で絵を描く。19世紀以降のものである。53は染付の皿で底径8.8cmを測る。底部は蛇の目高台状で，その部分にアルミナ砂を塗る。見込みには山水文と網干文が入る。肥前系の19世紀前半から後半のものである。55はいぶし入り平瓦片で，最大長14.4cm，最大幅12.6cm，厚さ1.8cmを測る。上下両面に粘土が付着する。56は褐釉のかかった大型の陶製の摺鉢で口径42.2cm，器高19.9cmを測る。8本単位の目の密な深い条線が入る。高台は3cmと高く，直径1.4cmの円孔が焼成前に穿たれる。在地系で19世紀代のものと思われる。

SD07（Fig. 4）

SD03の南側で検出した南北方向の細長い小溝で確認，長5m幅30cmを測り，深さは2～3cmと極めて浅い。SD03につづく溝の可能性がある。出土遺物は土師器細片が1点出土した。

SD08～10（Fig. 4）

SD08は北壁境界で検出した溝で，幅が80cm，深さが最深で15cmと浅い。埋土は灰褐色粗砂で，淡黄褐色粗砂を間層で挟んでいる。SD09はSD08の東側の小溝でSD04に切られる。現在長2.6m，幅は60cm位である。深さは6～7cmと浅い。埋土は灰褐色粗砂である。SD10はSD05の南側，調査区中央で検出した細長い南北溝で，全長5.6m，最大幅0.8mを測り，深さは2～8cmと浅い。08～10いずれも遺物の出土はなかった。

畝状遺構（Fig. 4）

西側台地部で検出された。主軸をやや東に振る南北方向の幅1m，長さ18m，深さ20cmの浅い溝とそれに斜交する11条の幅50cm，深さ5cm前後の小溝が組合さった遺構である。11条の小

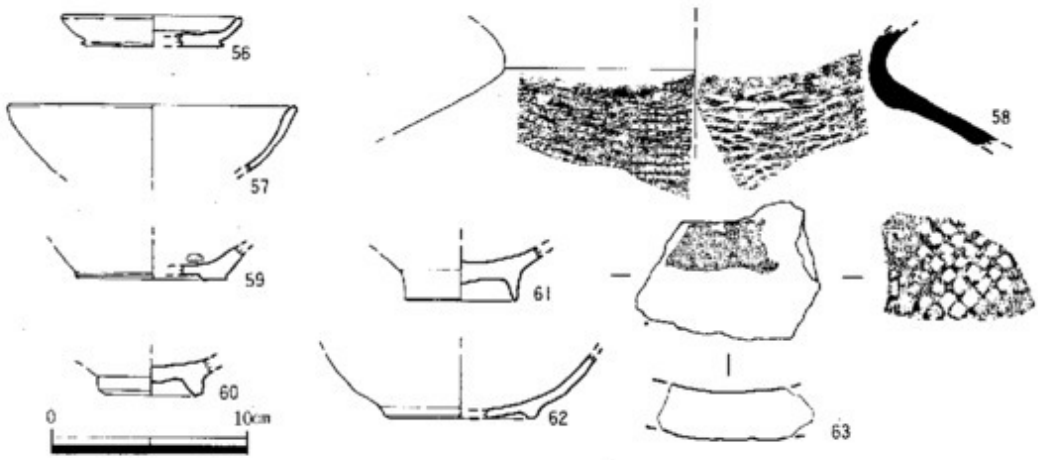


Fig. 18　SB01・ピット・遺構面・包含層出土遺物（1/4）

溝は1.4m前後の間隔でほぼ平行に並んでいる。長さ2～6mでいずれも消滅するが，表土除去の際に重機によって削平された可能性もある。この溝の東側を境に西側は明黄褐色砂礫混り土，東側は黄褐色シルト粘土となる。西側の南北溝は農道もしくは耕地の区割の溝と思われる。時期については遺物がなく不明だが，SE01より新しく，古くても中世以降であろう。

ピット，遺構面出土遺物（Fig.18, PL9）

57は瓦器椀片で復元口径14.8cmを測る。58は須恵器の甕の頸部片である。外面は格子目，内面は同心円状の叩きを施す。59は越州窯系青磁のⅠ類の底部片で，復元底径7.6cmを測る。淡褐黄緑釉がかかる。60は白磁の底部片で復元口径5.8cmを測る。61は高く断面鉛角三角形の高台を持つ白磁碗の底部片である。白磁Ⅵ類と思われる。62は瓦器椀の底部片で，復元底径7.8cmを測る。底部に断面三角形の小さな高台がつく。63は布目瓦の小片である。全長9.4cmを測る。外面は0.6～0.8cmのやや粗い格子目叩き，内面は目の細かい布目痕が残る。焼成はややあまい。57がPit58，58が表土，59～64が包含層出土である。

第4章　小　　結

以上調査の概要について述べた。今回の調査は遺構の検出された範囲が狭いため，遺跡の十分な検討は出来ないが，主な遺構のおおまかな時期と若干の気付いた点を述べてまとめとしたい。

遺構の時期は大きく3期の分ける事が出来る。第Ⅰ期は古墳時代前期，第Ⅱ期は中世，第Ⅲ期は近世である。第Ⅰ期の遺構は少なく，SK19のみである。出土した甕や高坏などから，布留式併行期に相当するもので，柳田康雄氏編年のⅡb期[註10]よりやや新しい時期と思われる。SK19の甕と類似するものが高柳遺跡の第1号竪穴から[註11]から出土しており，それは4世紀後半代に位置

づけられている。

第II期は当地点の大部分の遺構の時期である。土坑は全体に遺物量が少なく，しかも細片が多く，時期の判断はしかねるが，全体として，糸切りの土師器皿を含み，また龍泉窯系青磁碗の出土などから12世紀後半以降が考えられる。ただSK21は土師質土器の鍋などから，中世後半代の15世紀代となろう。井戸はいずれも12世紀代を中心とするが，SE02が黒色土器などを多く含んでおり，掘削時期が他の井戸より早く，10世紀代に遡上る可能性がある。溝状遺構はSD01～05が相当する。切り合い関係からSD05→SD03↘ SD04↗ SD01となる。

第III期はSD06のみである。この溝の上層には瓦礫層があり，そこに多くの遺物を含んでいた。調査では不注意によって上下関係なく遺物を取り上げてしまったが，遺物は17世紀前半代のものと19世紀以降のものに分ける事が出来，恐らく17世紀前半代にある程度埋没し，溝の痕跡として残っていた19世紀代に，瓦などが捨てられたものと思われる。この溝は調査区西側境界地に沿っており，また瓦礫層などの出土から，屋敷地の境界の溝であるかもしれない。

堀立柱建物の時期についてであるが，SB01と03・SB02と04は重複し，しかもほぼ同規模であり，建替えられたものである。柱筋方向からSB01と04，SB02と03がほぼ同時期と思われる。出土遺物が少なく，時期の推定はしがたいが，SB01出土の56が糸切りである事や，他柱穴出土の遺物の中にも糸切りの土師器皿や白磁碗の細片を含む事から，12世紀後半以降が考えられる。またFig. 19に主な遺構の配置図を示したが，SD03とSB01～04は主軸方向を同じくしている。調査区が狭い為，推定にとどまるが，一つの居館区域が考えられる。その場合SE01がそれに伴う井戸と思われる。

註

註1，福岡市教育委員会「有田・小田部第1～9集」　1979～1988
註2，福岡市教育委員会「藤崎遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第80集　1982
註3，福岡市教育委員会「西新町遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第79集　1982
註4，干隈遺跡調査会「干隈遺跡」　1985
註5，福岡市教育委員会「鶴町遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第37集　1976
註6，福岡市教育委員会「田村遺跡Ⅰ～Ⅴ」福岡市埋蔵文化財調査報告書第89・104・167・168集　1982～1987
註7，福岡市教育委員会「原遺跡2」福岡市埋蔵文化財調査報告書第140集　1986
註8，福岡市教育委員会が昭和63年に調査，現在鋭意整理中
註9，福岡市教育委員会「原深町遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第71集　1981
註10，柳田康雄「三世紀の土器と鏡」森貞次郎博士古稀記念古文化論集下巻　1982
註11，福岡市教育委員会「高柳遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第70集　1981

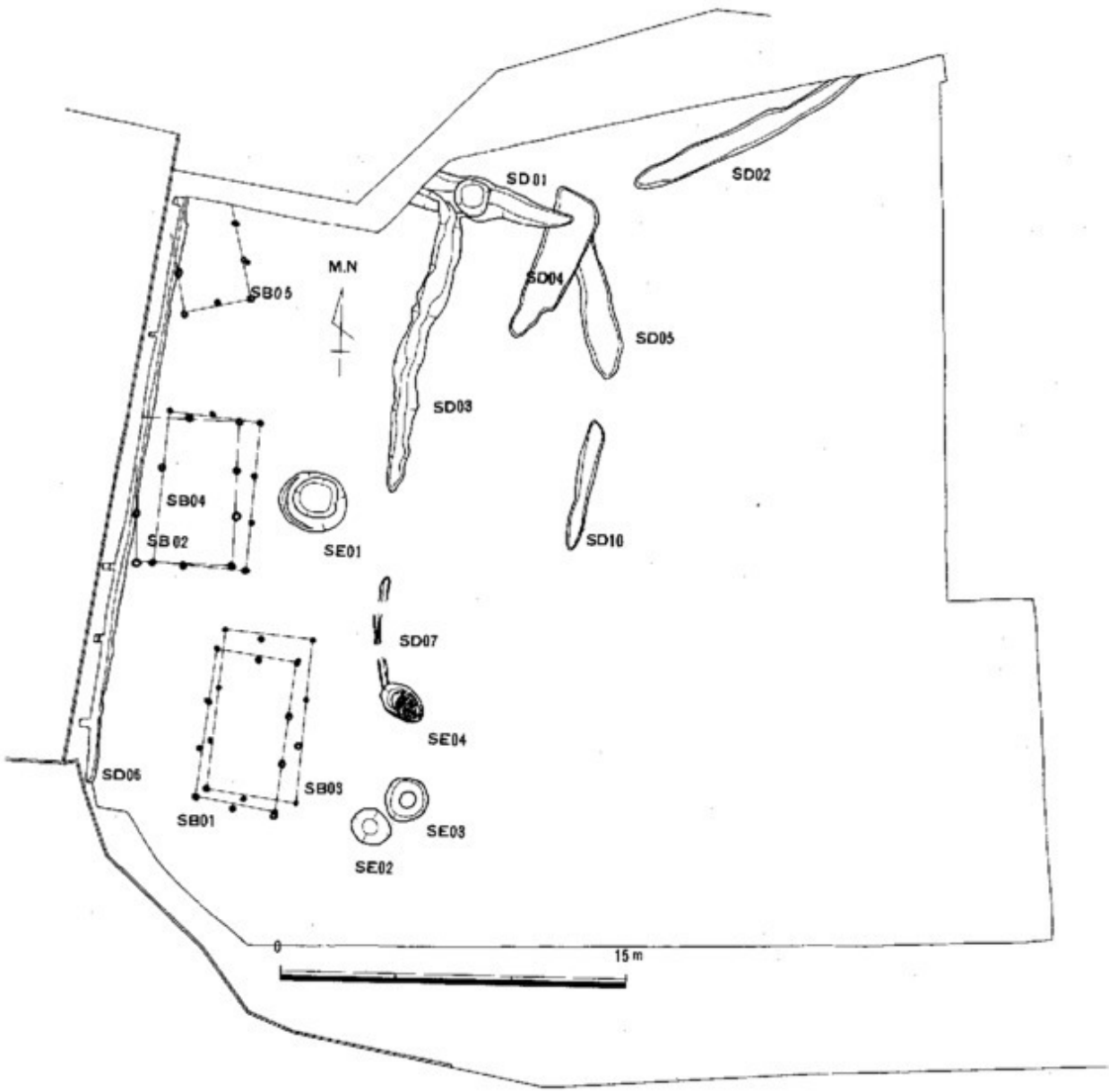


Fig.19　第６次地点主要遺構配置図　(1/300)

Tab.3　原6次調査遺物登録対照表

遺構名	遺物番号	遺物登録番号	挿図	図版
SK04	01	821700021	8	8
SK07	02	821700022	8	8
SK11	03	821700027	8	8
SK12	04	821700028	8	8
	05	821700029		
SK19	07	821700031	9	8
	08	821700030		
	09	821700032		
	10	821700033		
	11	821700034		
SK21	06	821700087	8	
SE01	12	821700005	12	8
	13	821700007		
	14	821700016		
	15	821700001		
	16	821700002		
	17	821700003		
	18	821700006		
	19	821700012		
	20	821700010		
	21	821700009		
	22	821700008		
	23	821700015		
	24	821700011		
	25	821700014		
	26	821700013		
	27	821700062		
SE02	28	821700059	12	8
	29	821700017		
	30	821700018		
	31	821700019		
	32	821700020		
SE03	33	821700061	13	9
	34	821700023		
	35	821700060		
SE03	36	821700025	13	9
	37	821700024		
	38	821700026		
SE04	39	821700086	13	9
	40	821700063		
SD01	41	821700088	16	
SD03	42	821700037	16	9
	43	821700036		
SD04	44	821700038	16	9
SD06	45	821700044	16	9
	46	821700045		
	47	821700048		
	48	821700050		
	49	821700039		
	50	821700051		
	51	821700049		
	52	821700046		
	53	821700040		
	54	821700041		
	55	821700047		
SB01	56	821700089	17	9
遺構面出土遺物	57	821700090	17	9
	58	821700052		
	59	821700053		
	60	821700057		
	61	821700054		
	62	821700056		
	63	821700055		

図　　版

原第６次調査

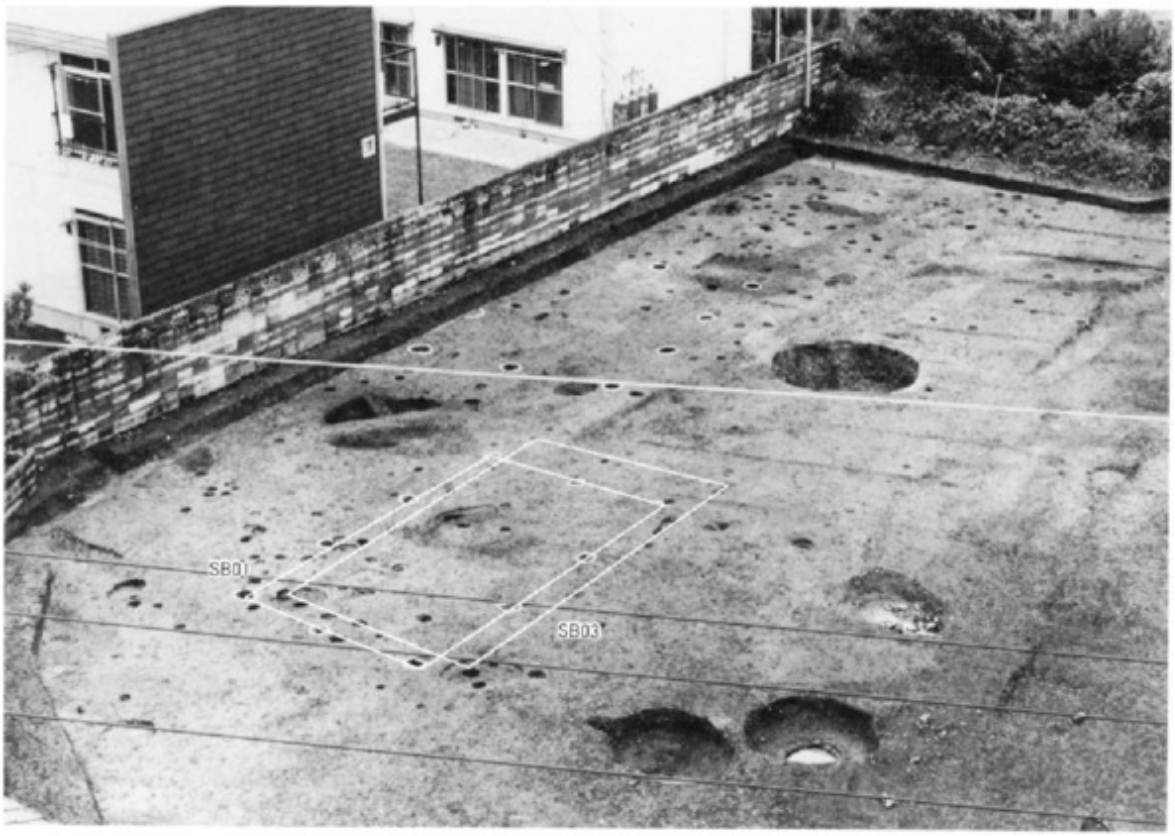
原遺跡・別府遺跡周辺航空写真（昭和56年撮影）

(1)

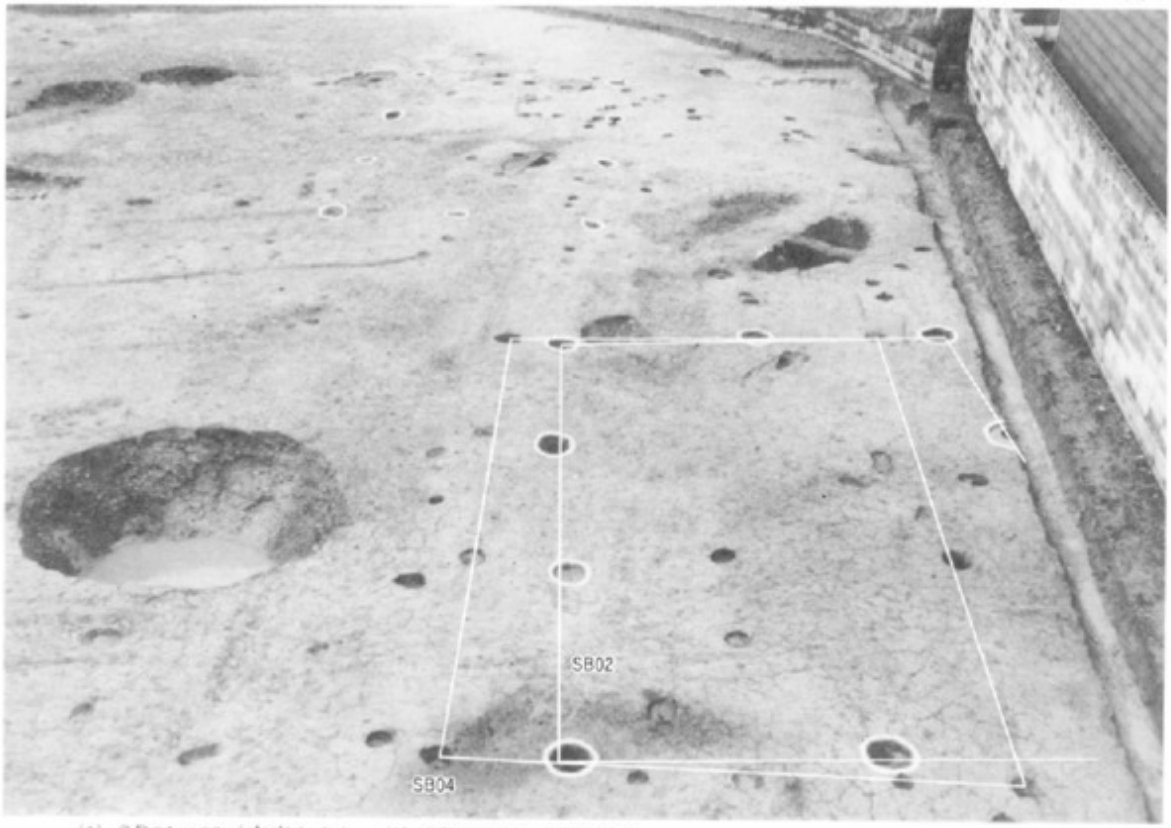
(2)

(1) 調査前全景（南東から） (2) 調査区全景（北東から）

原第6次調査



(1)

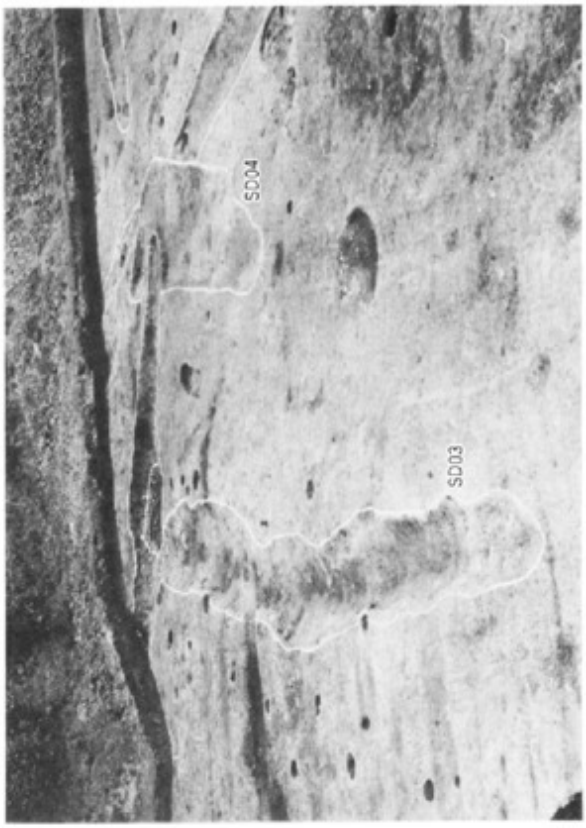


(1) SB01・03（南東から）　(2) SB02・04（北から）

(2)

(1)

(2)

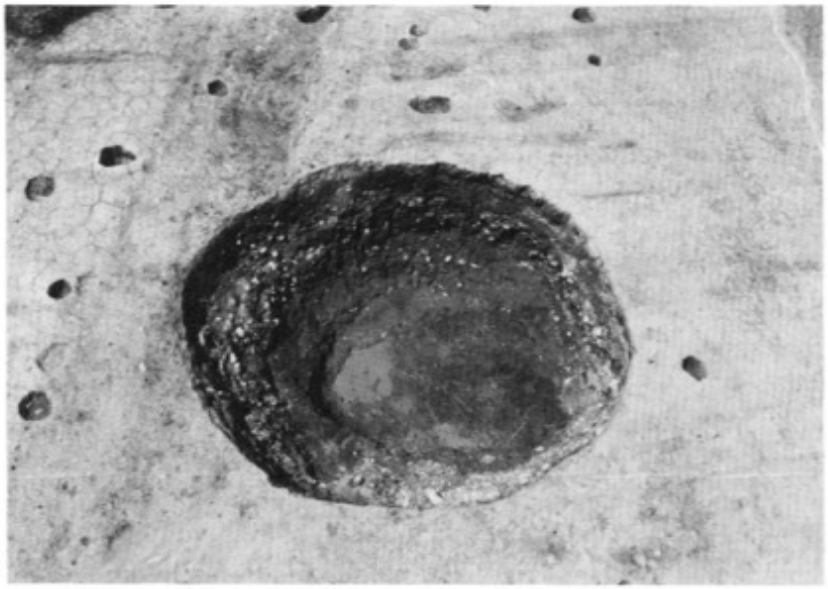


(3)

(1) SD01・03・04（東から） (2) SD02（西から） (3) SD03・04（南から）

(1) SK04（西から）　(2) SK06（北西から）　(3) SK19（東から）　(4) SK22（南から）

(3)



(1)

(4)

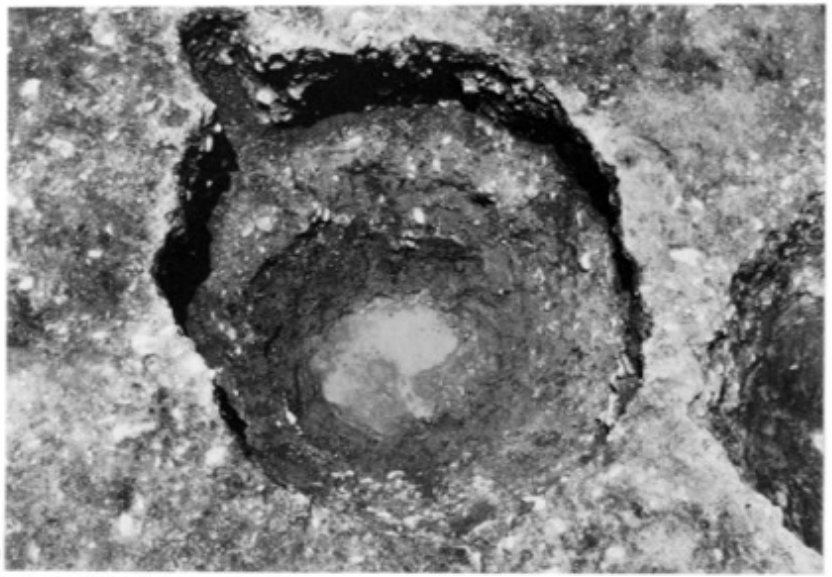
(2)

(1) SE01（南から）　(2) 同木器出土状況　(3) SE04（南西から）　(4) 同完掘状況（南西から）

(3)

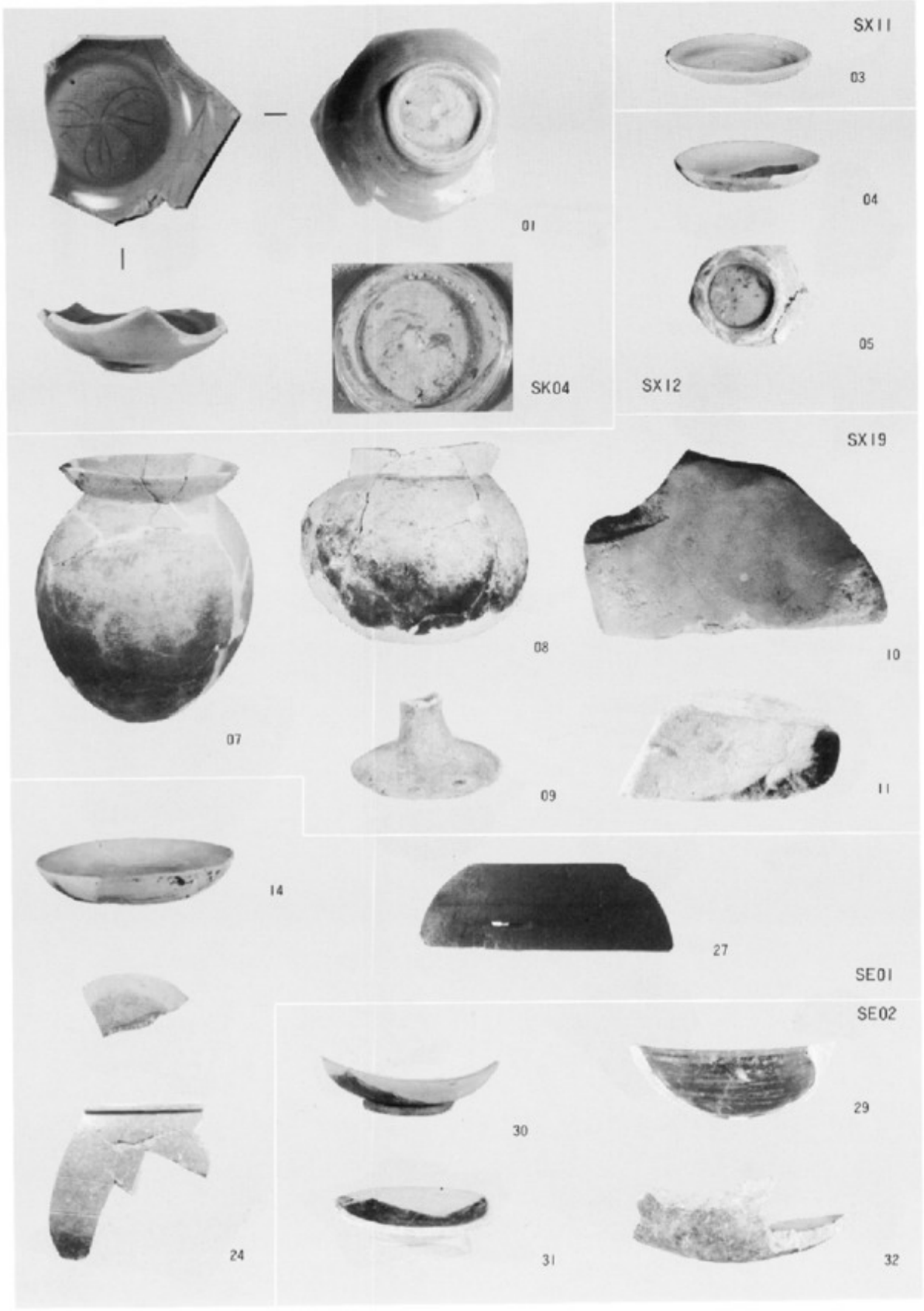
(1)

(4)



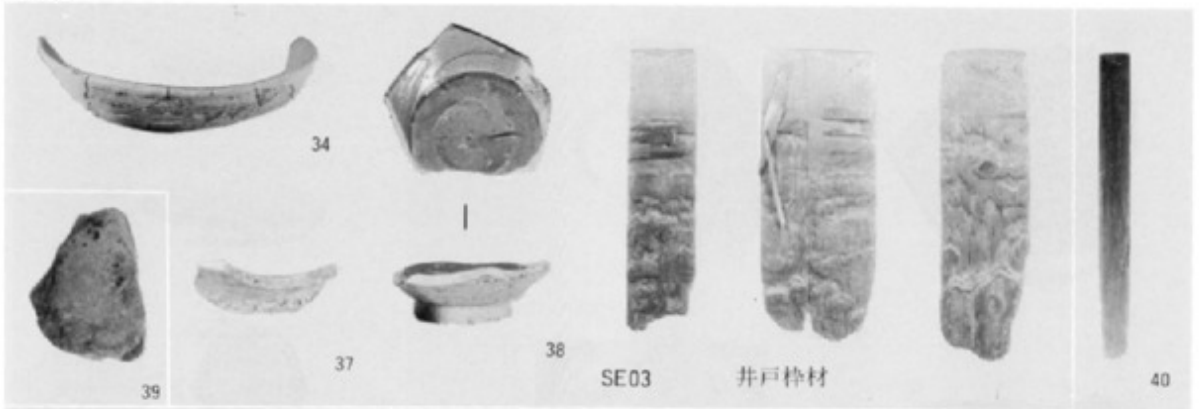
(2)

(1) SE02·03（南から） (2) SE02（南から） (3) SE03（南から） (4) SE03断割状況（南から）

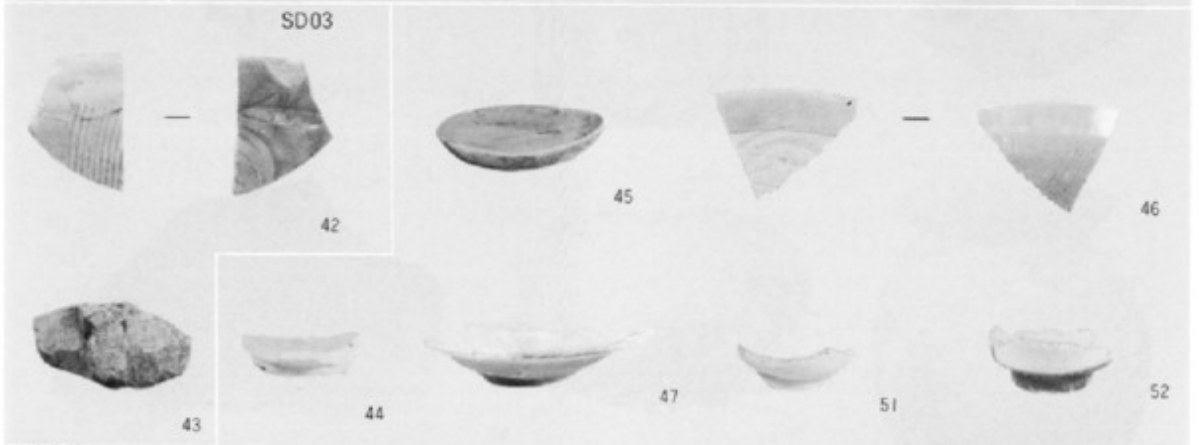

SX11
03
01
04
05
SX12
SK04
SX19
07
08
10
09
11
14
27
SE01
SE02
24
30
29
31
32

土坑、井戸出土遺物

原第 6 次調査



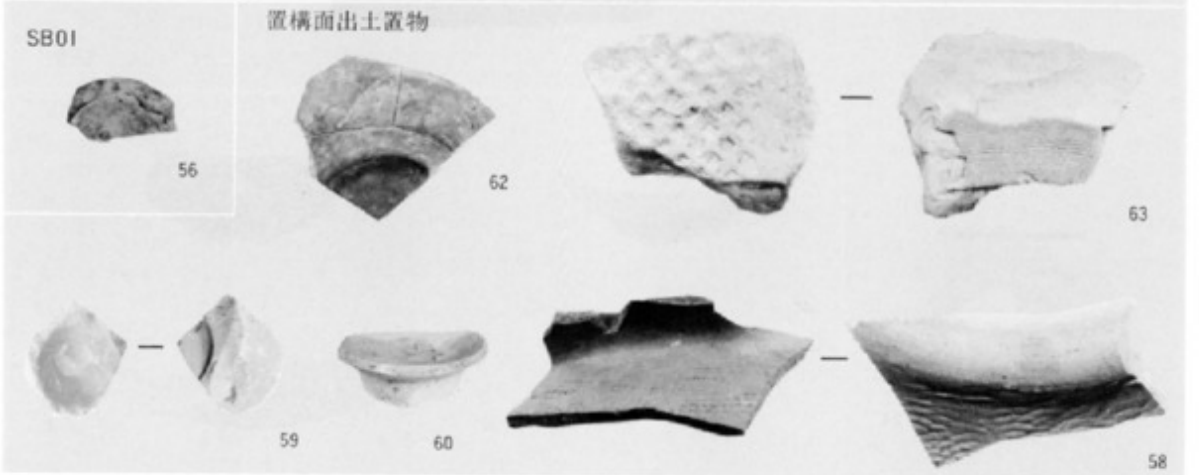
SD03



SD06

SB01

置構面出土置物

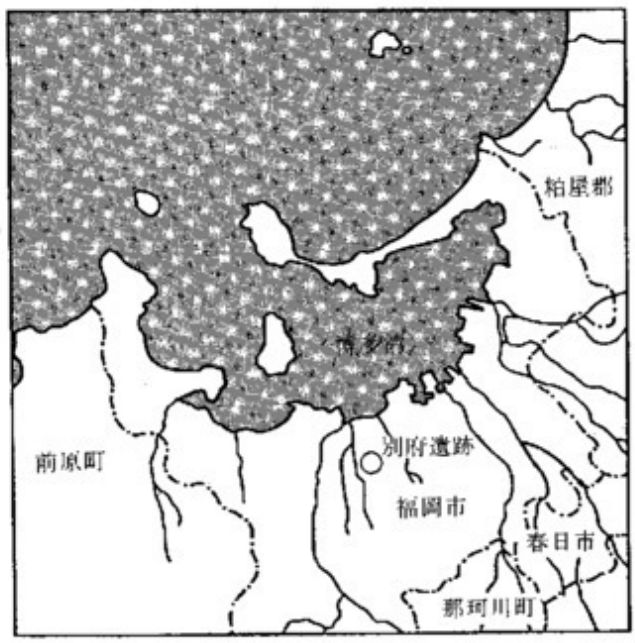


井戸，溝，遺構面出土遺物

別府遺跡

BE fu

—第1次調査—



遺跡略号　BEF

遺跡番号　8613

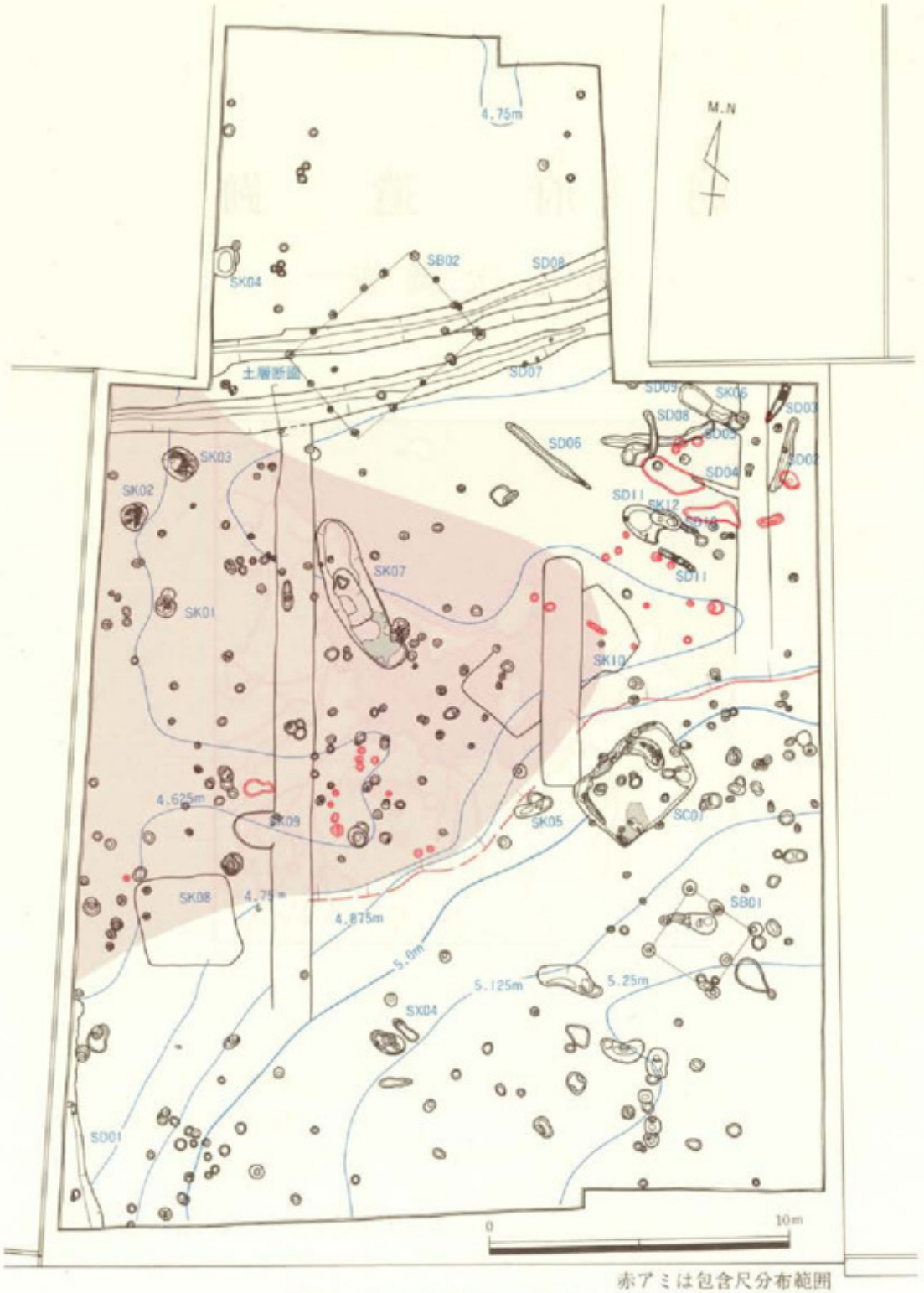


Fig. 20　調査区遺構配置図(1/200)

第１章　はじめに

１．調査に至る経過

当該地（城南区別府５丁目204，199）における発掘調査の契機は，地主の井上繁人氏が当地に共同住宅の建設を計画し，福岡市へ開発事前審査願を提出した事から始まる。この審査願（教埋60－２－144）を埋蔵文化財課が審査したところ。『福岡市文化財分布地図西部Ⅰ』に記載の別府遺跡内に所在することが判り，昭和60年12月６日に試堀調査を行った。その結果申請地の南側を中心に遺構が検出されたため，その取扱いについて井上繁人氏と協議を行った。協議の結果，申請地の開発はさけられないところであり，原因者である井上繁人氏から調査費用の協力を受けて発掘調査を実施する事となった。

発掘調査は昭和61年６月16日から７月22日迄行なった。調査は試堀結果を基に南側を中心に行ない。排土については施工業者の協力を得て場外へ搬出した。今回の調査は別府遺跡における初めての調査である。

調　査　体　制

調査主体　福岡市教育委員会教育長　佐藤善郎

調査総括　埋蔵文化財課長　柳田純孝　第２係長　飛高憲雄

調査庶務　第１係　岸田隆

調査担当　第２係　杉山富雄（試掘担当），山崎龍雄，米倉秀紀（現福岡市博物館）

調査補助　大内士郎（現今宿公民館主事），本多育央（九州大学）

整理補助　平川敬治（九州大学）　岡根なおみ（慶応大学）

調査作業　神尾順次，高浜謙一，馬場寿男，三浦義隆，有富いつ子，緒方マサヨ，金子由利子，清原ユリ子，北原ヒサ子，坂口フミ子，佐藤テル子，庄野崎ヒデ子，土要崎初栄，平井和子，後藤ミサヲ，西尾たつよ，堀川ヒロ子，松井フユ子，松井邦子，吉岡田鶴子，萬スミヨ，徳永ノブヨ，蓑原幸江，宮原邦江，山田サヨ子

整理作業　内尾トミ子，永井和子，仲前智江子，池田礼子，吉田祝子，松下節子，井上マツミ，小金丸わかば

また調査にあたっては地主の井上繁人氏，施工業者の上村工務店の皆さまから，多大なご協力を受けました。記して感謝の意を表します。

第２章　遺跡の立地と歴史的環境

立地（Fig. 1，PL 1）

博多湾に北面して扇形に展開する福岡平野は東に三群山地とそれより派生する山塊，西は背振山塊から派生する長垂丘稜，南は背振，及び油山山塊によって限られている。またこの福岡平野は鴻巣山（標高100.5m）を中心として南北に延びる平尾丘陵によって，東の福岡平野，西の早良平野と分断されている[1]。今回報告する別府遺跡は油山山麓から北方に分岐して延びる低丘陵の先端部分に立地しており，標高６ｍを測る。この低丘陵は油山に水源を持つ樋井川，駅ヶ原川，片江川，一本松川などの中小河川によって開析され，複雑に入り組んだ狭い谷と尾根を形成している。この地域は古代律令時代における早良郡畦伊郷に比定されており，古代の西海道の官道が通っていたと考えられる地域である。福岡市に合併する前は，早良郡鳥飼村に含まれていた。また鎌倉時代の弘安年間の博多古図によると現在の大濠から鳥飼にかけては草ヶ江の入海であり，昔は別府の間近迄海岸線が入り込んでいたものと思われる。この別府周辺は都心に近い為，早い時期に開発が進んでおり，今迄発掘調査が余り行なわれていない地域である。

周辺の遺跡

周辺において旧石器時代の遺跡はカルメル修道院内遺跡，神松寺遺跡で尖頭器が各１点検出されている。また縄文時代では片江の五ヶ村池遺跡[2]やや大濠公園，平和台，柏原遺跡[3]などがある。弥生時代には神松寺遺跡[4]，田島オゴモリ遺跡[5]，浄泉寺遺跡[6]，小笹遺跡[7]などがあり，神松寺遺跡からは甕棺墓，カルメル修道院内遺跡[8]からは甕棺墓と木棺墓が発見され，その木棺墓から銅鏃が出土している[9]。古墳時代では別府遺跡から南東約１km離れた丘陵上に京ノ隈古墳[10]，同じ方向約２km離れて神松寺御陵古墳[11]，南へ３km離れたところに，1969・79年調査の七隈古墳群[12]など，低丘陵の尾根筋にはいくつかの小円墳が点在している。京ノ隈古墳は４世紀末に築造された割竹形木棺を内部主体とする前方後円墳，神松寺御陵古墳は６世紀後半に位置づけられる横穴式石室を内部主体とする前方後円墳である。

歴史時代には北東へ約2.5km離れた福岡城内に太宰府鴻臚館[14]や油山山麓にある古代製鉄遺跡の笹栗遺跡[13]，京ノ隈遺跡の平安時代末期の経塚などがある。また古代末から中世にかけては油山で密教系の多くの僧坊が作られている。また西へ約２km離れた原遺跡では中世の集落[14]が調査されている。室町時代には別府地内に大内氏の氏寺の興隆寺の寺領[15]があったことが知られている。

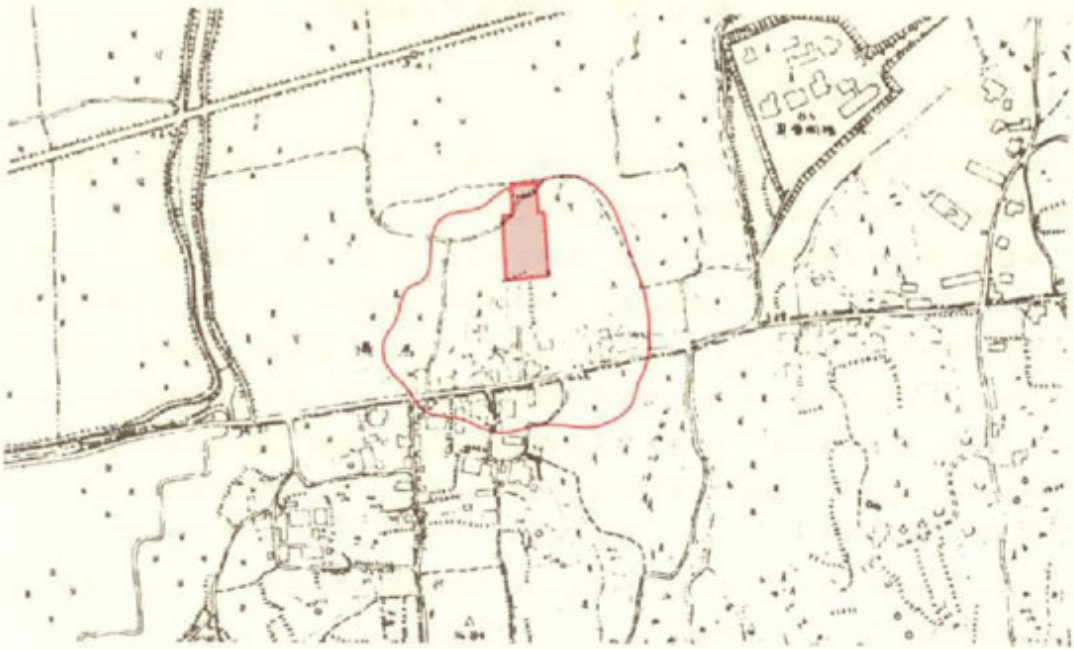


Fig. 21　調査区周辺旧地形図（1/5000）

Fig. 22　調査区周辺現況図（1/5000）

第３章　調査の記録

１．調査の概要（Fig. 22, PL10）

申請地は市街地化が進んだ別府遺跡地内に残った唯一の畑であった。標高は現況で南側が６m，北側が５mを測り北から南へ穏やかに低くなる。

申請地の調査は試堀調査のデータを基に南側を中心に行った。北側は予想どおり削平が著しく遺構は確認出来なかった。遺構面は表土下20～30cmで，赤褐色ローム土である。遺構は南側を中心に検出出来たが，SD07より北では近世以降のものが多く，南東側では風倒木の痕跡と思われるような不定形土坑があった。中央部分から南西側にかけては弥生時代中期後半の遺物を含む黒褐色土の包含層があった。地形自体南東部がやや高く，西側が緩やかに低くなっている事から，その低い部分に遺物包含層が形成されたものと思われる。比高差は約60cmであり，包含層の厚さは最大で20cmである。また包含層部分では上面と下面に遺構がそれぞれ検出出来た。主な検出遺構は竪穴住居址１棟，堀立柱建物２棟，土坑12基，溝状遺構11条である。遺存状況はいずれも余り良くない。遺物量はコンテナで22箱である。

Fig. 23　調査区周辺地形図（1/600）

２．出土遺構と遺物

竪穴住居址（SC）

SC01（Fig. 24, PL12）

調査区中央東寄りで検出した。北側の一部が包含層を切っている。平面形は隅丸長方形を呈し，西南隅にコ字状のカマドを造る。規模は長辺で3.84m，短辺で2.84m，壁高は最大で15cmを測る。南西から北西壁沿いに幅25～50cm，深さ６～10cmの幅広の溝が廻る。住居址には壁沿も含めて13個のピットがあるが，深さ，対応関係などの検討から，住居址の主柱穴は各壁中央で検出された４個のピット（Ｐ１～４）と思われる。またP.4の東のピットも住居址に伴うものかもしれない。Ｐ１～４は円形で，直径が20～30cm，深さは長軸方向のＰ２，４が40～50cm，短軸方向のＰ１，３が16～20cmを測る。カマドは内幅が45cm，奥行が60cmを測り，中央に直径17cm，深さ４cmの小ピットがある。内部には支脚として使われた底部を欠いた甕07があった。カマドの壁体は淡黄褐色粘土で構築する。床面貼床はなかった。

出土遺物（Fig. 25, PL15）　それ程多くなく，弥生式土器の壺や甕，古墳時代土師器（甕３，鉢２，高坏１，甑１），須恵器（坏身）などが出土している。須恵器の数は非常に少ない。01は

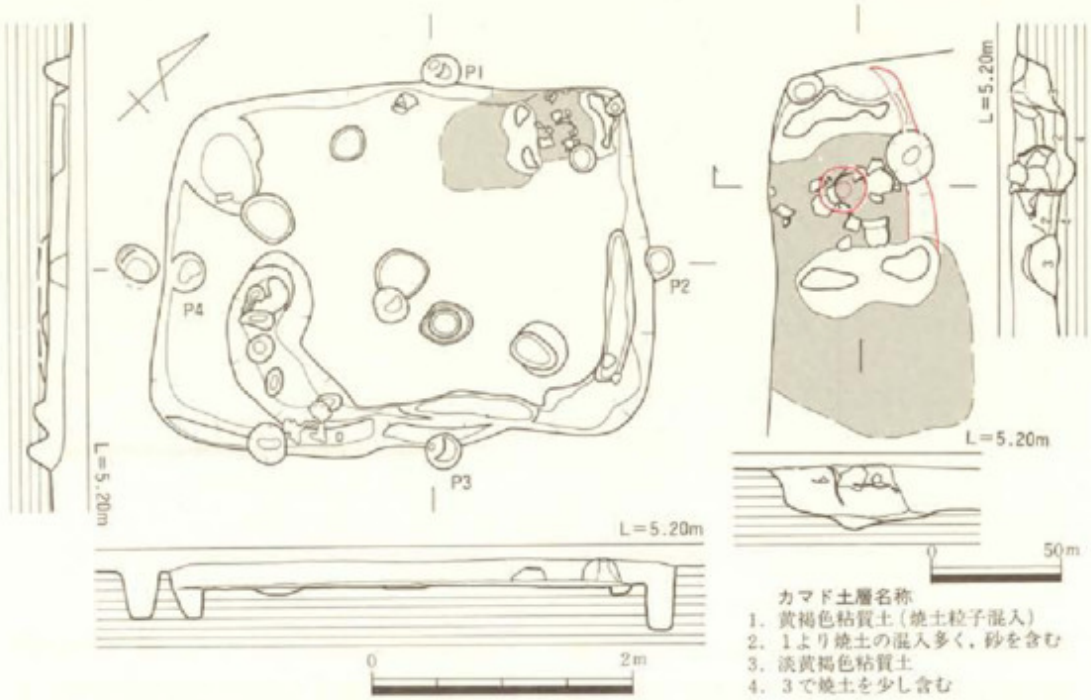


Fig.24　SC01とカマド（1/30，1/60）

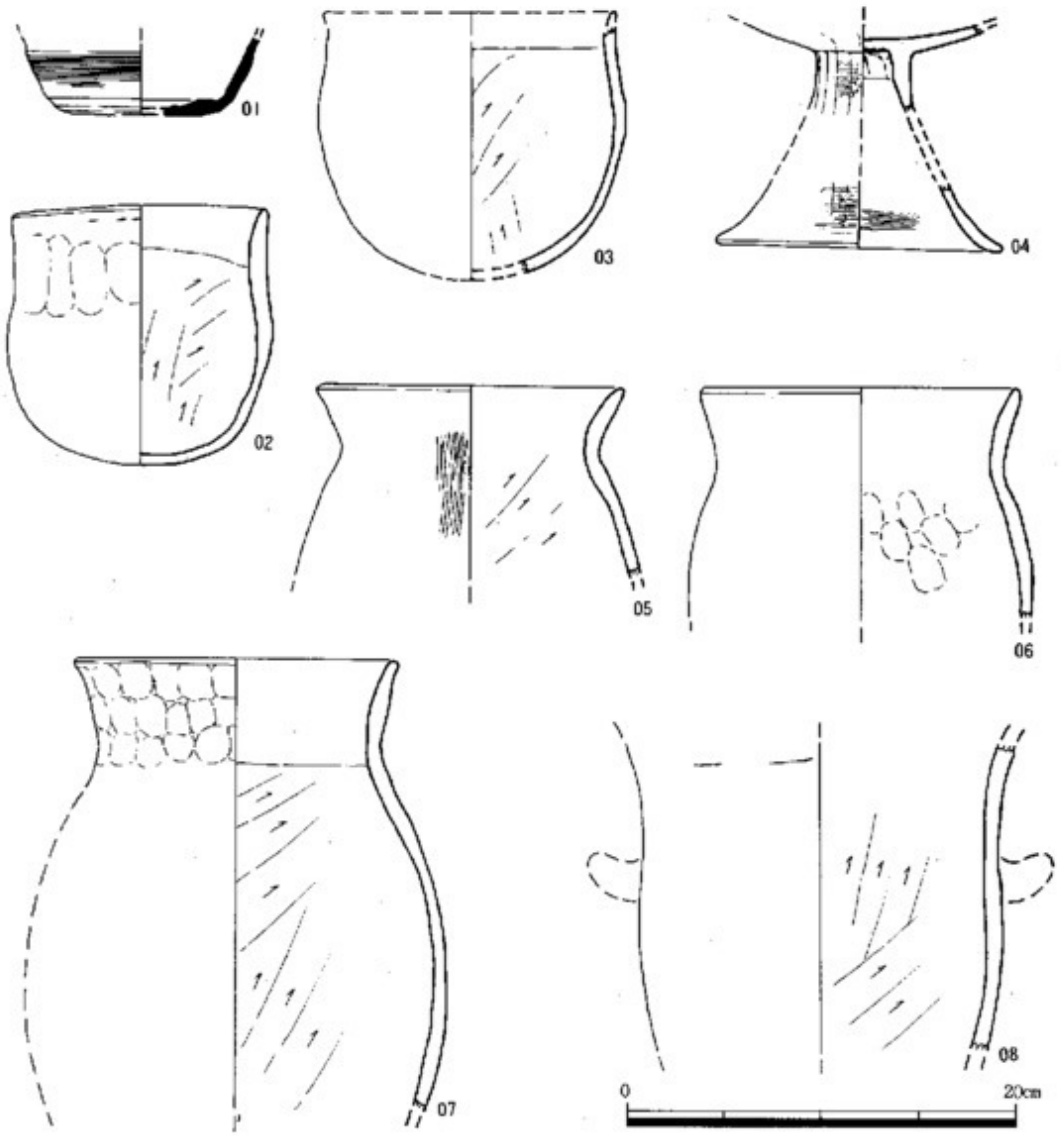


Fig. 25　SC01出土遺物(1/4)

須恵器の坏身底部片で，外面にはカキ目を施す。小田編年のⅤ類位と思われる。02～08は土師器で02は鉢か坩の3/4片で口径13.2cm，器高13.3cmを測る。外面は二次的火力を受け剥落が著しい。

内面はヘラ削りを加える。03は02と同様の器形と思われる1/5片で，口縁部は欠失する。復元胴径は15.8cmを測る。04は高坏の脚部片で，脚端径は復元で14.8cmを測る。外面はタテヘラ削りのちヘラ研磨，内面はヘラ削り，内外面に赤色顔料を塗る。05～07は長胴の甕。05は復元口径16.0cmを測り，く字状に外へ開く。外面はタテハケで，内面は削りである。06，07は05より口縁の開きが小さい。復元口径は06が16.4cm，07が16.0cmを測る。06は内面に指おさえ痕が残る。07は外面は剥落が著しく，調整は不明であるが，口縁部には指おさえ痕が残り，胴部内面はヘラ削りである。08は甑の胴部片と思われる。外面はナデ，内面はヘラ削りである。外面には工具痕が残る。

堀立柱建物（SB）

SB01（Fig. 26, PL11）

調査区南東隅で検出した主軸N－63°－Wに取る2×2間の建物で，南側桁行中央には柱穴がない。梁間全長2.40m（8尺），桁行全長2.55m（8.5尺）を測る。柱穴は円形で40～50cmと大きい。深さは10～40cmとバラツキがある。埋土は黒褐色土で，柱痕跡は16～18cmと比較的大きい。床面積は6.12m²である。出土遺物はP7より弥生式土器と思われる細片が1点出土した。

SB02（Fig. 26, PL11）

調査区北側SD07，08と重複する，主軸をN－33°30′－Eに取る2×3間の側柱の建物である。梁間全長3.6m，桁行全長5.4m，床面積は19.44m²を測る。柱穴は円形で，直径は20～30cm，深さは15～20cmと浅い。埋土は暗灰褐色土である。柱径は痕跡から10cm前後と小さい。遺物の出土はなかった。SD07，08より古い。

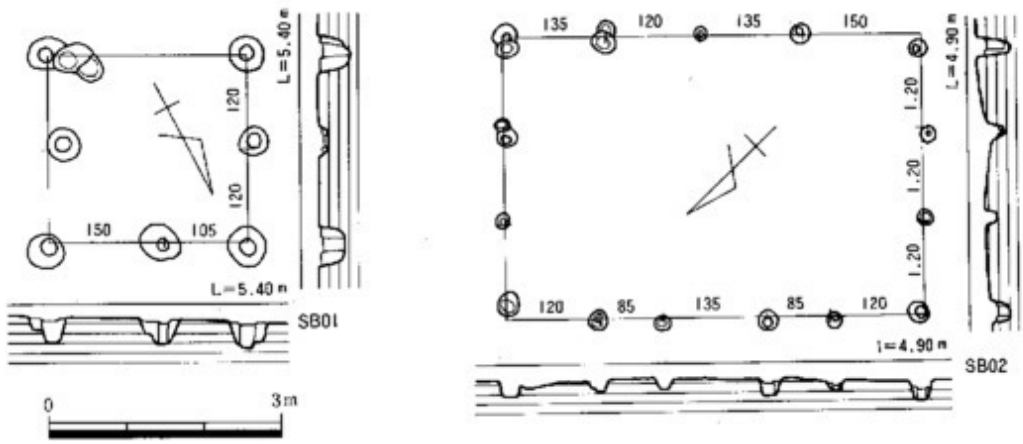


Fig. 26　SB01・02(1/100)

土坑（SK）

SK01（Fig. 27, PL13）

調査区中央で検出した。平面形は瓢形を呈し，２基の土坑の切り合と思われる。規模は全長0.95m，最大幅0.67mを測る。床面はほぼ水平であるが，中央にピットを１つ有する。埋土は暗茶褐色粘質土で，深さ７cmを測り，ピットはさらに５cm深い。

出土遺物（Fig. 28, PL15） 土坑中央から弥生式土器，土弾などがまとまって出土した。09～11は弥生式土器の甕である。09・10はくの字状に外反する口縁部を有する。09は口径20.4cmを測り，胴部は丸味を帯びる。10は口径32.6cmを測り，直線的な胴部を持つ。ともに磨滅のため調整はわからないが，外面はタテハケであろう。11は平底の底部片で，底の大半はない。底径は8.2cmを測り，立ち上りは直線的である。色調は09・10が淡褐色，11が赤褐色を呈し，胎土には石英，長石粒などを多く含み粗い。12は土弾で，長さ2.8cm，厚さ1.6cm，重さ6.2ｇを測る。全面ナデ調整で，淡黄褐色から黒色を呈し，胎土には石英，長石粒をやや多く含む。

SK02（Fig. 27, PL13）

SK01の北側で検出した。平面形は不整形を呈し，最大長1.0m，最大幅0.85mを測る。断面形は凸レンズ状を呈し，床面は丸味を帯びる。埋土は暗茶褐色粘質土で，深さ20cmを測る。

出土遺物（Fig. 28・29, PL15） 弥生時代の土器がまとまって出土したが，そのほとんどは床面から10cm浮いた状態であった。大形の破片が多いものの，完形品はない。14～20は弥生式土器の甕で14～16，18～20はくの字状に外反する口縁部を有するが，19を除いて逆Ｌ字に近い形態である。口縁部の先端は肥厚し，口唇部は丸い。胴部は丸味を帯び，19以外は胴部最大径は上部にある。口径は14が29.6cm，15が30.8cm，16が29.7cm，18が30.2cm，20が30.1cmを測る。調整は胴部外面がタテハケ，口縁部・頸部が両面ともヨコナデ，胴部内面はナデである。17は平底を有する底部から胴下部の破片で，胴部はゆるやかにカーブする。外面はタテハケ，内面にはナデ調整を施こす。胎土には石英，長石粒を含み，粗い。色調は淡黄褐色ないしは淡橙色を呈する。底径8.3cmを測る。13はくの字状に外反する高坏の口縁部片で，屈曲部の稜は明瞭である。口径25.4cmを測る。口唇部は丸味を帯びる。調整は磨滅のため不明で，色調は明橙色を呈する。胎土には石英，長石粒を多く含み粗い。21は器台。底径8.9cmを測る底部片で，器厚が2.5cmと厚い。裾部はやや広がり，体部は直線的である。調整は不明で，色調は橙色を呈する。胎土には石英，長石粒を含むが，他の土器に比べて良い。

SK03（Fig. 27, PL13）

SK02の北東側で検出した。平面形は卵形を，断面形はくずれた箱形を呈し，床面にピットが１つある。長さ1.23m，幅0.99m，深さ1.07m，ピットの深さ７cmを測る。埋土は暗茶褐色粘質土を主体にし，レンズ状の堆積を成している。床面近くからは，水が少量湧き出している。

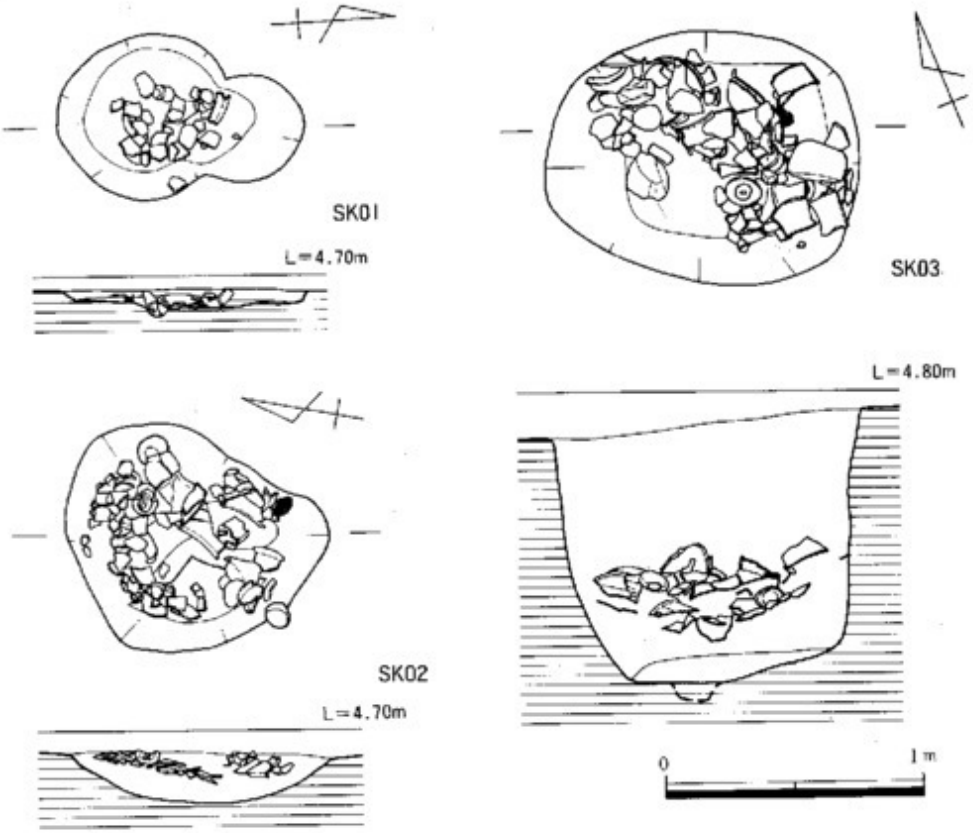


Fig. 27　SK01～03(1/30)

出土遺物（Fig. 30～32, PL16, 17）　中央やや下の深さのところから，大量の弥生式土器を中心とする遺物が出土した。遺物は土層と同様にレンズ状の堆積をしている。土坑がある程度埋った時点で投棄されたものであろうか。遺物総量はコンテナ３箱程である。

26～48は弥生式土器である。26，27は壺で26は断面形がくの字の短かい口縁部と，わずかに上げ底の底部を有する。口径15.3cm，胴部最大径18.8cm，底径6.9cm，器高14.7cmを測る。口縁端部は肥厚し，口唇部は平坦である。頸部内面の稜は明瞭である。胴部外面下半部の一部にタテハケが認められるが不明瞭で，内面はヨコナデとナデ調整である。淡橙色を呈し，胎土には石英，長石粒を含み粗い。27は胴部最大径が中央付近にあり，底部はやや上げ底である。胴部最大径19.0cm，底径6.8cm，現存高13.7cmを測る。両面とも丁寧なナデ調整を施している。色調は暗橙色から黒褐色を呈し，胎土は26より石英，長石粒がかなり少ない。28～32・35は器台で，３つのタイプに分けることが出来る。Ａタイプは28・29で，器壁がかなり厚く，内面の傾きが直線的なもので，おそらく棒状の工具に巻きつけて製作したものと思われる。裾部は広がり，

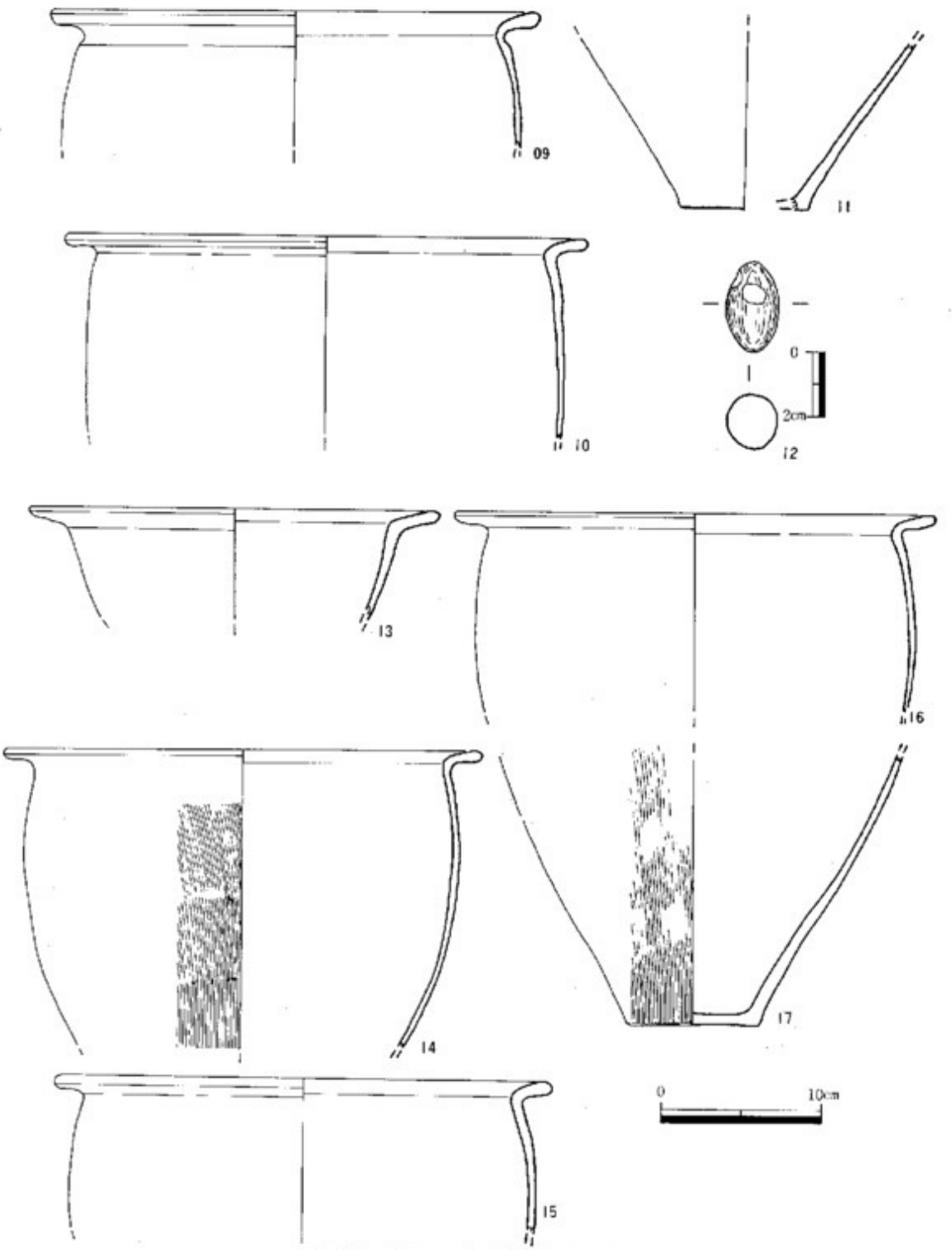


Fig. 28 SK01・02出土遺物(1/2, 1/4)

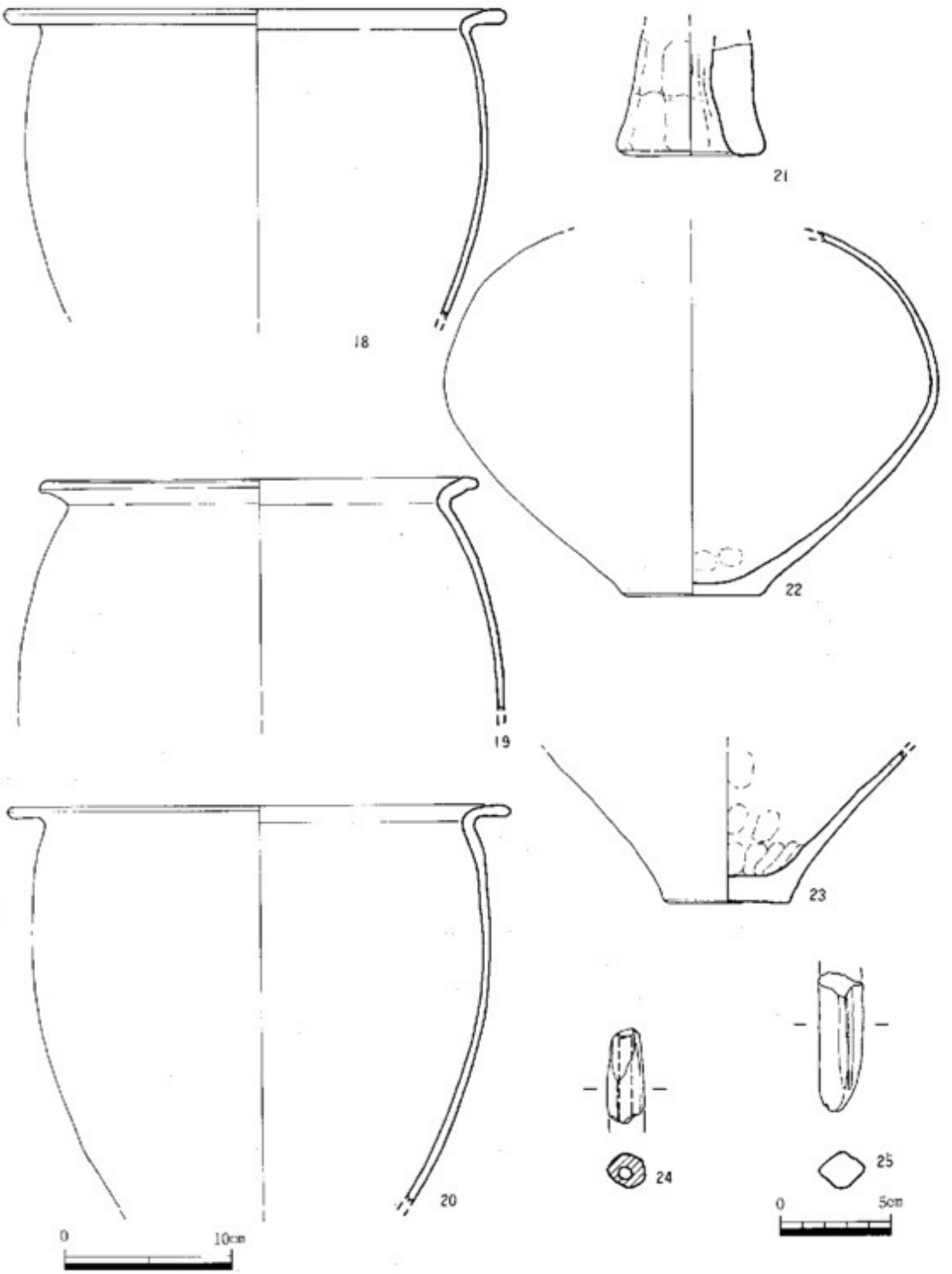


Fig.29 SK02・07・08出土遺物（1/3, 1/4）

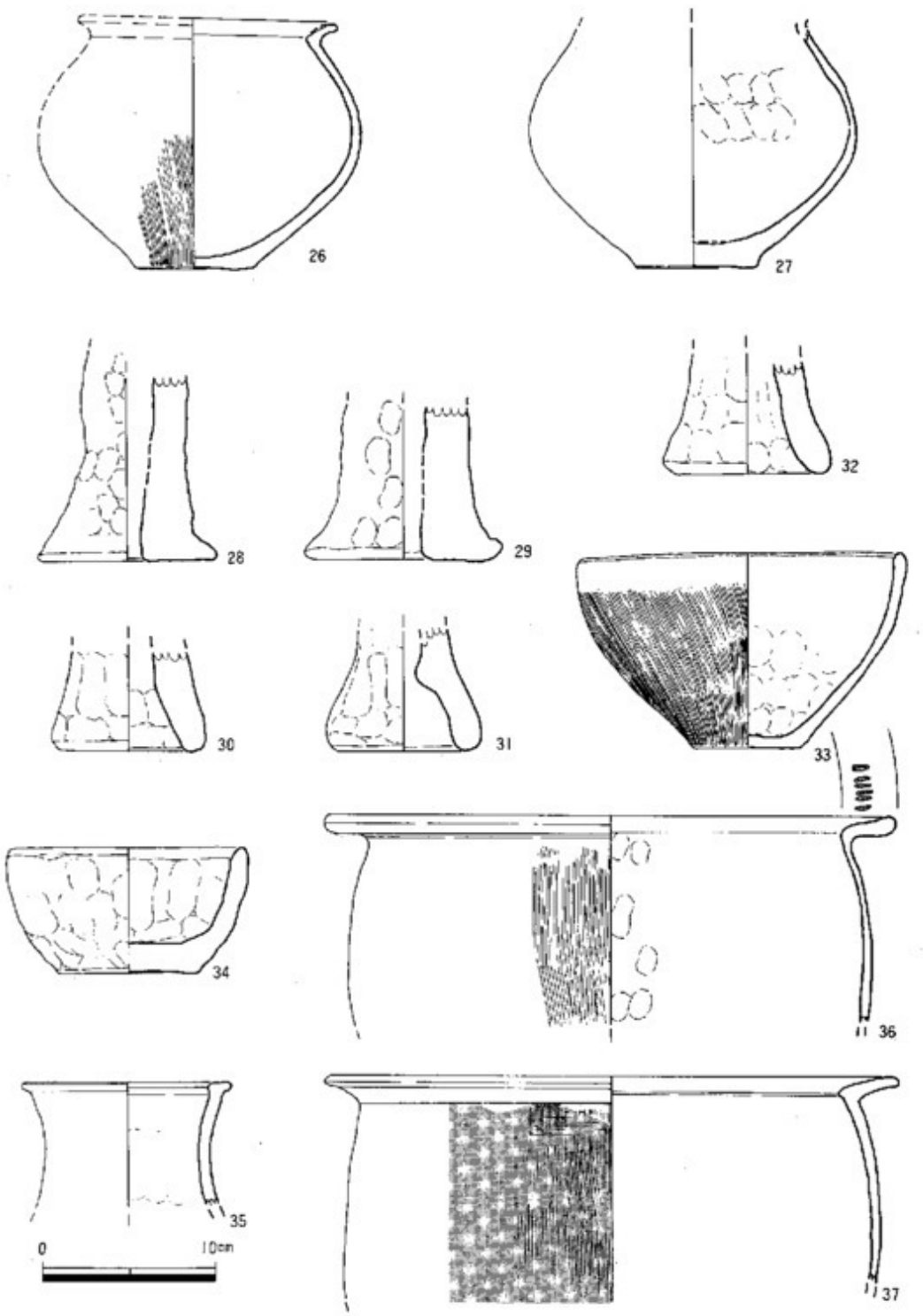


Fig. 30　SK03出土遺物Ⅰ(1/4)

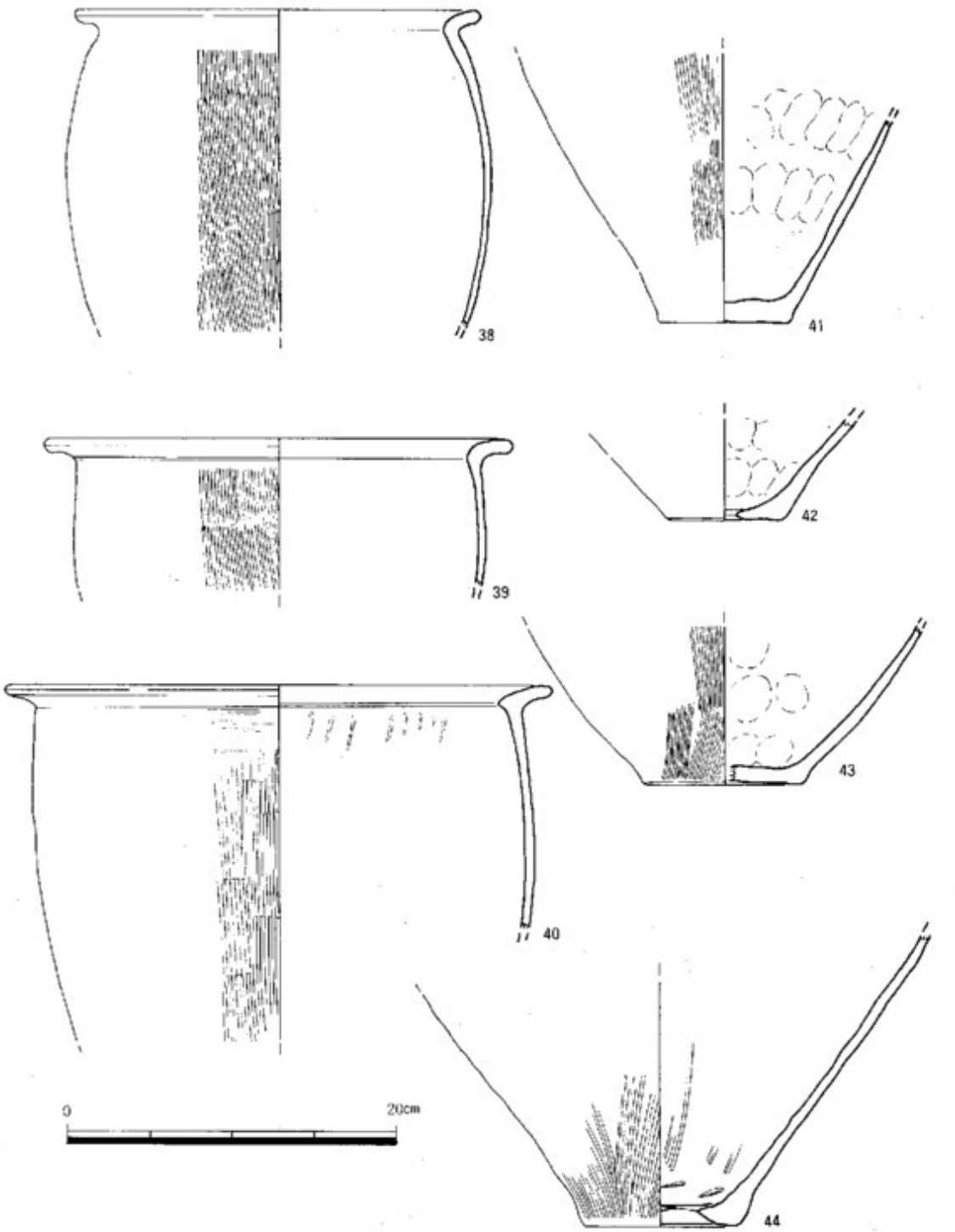


Fig. 31　SK03出土遺物II (1/4)

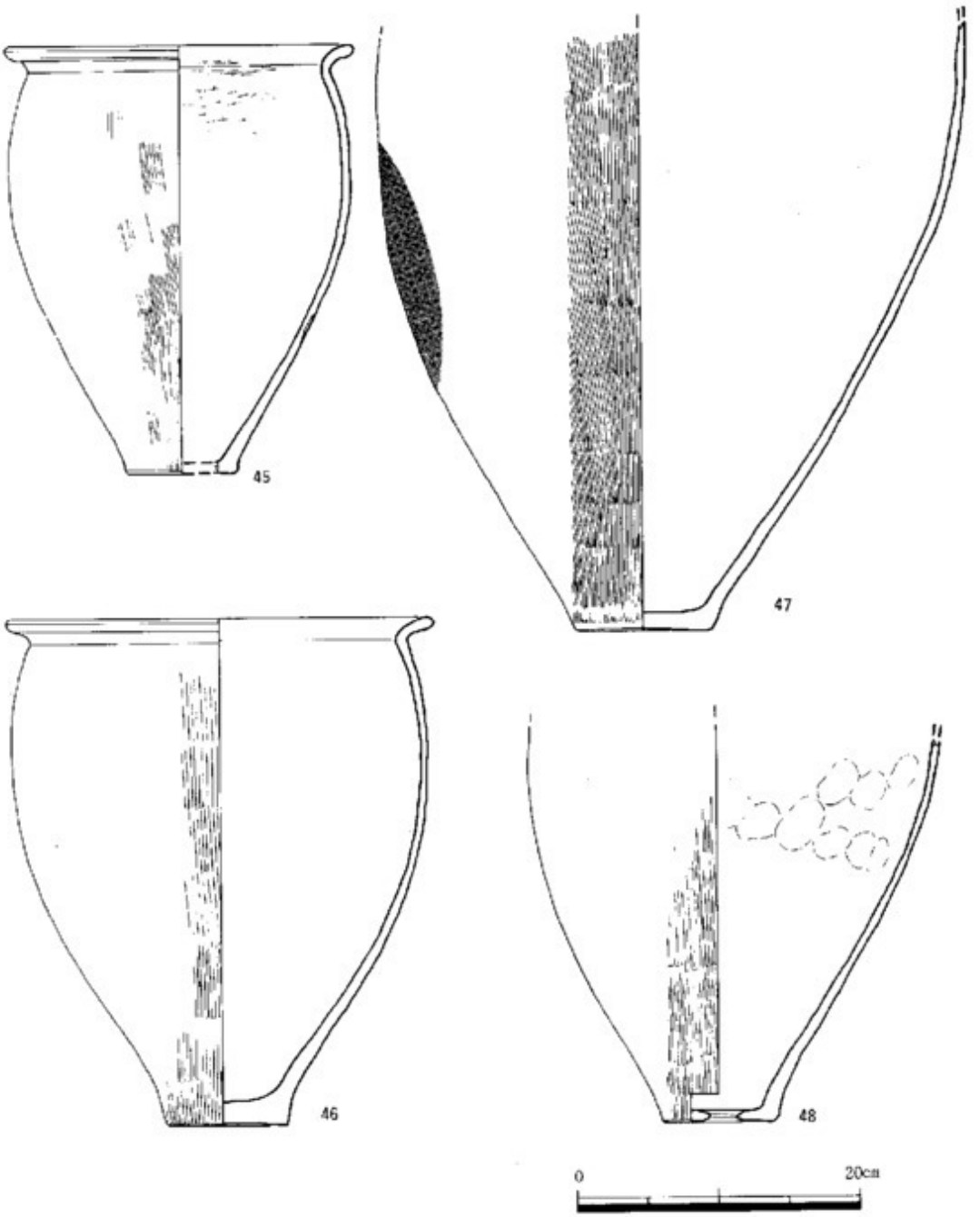


Fig. 32　SK03出土遺物Ⅲ(1/5)

底径は28が10.3cm，29が11.4cmを測る。外底部には植物の繊維状の圧痕が認められる。ともに粗いナデ調整を施す。石英，長石粒を多く含み，粗い。Bタイプ（30～32）は，内面の裾部も広がるものである。31の内面は途中で突き出ているが，これは内面にかなり凸凹があるためである。いずれもナデ調整で仕上げているが，30・32はやや丁寧で，31は粗いナデを施こしている。胎土は30・32が石英，長石粒をやや多く含むが，31はほとんど含まず，重量比が軽い。色調は淡～暗褐色を呈する。Cタイプ（35）は薄い器壁をもつもので，口縁部は内面に突出する。余り類例を見ないもので，形態から器台とした。口径は12.2cmを測る。胎土は長石粒を含む。33・34は鉢である。33はやや大型の鉢で，口径19.1cm，底径6.4cm，器高11.4cmを測る。口唇部は丸く収める。調整は口縁部外面がヨコナデ，体部がタテハケ，内面は全面ナデ調整であるが，体部下半にタテハケがわずかに認められる。タテハケの後ナデたものであろう。胎土には石英，長石粒を少量含む。34は小形の鉢，もしくは椀に近い器形で，体部の器厚が約１cmと厚い。口径14.0cm，底径7.9cm，器高7.3cmを測る。口唇部は尖り気味で，体部は丸味を帯びる。ほぼ全面ナデ調整で，胎土に石英粒，長石粒を多く含み粗い。色調は33が淡黄褐色から淡橙色，34が暗赤橙色を呈する。36～48は甕である。口縁部の形態は３つに分けられる。断面形が逆Ｌ字形に近いもの（37・40），Bタイプは断面形が逆Ｌ字形に近いくの字形で，口縁部内面の稜が明瞭なもの（36・39），Cタイプは断面形がくの字形を呈し，内面が不明瞭なもの（38・45・46）である。Aタイプは口縁端部が細くなっていくのに対し，B・Cタイプは肥厚する。口唇部はいずれも丸く収める。また36のみ，口縁部上面をわずかに凹ませており，その口縁部上面に櫛状施文具もしくは貝殻腹縁状の施文具による押圧が，2.5cmの間に７本施されている。口径と胴部最大径は，36が33.2cmと30.4cm，37が33.7cmと31.1cm，38が24.6cmと25.8cm，39が28.4cmと25.0cm，40が33.1cmと30.8cmを測る。45は口径24.8cm，胴部最大径24.2cm，底径8.0cm，器高30.2cmを測る。46は口径30.3cm，胴部最大径29.4cm，底径8.5cm，器高36.0cmを測る。底部片は立ち上がり角度が直立方向に近いもの（41・45～48）と，水平方向に近いもの（42～44）に分けられる。前者は45や48のように細身の器形になり，後者は太身の器形になろう。42・44・48には底部に径1.5～2.0cmの焼成後の穿孔が施されている。底径は41が8.0cm，42が7.0cm，43が9.8cm，44が9.6cmを測る。調整は原則として，口縁部，頸部が両面ともヨコナデ，胴部は外面がタテハケ，内面がナデ，底部はナデである。器面の残りが悪いためハケの単位本数は不明である。ハケ１本の間隔はほぼ１mm内外であるが，47のみは３～４mmと大きい。47の内面の底部立ち上がり部分にはいわゆるタタキの痕跡があるが，これはかなり目の細かいハケ状工具による調整の起点と思われる。口縁部のヨコナデと内面のナデはいずれも比較的丁寧に施されている。

SK04（Fig. 33）

調査区北側の西側境界地で検出した。平面形は長楕円形，断面形は逆台形を呈する。長さ1.02m，幅0.70m以上，深さ45cmを測る。埋土は青灰色粘質土で，時期的には新しいものと推定で

きる。

出土遺物　二次焼成を受けた玄武岩の小片が２点出土した。

SK05（Fig. 33）

調査区中央付近で検出した。平面形は細長い不定形を呈する。掘り方は東側が三段掘りで，階段状を呈す。長さ1.36m，幅0.42m，最深部の深さ32cmを測る。埋土は暗茶褐色粘質土である。

出土遺物　弥生式土器の細片が18点出土した。

SK06（Fig. 33）

調査区北東側で検出した。SD06に切られる土坑である。平面形は楕円形で，規模は全長0.88m，幅0.56m，深さ18cmを測る。埋土は暗茶褐色粘質土である。

出土遺物　実測不可の弥生式土器細片が40点出土した。また粘土塊も２点出土した。

SK07（Fig. 34）

調査区中央やや北側で検出した。薄い包含層の上面から掘り込んでいる。平面形はやや右曲がりの細長い楕円形を呈する。掘り方は二段掘りで，中央部分がもっとも深いが，床面の凹凸が激しく，基本的には逆台形を呈する断面形も場所による差が激しい。南側の東壁面にはピットが切り合う。長さ5.44m，幅1.52m，最深部の深さ30cmを測る。

出土遺物（Fig. 29, PL14）　出土遺物のほとんどが弥生式土器で，その他に土錘などがある。コンテナ１箱出土した。22・23は弥生式土器の壺である。22は胴部最大径29.8cm，底径8.5cmを測る。胴部は張りが強く，胴部最大径は胴部中央よりやや上位にある。外面は剥落がひどく，調整は全くわからないが，底部付近にわずかに赤色顔料が認められる。胎土には中～大粒の石英，長石粒を多く含み粗い。色調は肌色で，焼成は良好である。23は底径7.6cmを測る底部片で，やや上げ底である。調整は内面がナデで，外面は不明である。22に比べ，石英，長石粒などの含有率がかなり低い。色調は橙色を呈し，焼成は良好である。24は半欠の土錘で，現存長3.3cm，幅1.7cm，孔径0.6cmを測る。胎土には赤色鉱物を多く含み，土器と胎土が異なる。淡い肌色を呈し，焼成は良好である。25は携帯用の砥石と思われるが，半分欠失する。現存長6.4cm，最大幅2.0cm，最大厚1.7cmを測る。全面研磨されており，二側辺には使用による線条痕が認められる。石材は砂岩質のものを用いている。

SK08（Fig. 34, PL14）

調査区南西側の薄い遺物包含層上面で検出した。平面形はやや歪んだ方形を呈する。南北方向の二辺は3.0mと3.12m，東西方向の二辺は3.0mと2.8mを測る。底面はほぼ平坦で，深さ２～６cmと浅い。西壁近くの底面でピット２つを検出し，ピットの直径26～28cm，深さ24～30cmを測る。埋土は黒褐色粘質土である。焼土はなく，前述のピット以外には柱穴もなかった。

出土遺物（Fig. 35, PL17）　弥生式土器がほとんどで，総量はビニール大袋１袋である。49・

50は弥生式土器の甕である。49は口径26.0cmを測る口縁部片で，断面形はくの字状を呈する。口縁端部は肥厚し，口唇部は丸味を帯びている。頸部内面の稜は不明瞭で，やや丸味を帯びる。調整は口縁部，頸部が両面ともヨコナデ，胴部外面はタテハケ，内面はナデである。色調は淡黄褐色から橙色を呈し，胎土には石英，長石粒をやや多く含む。50は底径8.2cmを測る底部片で，調整は磨滅のため不明。胎土は49とほぼ同じである。51は小形の石鏃で長さ1.8cm，幅1.3cm，厚さ0.4cm，重さ0.4gを測る。先端の尖りは鋭く，押圧剝離は丁寧である。うすい稿の入った黒曜石製である。

SK09（Fig. 33, PL14）

調査区中央西側，SK08の北東で検出した。遺物包含層上面で検出し，東側を試掘トレンチに切られている。平面形は不定形な長楕円形を呈すると考えられる。現存長1.40m，幅1.26mを測る。底面はほぼ平坦で，深さは5cmと浅い。埋土は暗茶褐色粘質土である。

出土遺物（Fig. 35, PL17）　弥生式土器が少量出土した。52は弥生式土器の壺と思われる底部片で，やや上げ底である。調整は両面ともナデで，色調は淡黄褐色，内面は黒灰色を呈する。胎土は良く，少量の金雲母状の鉱物と石英粒を含む。

SK10（Fig. 34, PL14）

調査区中央付近で，包含層を掘り下げた後に明確に検出したが，部分的には包含層上面でラインが見えていたことから，包含層上面から掘り込んだ可能性が高い。平面形は長方形を呈すが，南東隅が南側に張り出す。規模は全長5.62m，幅2.74m，張り出し部分の幅1.50mを測る。底面はほぼ平坦で，深さは最大10cmと浅い。底面でピット5を検出した。埋土は黒褐色粘質土で，遺物は土器片が少量検出した。

出土遺物（Fig. 35）　53は底部，口縁部を欠失するが，丸底の小型壺と思われる。胴部最大径12.4cmを測る。調整は不明であるが，両面ともナデと思われる。胎土には石英，長石粒を多く混入，色調は橙色を呈す。内底部に煤状のものが付着する。土師器であろうか。

SK11（Fig. 33）

SK12に切られる平面形が不整円形を呈する土坑である。規模は全長1.36m，幅1.10m，深さ10cmを測り，SK12より浅く，底面は平坦である。底面には3ヶ所のピット状の浅い落込みがある。埋土はSK12よりくらい暗褐色粘質土である。出土遺物は少なく，弥生式土器と思われる細片が1点のみである。

SK12（Fig. 33）

調査区北東隅で検出した。平面形が楕円形を呈す土坑である。規模は全長1.02m，幅0.56m，深さ12cmを切り，埋土は暗褐色粘質土である。土層断面の観察によれば，2つの遺構の切合の可能性がある。

出土遺物　少なく弥生式土器と思われる甕，器台の細片など10点である。

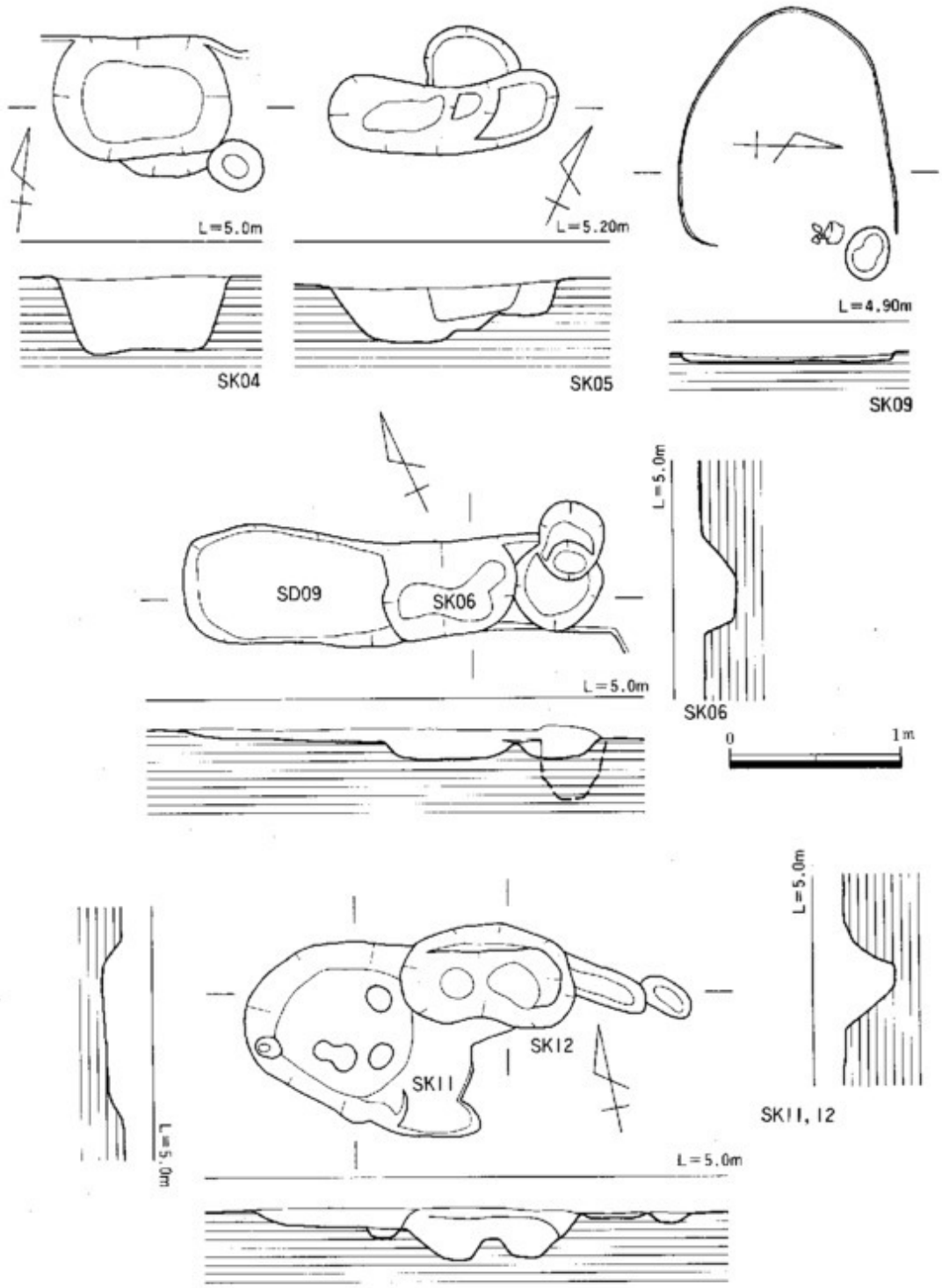


Fig. 33　SK04～06・09・11・12・(1/40)

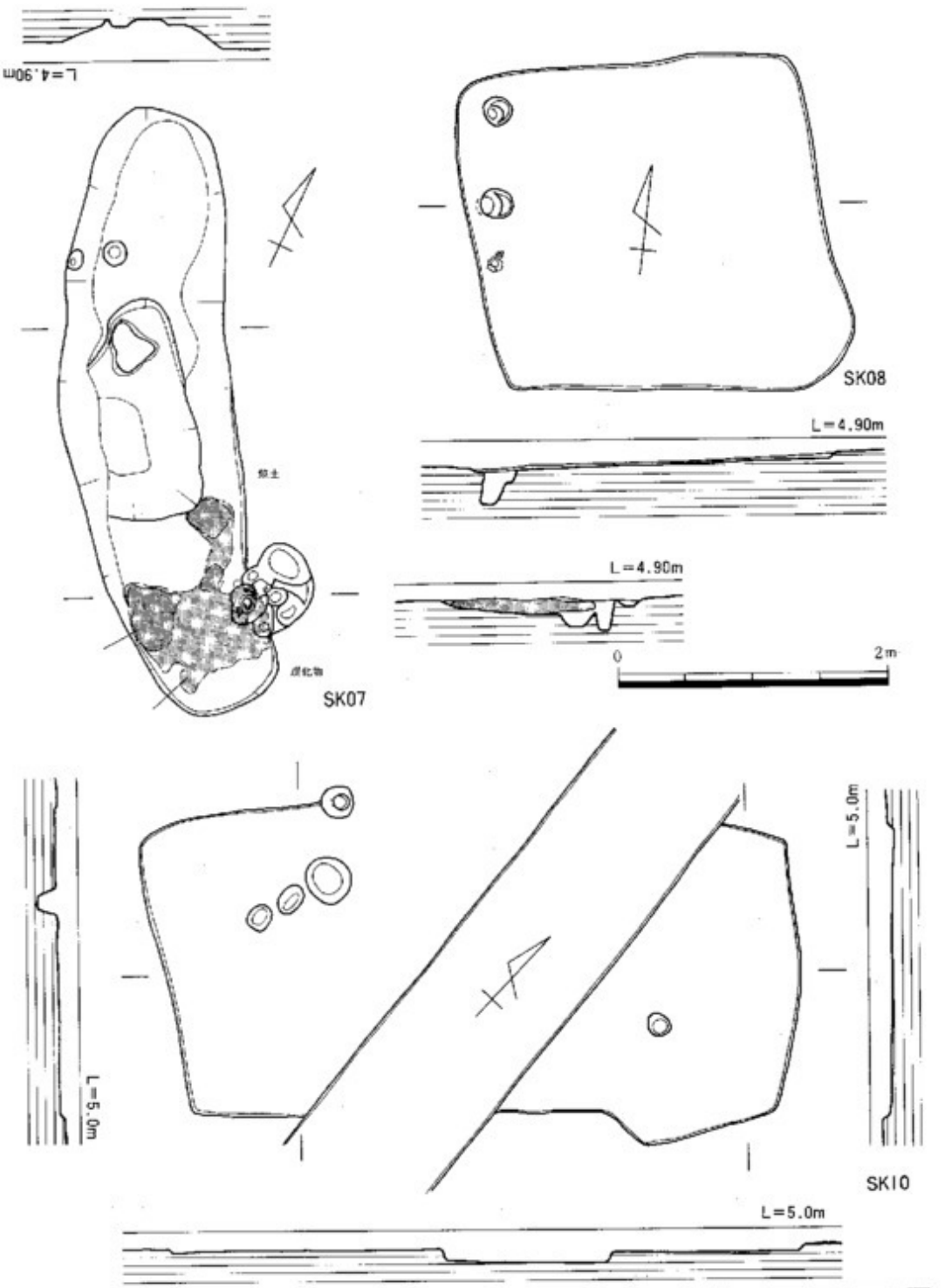


Fig. 34　SK07・08・10 (1/50)

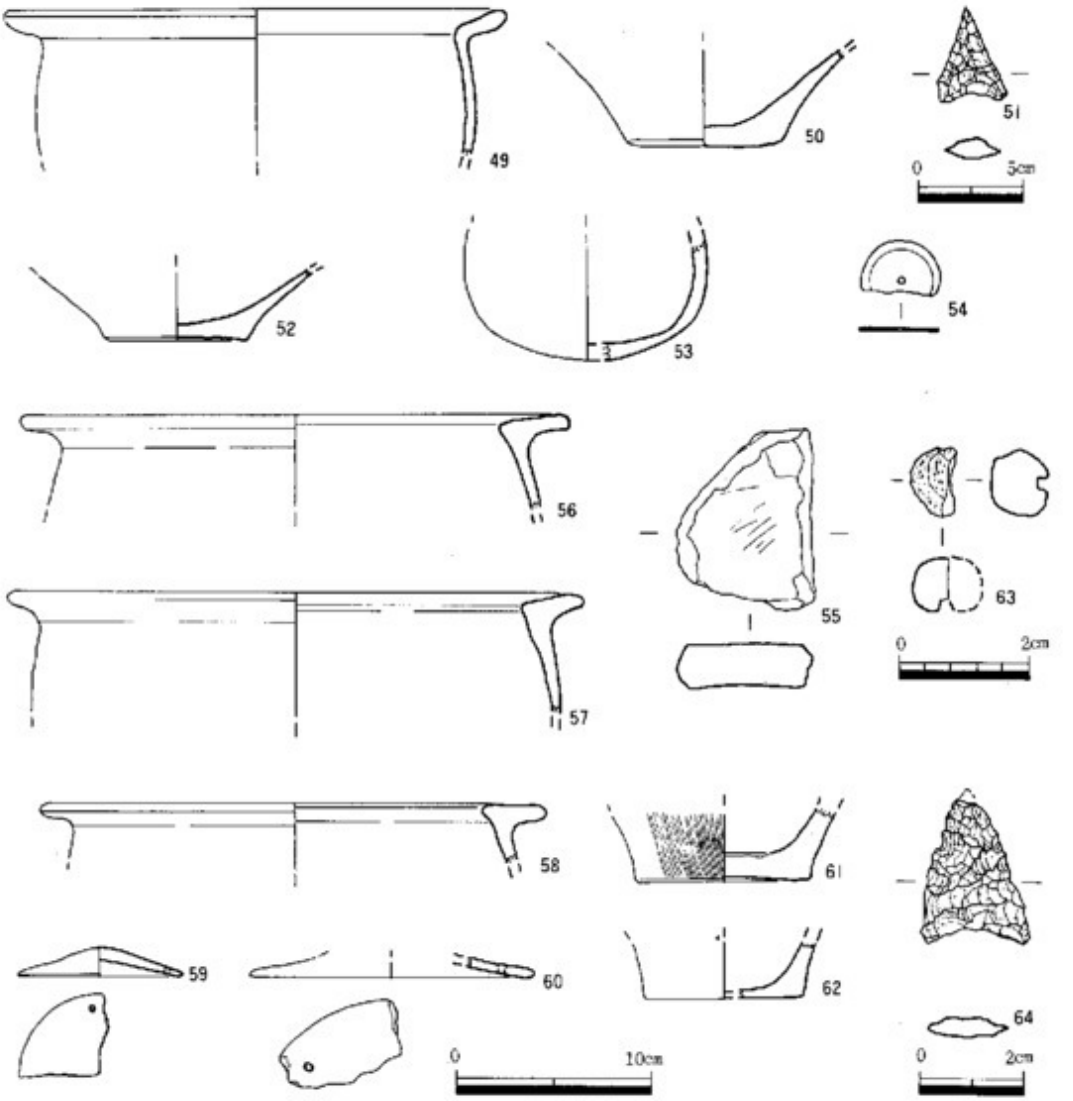


Fig.35 SK08～10・SX04・SD07・ピット出土遺物(2/3, 1／3, 1/4)

その他の土坑（ＳＸ）(Fig. 35, PL17)

南東隅で10基検出した。大きさは0.7～2.5m位と様々である。埋土は淡灰褐色粘質シルトである。掘ると壁がえぐれたり，地山との境が明瞭でなかったりと，人為的な遺構としてはとらえがたい。風倒木等の痕跡と考えられる。遺物は炭化物が少量出土したが，ＳＸ04から砥石の小片が１点出土した。55は砂岩製で長さ7.1cm，幅5.3cm，最大高1.7cmを測り，上面を使用する。粒子は比較的密で，色調は淡黄褐色を呈す。

溝状遺構（SD）

大小合せて11条検出した。

SD01（Fig. 20）

調査区南西隅で一部分を確認した。深さは20cmと浅く，床面は北へ向ってやや低くなる。埋土は黒褐色土である。明治時代の地図によれば，調査区該当地の西側を細い道が南北に延びており，SD01はその旧道に相当するかもしれない。調査区西壁沿いに確認された浅い攪乱は道脇に植えられた植栽の可能性がある。出土遺物は少なく弥生式土器又は土師器の細片，近現代と考えられる陶磁器，瓦の小片合計10点出土した。

SD02～06（Fig. 20）

SD02は北東隅で検出された。全長2.50m，幅0.4m，深さ15cmを測る。断面形は逆台形で，埋土は暗褐色粘質土である。遺物は弥生式土器の細片が34点出土した。

SD03はSD02の北側，北壁にかかる小溝で，確認長1.5m，幅0.3m，深さ15cmを測る。底面にはピット状の落込みがあり凹凸が激しい。埋土は褐色粘質土である。弥生式土器の細片が14点出土した。

SD04はSD02の西側で検出した東西方向の小溝で，試堀トレンチに切られる為全様は不明。現存長1.6m，幅0.3m，深さ7cmを測る。埋土は暗褐色粘質土である。弥生式土器または土師器の細片が4点出土した。

SD05はSD12に切られる小溝で，東西方向に弧状に延びる。全長3.8m，最大幅0.4m，深さ6～9cmを測る。埋土は暗褐色粘質土である。土器片が1点出土した。

SD06はSD07の南側で検出した北西方向に延びる小溝で，全長3.5m，幅0.3m，深さ5cmを測る。埋土は暗褐色粘質土に地山ロームを混入する。出土遺物はない。

SD07（Fig. 36, PL11）

調査区北側で検出した。南へやや湾曲しながら東西方向へ延びる溝で，北側のSD08とほぼ並行する。底面は東から西へ深くなる。確認長は17m，幅は0.7～1.1mを測り，深さは6～16cmと浅い。埋土は暗黄褐色砂混粘質土である。

出土遺物（Fig. 35, PL18） 弥生式土器や陶器，染付の細片13点と54が出土した。54は径3.1cm，厚さ1mmの円板形の飾金具と思われる銅製品で，半分欠失する。中央に2mmの孔があり，片面は丁寧な研磨で周縁にコンパスによる圏線が入る。全面に金メッキする。

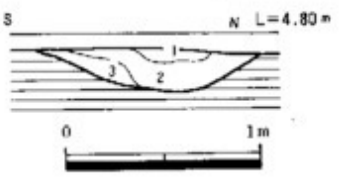
SD08（Fig. 20）

SD07に並行する北側の溝で，確認長13.5m，幅1.0～1.3mを測る。深さは10cm前後で浅い。SD07との間隔は0.8～1.2mを測る。埋土はSD07とほぼ同じである。

出土遺物　大部分が近代頃のもので，量は少ない。陶製の土管，七輪，染付碗，白磁の紅皿の細片などが６点出土した。

SD09～11（Fig. 20）

いずれも調査区北東隅で検出された小溝である。SD09は確認長2.5m，幅0.6m，深さ５cm，10が確認長1.5m，幅0.2m，深さ５cm。11が確認長1.4m，幅0.2m，深さ４cmで，底面にはピットが切り込んでいる。遺物の出土はいずれもなかった。



土層名称
1. 明赤褐色地山ブロックに暗黄褐色粘質土混入
2. 暗黄褐色砂質粘質土
3. 2に明赤褐色地山粒子を混入

Fig.36　SD07土層（1/40）

Pit出土遺物（Fig. 35, PL17）

総数68個のPitから遺物が出土したが，量はそれ程多くない。弥生式土器片が大半である。56～62は弥生式土器である。56～58は甕の口縁部片で，口縁部は逆Ｌ字形を呈す。口縁部が平坦なもの（58），内傾するもの（56・57）の２種類がある。口径は56が28.2cm，57が29.6cm，58が26.0cmを測る。61・62は甕の底部片である。底径は復元で61が9.0cm，62が8.2cmを測り，61はわずかに上げ底で，底部に植物の葉脈痕が残る。61はナナメハケを外面に施す。59・60は山笠状の蓋である。直径は復元で59が8.4cm，60が14.8cmを測り，59はやや小振りである。それぞれ１ヶ所紐通し孔がある。本来は２個づつ，１対あったと思われる。孔径は59が２mm，60が３mmである。56から62とも全体に器壁は磨滅する。63は軽石製の浮子で半欠品である。残存長2.6cm，厚さ2.1cm，重さ２gを測る。64は黒曜石製のやや大型の石鏃で尖端を欠失する。全長2.8cm，幅2.1cm，厚さ0.4cm，重さ1.8gを測る。56はＳＰ07，55・58はＳＰ57，59はＳＰ30，60はＳＰ42，61はＳＰ41，62はＳＰ61，63はＳＰ20，64はＳＰ22の出土である。

包含層出土遺物（Fig. 37・39, PL18）

包含層からは弥生時代の土器・石器がコンテナ２箱出土した。

65～71は弥生式土器の甕である。口縁部は断面形が逆Ｌ字形を呈すもの（65・66）と，くの字形を呈すもの（67～69）に分けられる。65は口径27.0cmを測り，口縁部上面はほぼ水平で，口縁部内面は内側に突出する。口唇部は丸味を帯びている。66は口縁部上面がやや外傾に下がる外は，65とほぼ同様である。65は石英，長石粒を多く含み，胎土は粗いが，66は砂質の粘土を用い，金雲母，長石などの小粒子を多く含んでいる。ともに橙色を呈する。断面形がくの字形を呈する67～69は，口縁端部が肥厚し，口唇部は丸くおさめる。頸部内面の稜は不明瞭で，丸味を帯びる。口径は67が36.6cm，68が31.0cm，69が29.9cmを測る。調整は磨滅のため不明である。胎土は67・68は石英，長石粒を含み粗いが，69は金雲母，石英粒などの粒子が細かく，

良好である。70・71は底部片で，ともにやや上げ底である。70は底径8.7cmを測り，外面はタテハケ調整，内面はナデ調整を施こす。胎土には多くの石英，長石粒を含み粗い。71は底径8.0cmを測り，調整は磨滅のため不明。胎土は良好。72は凹石である。花崗岩系の石材を用いる。欠損品である。現存長8.6cm，現存幅6.3cm，最大厚4.4cmを測る。表裏両面に径約3cm，深さ0.3cmの使用による凹みが認められる。全面二次焼成のため赤く焼けているが，使用痕部分は赤変しておらず，二次焼成を受けた後，使用されたものと考えられる。83は包含層西側で検出したサヌカイト製のスクレイパーもしくはピュランと思われるものである。石刃状剥片を利用した横長の削器である。背部右側辺の一部に刃部を作り出している。末端部に樋状の剥離痕が認められるが，意図的なものかは疑問である。長さ8.0cm，幅3.1cm，厚さ1.06cmを測る。

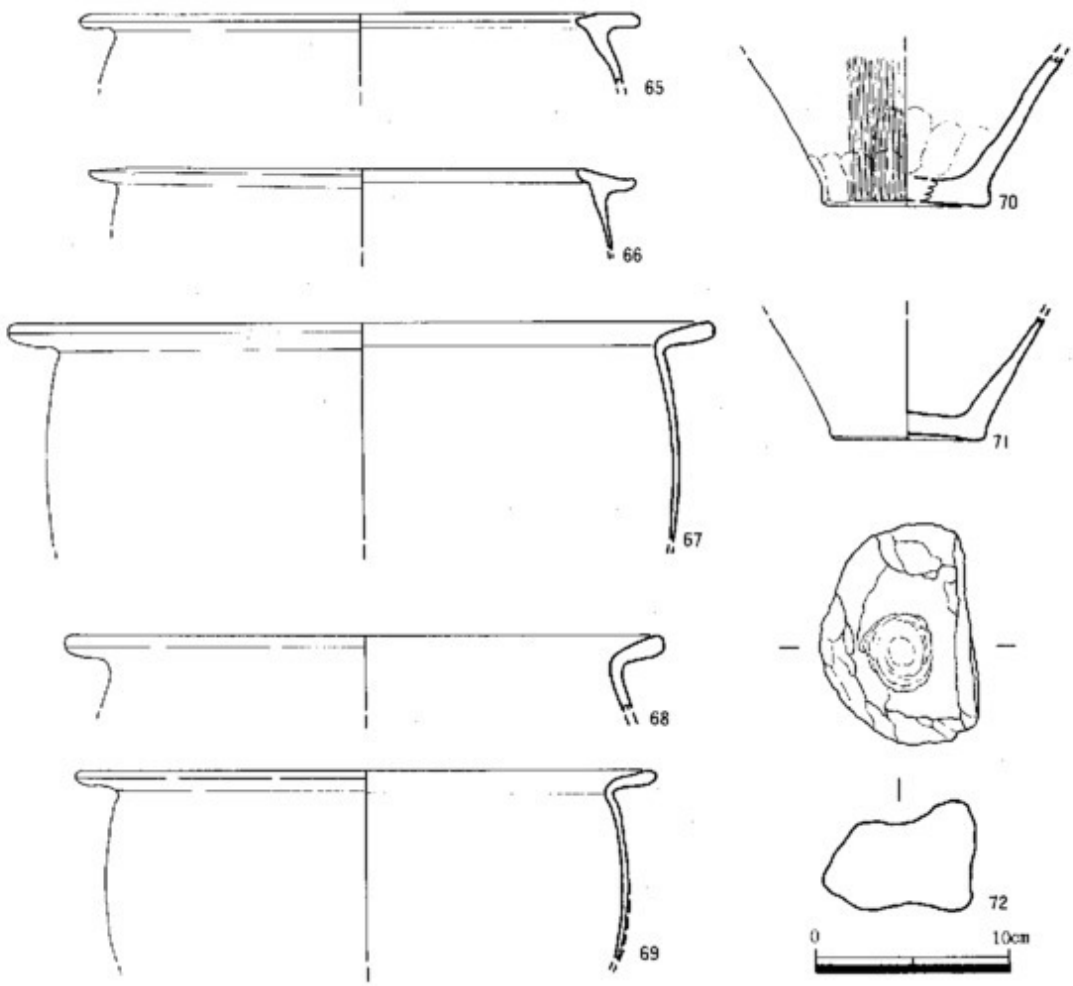


Fig.37　包含層出土遺物（1/4）

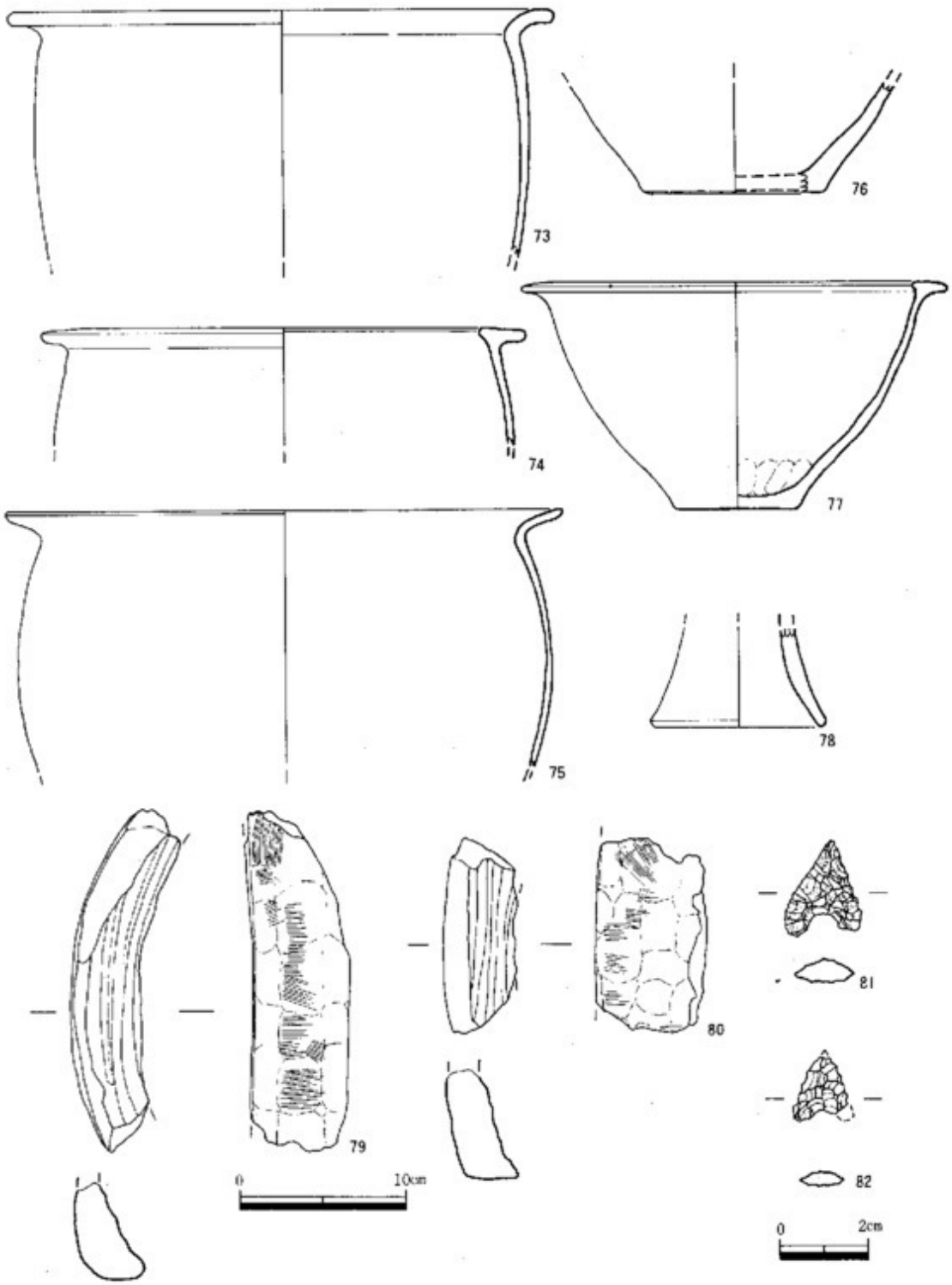


Fig. 38　道構面出土遺物（2/3, 1/4）

遺構面出土遺物 (Fig. 38, 39, PL18)

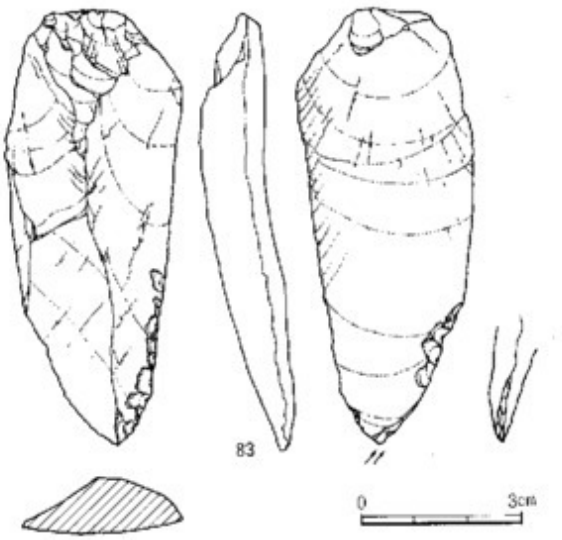


Fig.39 包含層西側出土遺物 (2/3)

73～78迄は弥生式土器である。73～76は甕で，73～75は口縁部片，76は底部片である。口径は復元で73が32.9cm，74が29.2cm，75が33.5cmを測る。口縁部の形態は73がやや厚めでく字状に丸味を持って外反するタイプ，74は逆L字状に口縁部を水平に引出すタイプ，75が73と同様であるが，器壁が薄いタイプである。胴部は73がストンと落ちるが74・75ともやや張り出す。調整はいずれも器壁の磨滅が著しく，調整は不明。胎土は73・74が砂粒をやや含む。75は多く混入する。色調はいずれも黄橙色を呈する。76はわずかに上げ底気味の底部片で，底径11.0cmを測る。器壁は磨滅がひどく。調整不明，胎土は砂粒をやや混入する。色調は淡黄色を呈し，外面底部付近に黒斑がある。77は鉢の1/2片で，口径25.5cm，器高13.6cmを測る。口縁部は鋤先状を呈す。全体に磨滅するが，内底部付近には指おさえ痕が残る。胎土は砂粒を多く混入し，色調は橙色を呈す。78は器台で，底径10.6cmを測る。器壁は磨滅し調整は不明。胎土は砂粒を少く，色調は淡橙色を呈す。79・80はカマドの底部片で同一個体のものと思われる。79は全長20.5cm，80は全長11.7cmを測る。いずれも外面は指おさえ痕が明瞭に残り，タテ又はナナメの細かいハケ目を施す。内面は指ナデ調整痕が明瞭に残る。81・82は黒曜石製の石鏃である。82がやや小振りで，基部と尖端の一部を欠失する。81は全長2.2cm，最大幅1.7cm，厚さ0.5cm，重さ0.9gを測る。82は現存長1.4cm，最大幅1.2cm，厚さ0.3cm，重さ0.4gを測る。73～78は包含層下の遺構面出土である。73・74は土器群①，75・78は土器群②，76が土器群③，77が土器群④である。

第4章　小　　結

以上調査の概要について述べたが，ここではそれらの若干のまとめと問題点を述べて，小結としたい。今回の調査で検出された遺構は竪穴住居址1棟，土坑12基，溝11条，堀立柱建物2棟であるが，それらは出土遺物から見て大きく3時期に分ける事が出来る。第Ⅰ期は弥生時代中期後半頃，第Ⅱ期は古墳時代後期，第Ⅲ期は中世から近世にかけてである。

第Ⅰ期はSK01～03などが相当する。SK03は土坑としたが，湧水がある事や，他遺構と比べ極めて深い事から井戸の可能性もある。SK05～09なども出土遺物から同時期の可能性がある。

第Ⅱ期はSC01が相当する。出土した坏01の形態は，小田富士雄氏の九州地区須恵器編年のⅤ期に相当するものであり，7世紀前半代が考えられる。この住居址は3.84m×2.84mを測り，隅丸長方形を呈している。一般に福岡地区では古墳時代後期の住居址は，ほぼ方形で主柱穴4本の規格化された形態を持っている。早良平野を含む福岡平野では古墳時代のカマドを持った住居址は現在16の遺跡[註16]で確認されている。傾向としては新しくなる程，南八幡トヨナシ遺跡[註17]（奈良時代）例のように，一辺3m位と小型化し，主柱穴も床面で検出されないか，不規則な形に変化して行く。そこには何らかの住居構造の変化が感じられる。平面形が長方形プランでカマドを隅に持つ類例は少ないが広石遺跡群C地点[註18]にあるようで，また羽根戸原C遺跡第2次地点[註19]のSC04もそれに近いものと思われる。

第Ⅲ期はSD07・08の時期である。いずれも遺物は少なく，しかも近世の遺物を含んでいる。SD01とSD07・08はほぼ方向的に直交すると思われ，関連するものかもしれない。畑や屋敷地などの地割の溝や道路かもしれない。

さて堀立柱建物の時期であるが，SB01は南西桁行側中央の柱穴を1つ欠く，やや異なった形態であるが，柱穴から弥生式土器片が1点出土しているだけであり，大きくいって弥生時代以降のものであろう。SB02については柱穴の規模・形状・柱割りから考えて中世以降のものである。SD07・08の埋土下で柱穴が検出されており，SD07・08の堀開された以前のものであろう。

包含層の時期については，出土遺物は弥生時代中期後半の遺物を多く含んでいる。SC01，SK07がこの包含層直上より切り込んでおり，SC01が掘られる前に，包含層が形成されていたものと思われる。SK07は弥生時代中期後半のものであり，包含層はその頃すでに形成されたと思われる。また包含層の分布から旧地形を復元すれば，北側から東南にかけてやや高く，包含層部分が鞍部を形成し，その低い部分に包含層が形成されたものと考えられる。

註

註１，立地と環境を書くには以下の文献を参考にした。

福岡市教育委員会「浄泉寺遺跡－遺構編－」福岡市埋蔵文化財調査報告書第99集　1983

福岡市教育委員会「神松寺遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第45集　1978

干隈遺跡調査会「干隈遺跡」　1985

鳥越・七隈古墳群調査会「鳥越・七隈古墳群」　1985

福岡市教育委員会「原遺跡２」福岡市埋蔵文化財調査報告書第140集

註２，福岡市教育委員会「埋蔵文化財地名表総集編」福岡市埋蔵文化財調査報告書第12集　1971

註３，福岡市教育委員会「柏原遺跡群Ⅰ～Ⅵ」福岡市埋蔵文化財調査報告書第90・125・157・158・190・191集　1983～1988

註４，註１にあり

註５，福岡市教育委員会「有田遺跡」　1979

註６，註１にあり

註７，福岡市教育委員会「小笹遺跡発掘調査報告書」福岡市埋蔵文化財調査報告書第25集　1973

福岡市教育委員会「小笹遺跡発掘調査報告」福岡市埋蔵文化財調査報告書第34集　1975

註８，段谷地所開発株式会社「京の隈遺跡」(1976)内にあり。

註９，1976年７月に調査

註10，註１にあり

註11，註１にあり

註12，昭和62年度より発掘調査中

註13，福岡市土地開発公社「笹栗古代製鉄遺跡発掘調査報告書」　1969

註14，昭和63年の第11次調査で，中世の集落址を調査，現在整理中

註15，角川書店発行福岡県地名大辞典1988による。

註16，東の方から井相田遺跡，比恵遺跡群，那珂遺跡群，南八幡遺跡群，五十川遺跡群，浄泉寺遺跡，野多目Ｃ遺跡，片江辻遺跡，藤崎遺跡，有田遺跡，広石遺跡群，吉武遺跡群，飯盛谷遺跡，羽根戸原Ｃ遺跡，羽根戸宮遺跡，都地南遺跡など16遺跡である。

註17，福岡市教育委員会「トヲナシ遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第128集　1986，「南八幡遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第181集　1988

註18，担当者の加藤良彦氏のご教示による1987年～88年調査

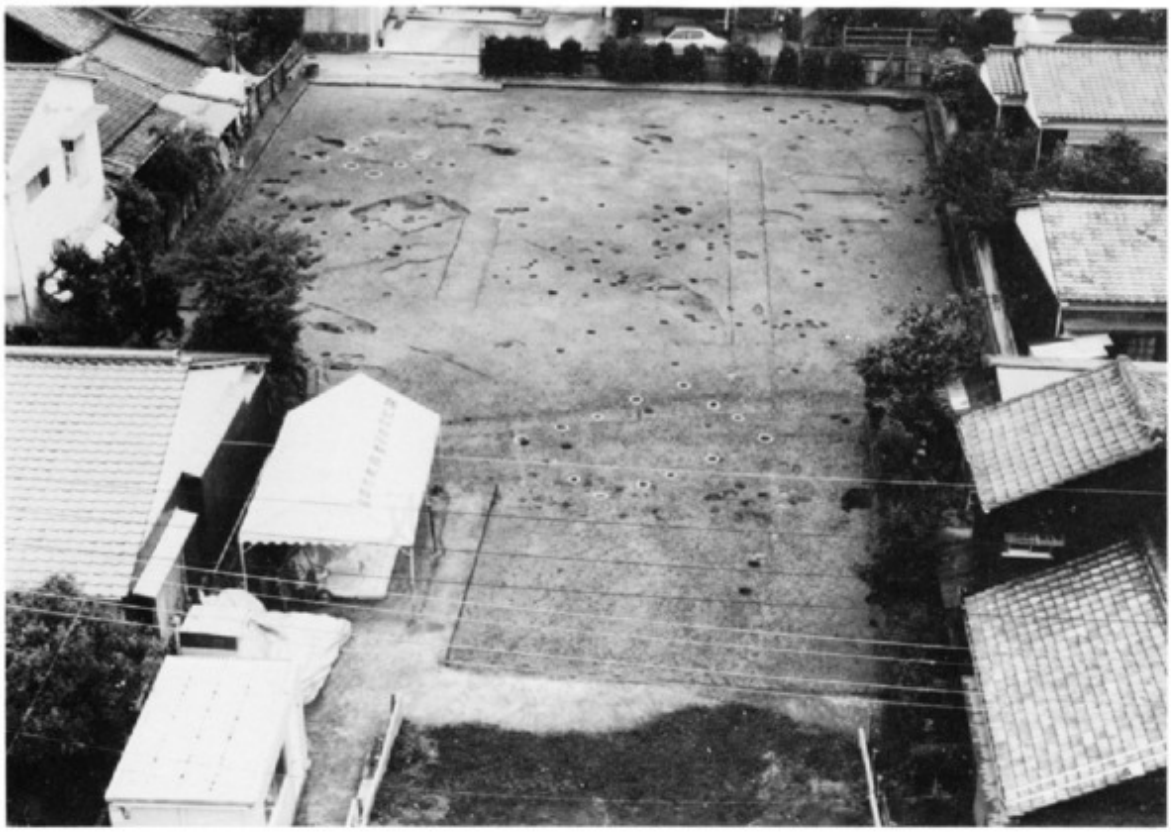
註19，福岡市教育委員会「羽根戸遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第134集　1986

別府第1次調査

Tab.4　別府1次調査遺物登録対照表

遺構名	遺物番号	遺物登録番号	挿図	図版	遺構名	遺物番号	遺物登録番号	挿図	図版
SC01	01	861300005	24	15		43	861300044	29	16
	02	861300006				44	861300031		
	03	861300003				45	861300027	30	16
	04	861300007				46	861300028		17
	05	861300004				47	861300032		
	06	861300002				48	861300030		
	07	861300001			SK08	49	861300058	34	17
	08	861300014				50	861300056		
SK01	09	861300010	27	15		51	861300057		
	10	861300008			SK09	52	861300059	34	17
	11	861300009			SK10	53	861300060	34	17
	12	861300011			SD07	54	861300095	34	17
SK02	13	861300018	27	15	SX04	55	861300061	34	17
	14	861300014			Pit出土遺物	56	861300104	34	17
	15	861300019				57	861300100		
	16	861300017				58	861300101		
	17	861300016				59	861300102		
	18	861300012				60	861300103		
	19	861300015				61	861300099		
	20	861300013				62	861300106		
	21	861300020				63	861300105		
SK07	22	861300055	29	17		64	861300097		
SK08	23	861300052	29	17	包含層遺構面出土遺物	65	861300064	36	17
	24	861300053				66	861300062		
	25	861300054				67	861300063		
SK03	26	861300040	28	16		68	861300066		18
	27	861300039				69	861300065		
	28	861300050				70	861300073		
	29	861300051				71	861300075		
	30	861300046				72	861300107		
	31	861300045				73	861300078	38	18
	32	861300047				74	861300079		
	33	861300041				75	861300081		
	34	861300042				76	861300087		
	35	861300037				77	861300089		
	36	861300034				78	861300086		
	37	861300038				79	861300093		
	38	861300033	29	16		80	861300090		
	39	861300022				81	861300091		
	40	861300029				82	861300092		
	41	861300035				83	861300109	39	18
	42	861300043							

図　　版



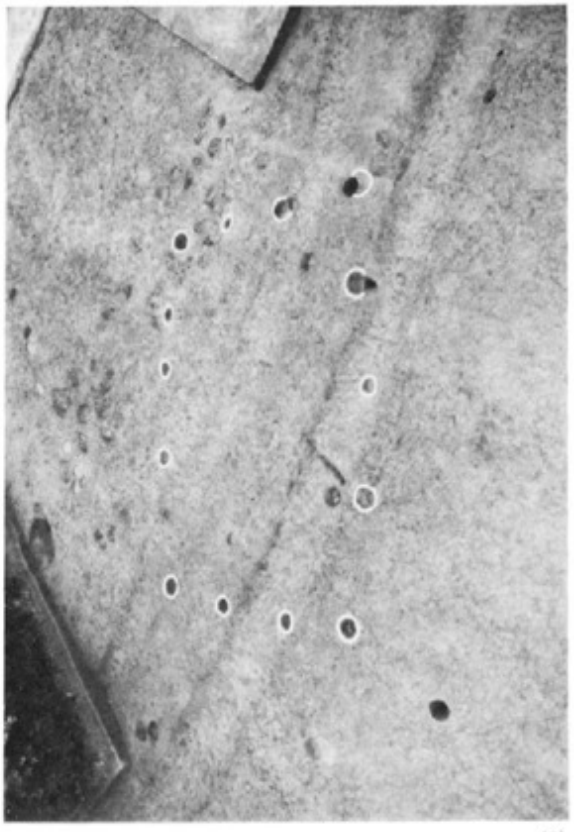
(1)

(2)

(1) 調査区全景（北から）　(2) 調査区全景（南東から）

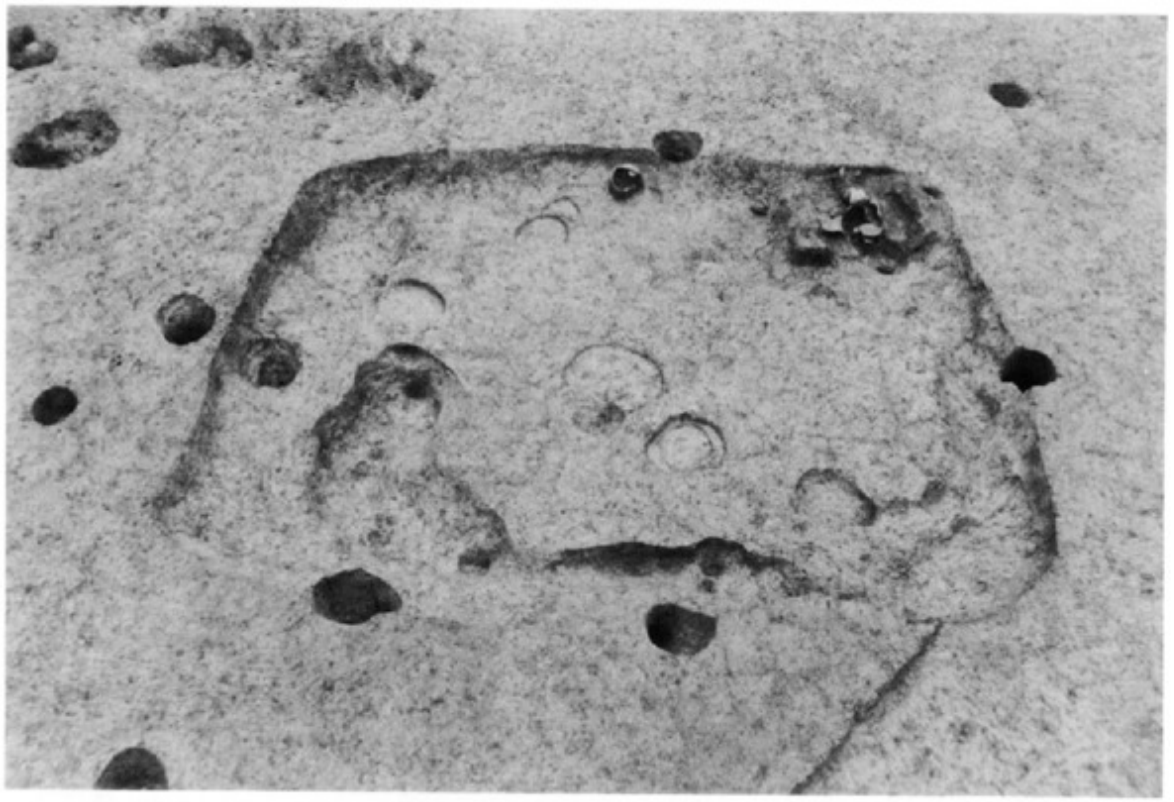
(1)

(2)



(3)

(1) SD01（北から） (2) SB01（西から） (3) SB02（南から）

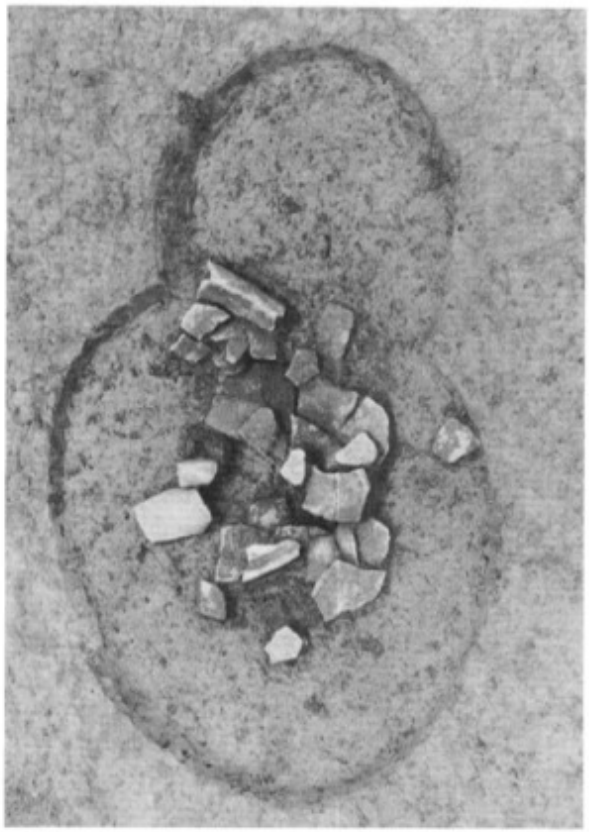


(1)

(2)

(3)

(1) SC01（北から）　(2) SC01カマド（北から）　(2) カマド断ち割り状況（北から）



(1)

(2)

(3)

(4)

(1) SK01（東から） (2) SK02（南から） (3) SK03（南西から） (4) SK03完掘状況（南西から）

PL. 14

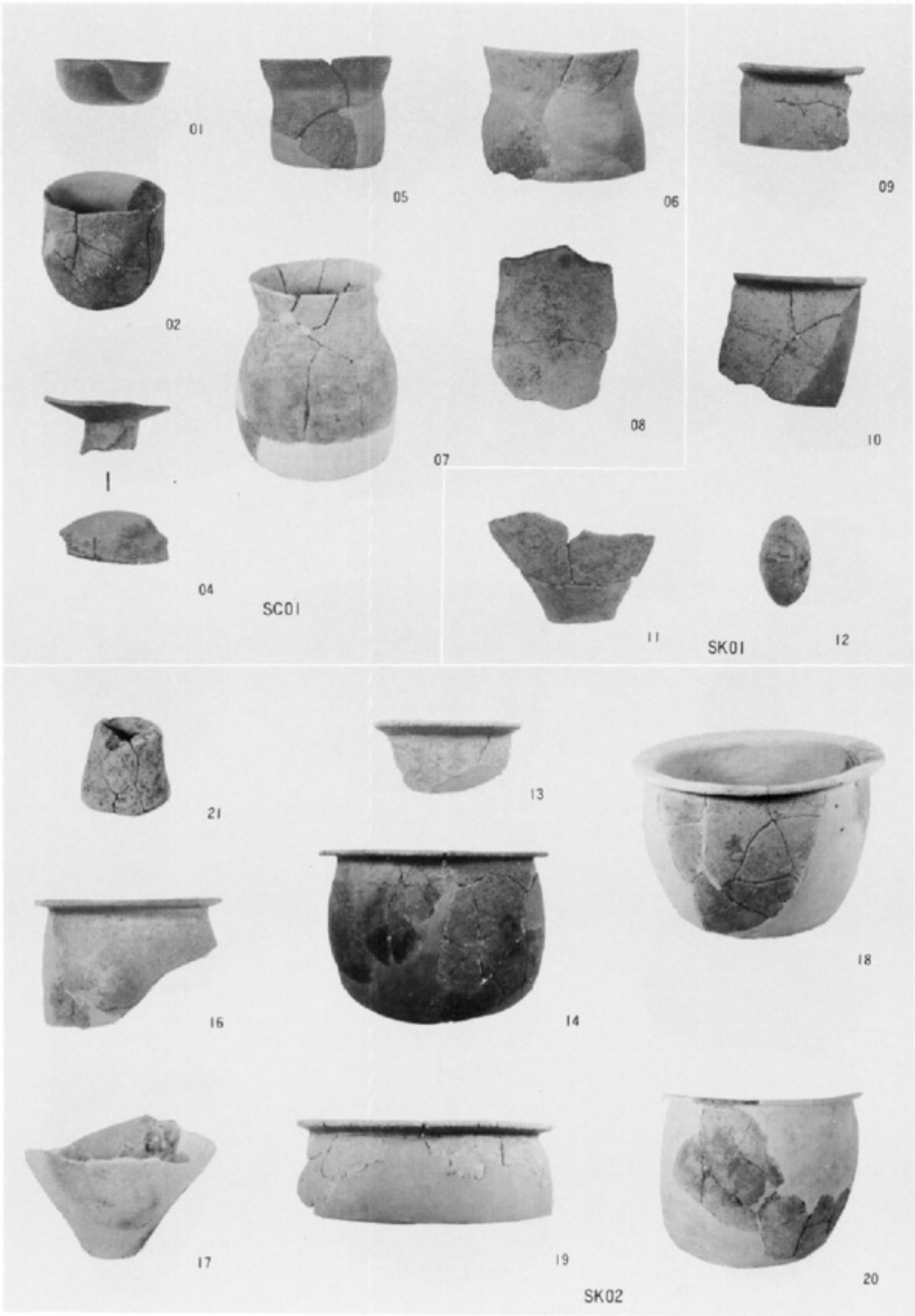
(1)

(2)

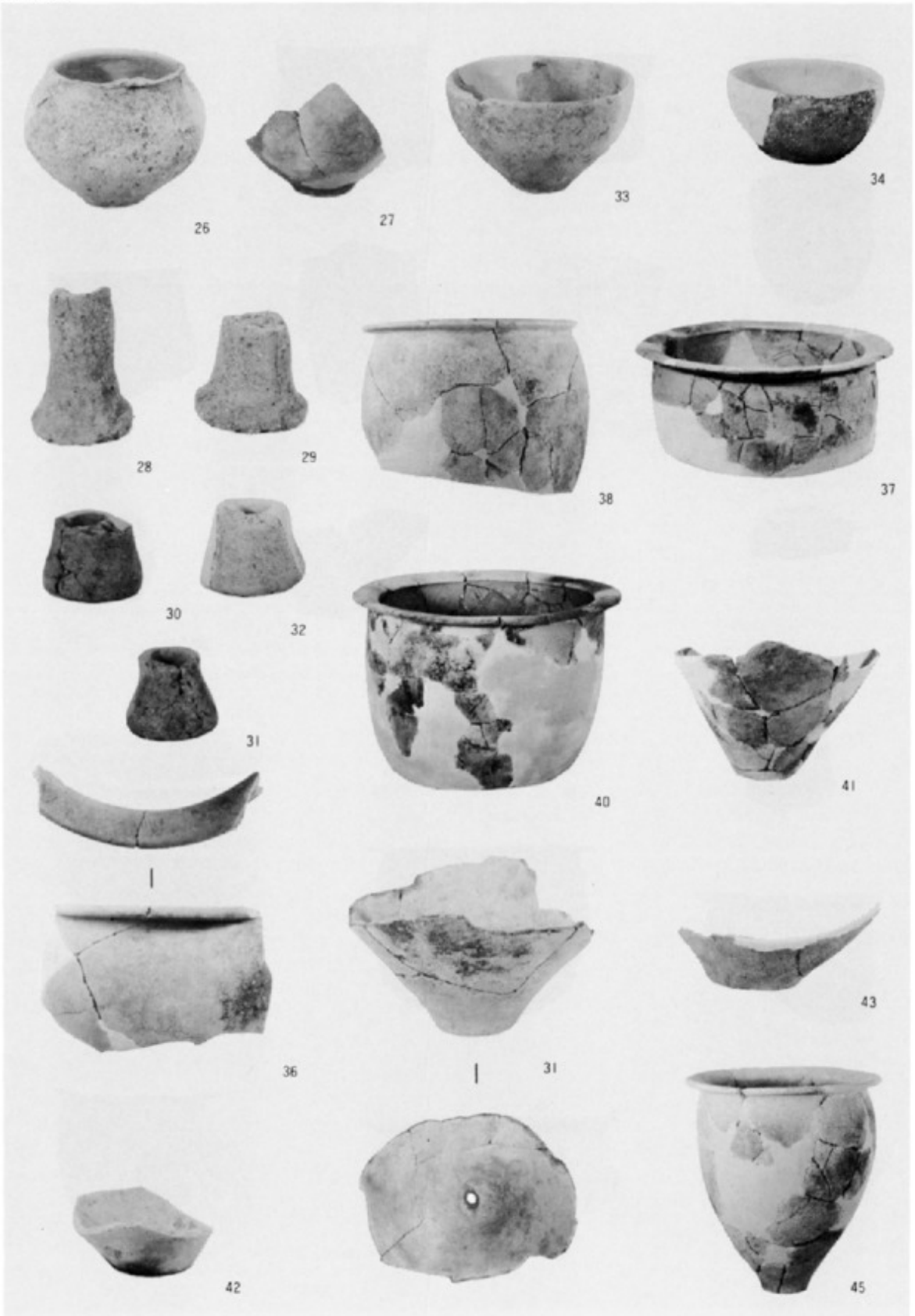
(3)

(4)

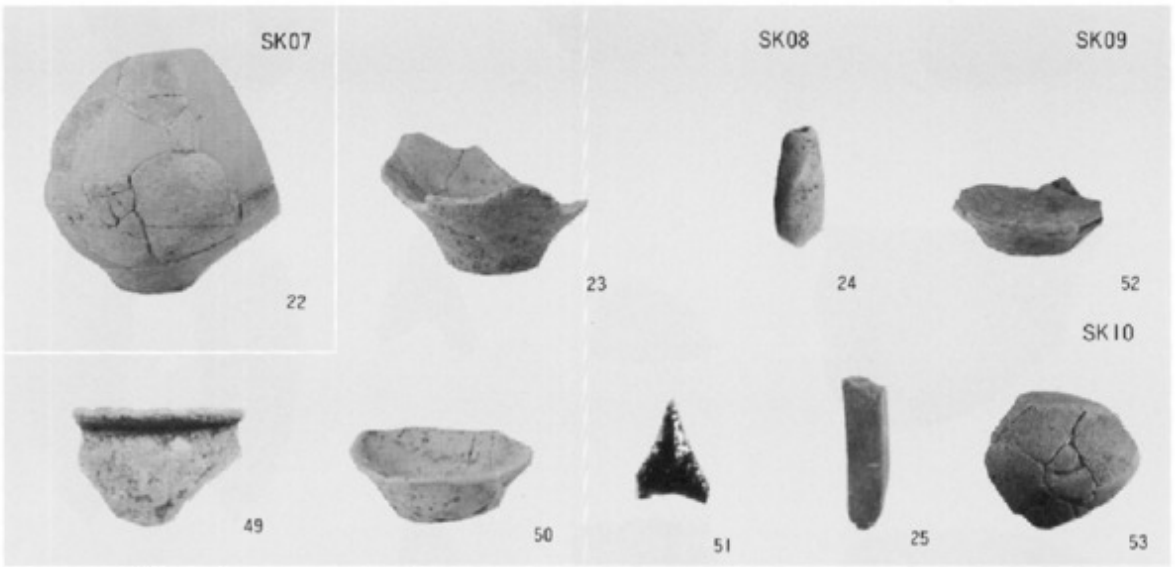
(1) SK07（北から） (2) SK08（東から） (3) SK09（南から） (4) SK10（北から）

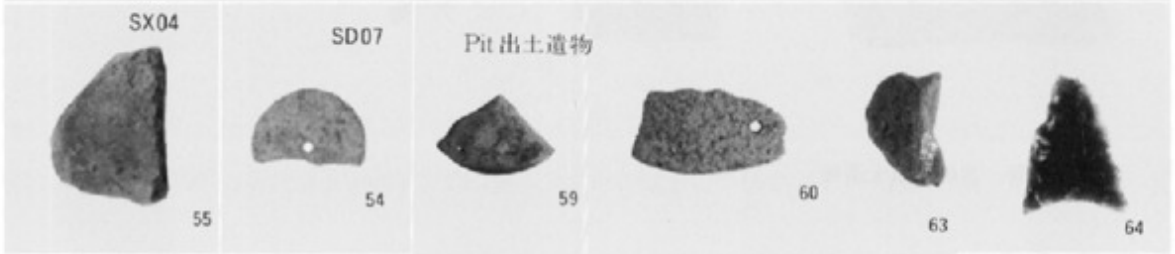


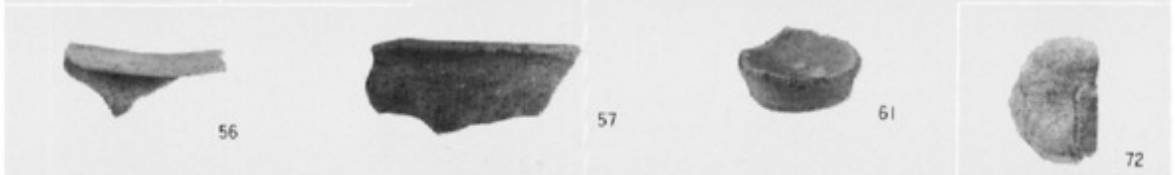
SC01・SK01・02出土遺物



SK03出土遺物

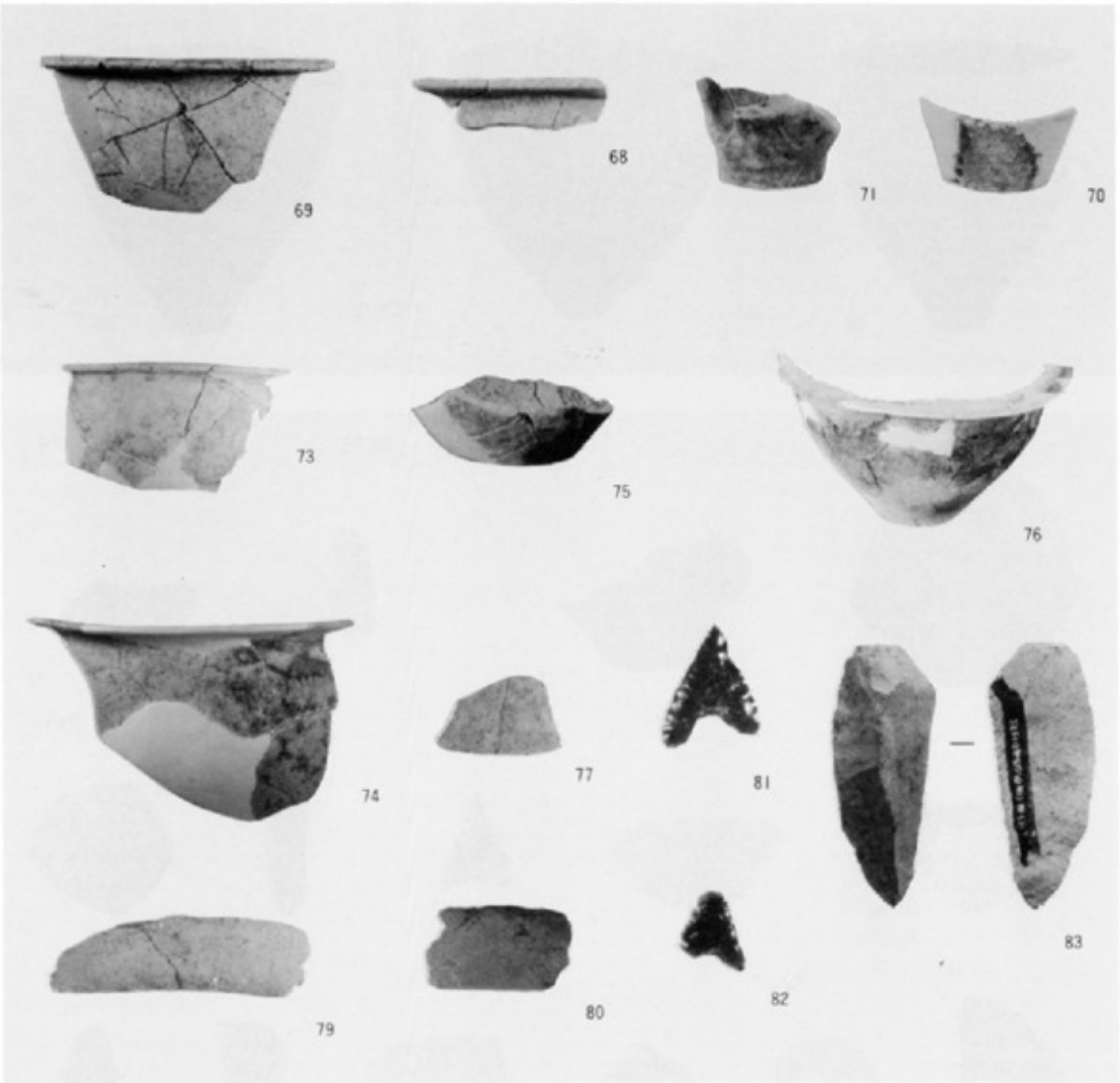






包含層，遺構面出土

土坑，溝，包含層出土遺物



包含層，遺構面出土遺物

福岡市西部地区
埋蔵文化財調査報告
—II—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第213集

1989年3月31日発行

発行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1−8−1

印刷　博巧印刷株式会社